しゝ。

ト右の文句の内、祝詞の合方をあしらひ、鳴物打合せ隨光境上の四方を拜し祈る心にて、護摩の煙を見てびつくり思入あつて、前向になり、

隨光　はて心得ぬ、最前といひ今もまた火中へ投ずる供物は飛び散り、陽氣盛んと燃え立つ護摩の火、煙りは陰に燻ぼりて内外に結ぶ印相と順序の違ふは心得ず、今日まで修したる行法へ妨げなす者ありて、願主の念願空しくなれるや、やゝゝゝゝ、さりながら今日まで唱へ込んだる明王天部分類の眷族我が修する魔縁に引かれて力を添へ、などか驗のあらざらんや。なにこれしきに撓むべき、只管祈りて威力を見せん。（トよろしく祈りのこなし、此の時上手杉戸の内にて）

近習二人　やあ、其の祈り暫く待て。

隨光　何と、

ト小鼓入りの合方になり、上手より掃部頭半素袍侍烏帽子にて、手に中啓を持ち出る、後より近習二人着附繼上下の裝にて弓矢を持ち、附添ひ出來る、隨光掃部頭を見て、

我が行法を止めしは、何人なりと思ひしに掃部頭殿ならずや、何がゆゑに拙僧が、修法の最中妨げめさる。

掃部　おゝ、止めしは其の方が修する所の行法を訝しく存ずるゆゑ、最早祈禱いたすに及ばぬ。

隨光　こは以ての外の其の一言、將軍家の御歸依によりて天下の祈願所を命ぜられ、大僧正の官ある某を止め、その上に勤行に不審ありとの批難をなすは、ム、分つた、今出頭の出羽殿の羽振のよきを羨しく、難癖つけんと邪魔めさるか、但しは又、綱豐殿の奇病を受け、熱氣に犯されての囈言か。また本性で言つたのなら、掃部殿でも老臣でも、其分には差し置かぬぞ。

掃部　阿黨の臣等が推擧を以て、御祈願所ともつてうされ大僧正の官を受くれど、汝の行法試し見るにその意を得ざる修法ぶり、それゆゑ祈禱いたすに及ばぬ。

隨光　やあ將軍家の許可によつて大僧正に任官なし、祈禱所を司れば私も一個の天下の役人、それをかれこれ言はるゝは、將軍初め有司等の眼識が違ふと申さるゝや。

掃部　はゝあ、いしくも我を難ぜしよな、將軍家お眼識違ひ、時の有司が計らひの惡しきを末世へ遺さじと思ふがゆゑに此の對論、我今汝に不審の條々、一々糺明いたさんが速かに返答なすや。

隨光　面白し、何の不審かお尋ねあれ、申し閉いてお目に掛けん。

掃部　然らば問ふぞよ。

隨光　さあ、疾く〳〵とお尋ねあれ。（ト兩人よろしく思入あつて、音樂の鳴物になり、）

掃部　その方將軍の命を奉じ、營中に壇を設け御祈禱を勤むるとて、見れば美しき袈裟法衣を無慘にも膝下に敷きその上へ端座なすが、此の濃き紫の法服錦の袈裟は大僧正の官位なければ着用はならぬ品、それを膝下に引敷くは足下に掛くるも同じこと、これ將軍家を蔑ろにせしにはあらずや、又其の方が身に纏ふ薄墨染の麻衣へ逆に梵字を書きたるは、これまで汝が修す所正法とは思はれず、不審の二ケ條言譯ありや。

隨光　その二ケ條より先づ先きに、拙僧御邊に告ぐべきは綱豐殿が病の根ざし、性來虛弱にしてお附の人々老臣達、御幼少の時分より百事注意あるべきを等閑に過すゆゑ、疳火昂ぶり逆亂となり、終に天魔の障碍ありて醫療も屆かず、加持祈禱も世の常の祈りにては霊験なく、早や御一命も危ふきゆゑ、今となりては僧正僧都の位ありとも何かせん、それゆゑ官位の衣を捨て、膝下に敷き出家本來の面目も頭陀乞丐の姿となり、日夜水浴の垢離をとりて身を淨め、行法の淨衣に梵字を逆に書きたるも、時に取つての行者の氣轉。

掃部　やあ汝、我難問を掛くるに及んで、いしくも言葉を繕ひ飾り、綱豐公の御爲めに水を浴び心を碎き御全快を祈ると申せど、綱豐殿には性來暗愚虛弱と蔑なすは、正しく君を蔑するならん。

隨光　や、

掃部　それのみならず、密法祕密と辯を以て云ひ解くとも、逆に梵字を認めしは、よも正法とは申されまい、又この祈りには何の神、何の佛を以て本尊として拜するや、此の儀は如何に、

隨光　その本尊を祕する時は猶お疑ひのあらんなれば手短かに申し述べん、唯今祈り奉つるは佛も數ある其中にて、諸宗ともに渴仰する西方淨土の彌陀如來、

ト これにて掃部頭訝しきこなし。

なれども彌陀の本願は、罪深き衆生を淨土へ接受あらんが爲め、柔和忍辱の御背、されども濟度すべからざる惡逆の者共あり、それを助くる爲めに六字の明王と現じたまうて世に怖ろしき忿怒の形相、この明王を修すれば、君へ禍ひなす所の天魔邪神も退散なすゆゑ、これ此の如く生類を贄となして祀りし上、またこれを退くの法を修するも則ち祕密、逆まに書く文字なども是れまた言下に說くを得ず、斯の如きを俗人に說くことあらば、越三魔耶の罪おそるべし。

掃部　汝方便を以て祕密など、聖めかすといへども、我に於ては信用せず、假令六字の明王たりとも元彌陀佛と申すからは、其の法を修するの壇へ贄を供する事の不審は免れず、この儀は如何に、返答ありや。

隨光　はて執念くも難ぜしよな、既に唐土前漢以來國王替りて律を定め、牛馬を斬つて天地を祀る、まして日本の將軍の跡目となるべき大將の危急を祈るに、なにこれ式の生類を殺すとも、よも妨げのござらうや、おろか〳〵。

掃部　やあ、言ふな隨光、明煌々として金色鋭く、亂れ燒刄に冷々と殺氣を含むは、世に類なき名作ながら、當武將家に害ありて神君以來嫌はせたまふ、中身の銘は村正ならんと、老眼ながらも見拔きし眼力、

隨光　や、

掃部　あざとき汝が邪法にて、是れへ點ぜし燈明の大燈三つ小燈六つ、これ天剛星三十六員、又大燈七つ小燈二つ、是れ地熱星の七十二員、則ち天地を逆まに供へ、不吉を表す村正を中央に据ゑ祈るからは、咒咀調伏に相違あるまい。

隨光　むゝ、

掃部　まだ其の上に、掃部頭が行ひし蓑目の法の鳴弦にて、障碍立ち去り綱豐公には、御惱忽ち御平癒なるわ。

隨光　なに、御平癒とな、むゝ。

掃部　最早脫れぬ賣僧の隨光、君を暗愚と申せしは、調伏なりと白狀なすか。

隨光　さあ、それは、

掃部　逆に記せし梵字にも、正法明るき返答あるや。

隨光　さあ、それは、

掃部　彌陀の利劍と唱へたる、その村正に言譯あるか。

隨光　さあ、

掃部　伏罪なして、御所置を待つか。

隨光　さあ、

掃部　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵、

掃部　賣僧、返答なゝなんと、（トきつといふ。隨光もう是れまでといふこなしにて）

隨光　掃部頭が武の德にて、咒咀調伏も消え果てしか、ちえゝ殘念やなあ。

掃部　邪は正に敵し難し、現在所持なす村正が君を咒咀なす顯はれ口、斯程の陰謀企つには荷擔の輩のあるは必定、一々姓名白狀なし、死刑の御所置を相待て隨光。

トこれにて掃部頭、近習の持ちし弓を取り、兩人へそれと目くばせする、近習兩人隨光の手を取り境上より引きおろし引きすゑる、掃部頭は件の弓にて境上を打ち散らすと、正面の村正隨光の前へ落ちるを、隨光手早く取り、

隨光　やあ愚や直孝、逆意と知つて企つ大望、露顯なすとも荷擔の者を何とて白狀なすべきや、その棟梁は斯くいふ、（ト村正を腹へ突き立て）隨光、

掃部　流石は惡僧、健氣な振舞。

隨光　いざ、介錯。

ト掃部頭刀をひらりと突出す、隨光引き廻しながら首を差延べる、双方よろしく木の頭、キザミに付き早めし時の太鼓、カケリにて、

ト幕引付けると、

掃部　えい、

ト太刀音して、跡シヤギリ。

ひやうし幕

五幕目

柳澤屋敷の場
三間邸宅の場

〔役名――三間右近、加納大隅守、曾根權太夫、百姓五郎作、植木屋次郎兵衛、同松八、同松六。三間の下女おしづ、同母おせつ、屋敷女房おくら、同おせき、其他。〕

（柳澤屋敷奥殿の場）――本舞臺三間の間中足の二重、本舞本緣附き、正面一間床の間、續いて袋戸棚、違ひ棚この下銀襖、上の方一間折廻し塗骨障子家體、下の方後へ下げて網代塀、蒼日形の石燈籠、振りよき松の大樹、總て柳澤屋敷奥殿の體。爰に植木屋次郎兵衛、松八、松六三人紺の腹掛同じく股引半纏草鞋、右の松の根を鍬でならして居る、此の見得調べにて幕明く。

松八　若し親方、爰が表だと思ひますが、ちよつと見ておくんなさい。

次郎　もう少し左りの方へ廻したいやうに思ふが、然しお座敷から見たら、爰等で丁度よからうか。

松六　何にしろやかましやの曾根さまに、お座敷から見てお貰ひ申すがいゝ。

次郎　今に爰へおいでになつたら、とつくりと見てお貰ひ申さう、まあ一服やるがいゝ。

ト三人下に居て擦火打で火を打ち、煙草を呑みながら、

松八　時に親方、大きな聲では言えねえが、公方樣が戌の御年で犬を粗末にするなといふ、嚴しいお觸

が出ましたが、こんな困ることはない。

松六　いや困るの困らねえのと、先月家で可愛がる雌犬に三疋子が産れ、やれお届けだの検分だのと、六七日暇を費やした。

次郎　實に町方でも在方でもこんな困ることはないが、譬にもいふ泣く子と地頭、名に負ふ日本六十餘州の主といはるゝ公方様、どんなお觸が出ようとも上と下では仕方がねえ。

松八　何にしろ馬鹿々々しいは、犬が子を産む度毎に、その産んだ子の牝牡から毛色を詳しく書面に認め、犬役所へ訴へるといふは、實に前代未聞の話しだ。

松六　この間も場末の方で、鶏を取つた犬をぶち殺して入牢になつたといふことだ、是れが後の世になつたら誰も本當にしやあしめえ。

次郎　こんなことは話し草に書き遺して置きてえものだ。

松八　それはさうと、日差しはもうかれこれ八ツ時分だが、

松六　早く御検分を受けたいものだ。（ト八ツの時計合方になり、奥より權太夫縞上下一本ざしにて出來り、）

權太　植木屋次郎兵衛、最早松は植ゑ附けたか。（ト言ひながら二重に住ふ。）

次郎　これは曾根さまでござりますか、只今御検分を願ひませうと存じました所でござります、先づ此の邊では如何でござりませう。

權太　譬に申す餅は餅屋、客座から見た所が丁度松の正面にて、一段木振りが好う見える。

次郎　少し右へ廻りました方がよろしからうかと存じますが、御座敷からは如何でござりまする。

權太　いや植所といひ木振りといひ、聊か申す所はないが、少し邪魔な枝もあれど、御前へ御覽に入れた上、一枝おろして貰はうか。

次郎　左様なら今日は、この儘にして置きませう。

權太　最早お退りに間もあるまいから、暫時休息いたすがよい。

次郎　有難うござりまする。（ト奥より袴裃の近習出來り、）

近習　はつ、申し上げます。

權太　おゝ何事ぢや。

近習　只今三間右近殿、御入來にござりまする。

權太　それ待兼ねたり、これへと申せ。

近習　はつ、（ト引つ返して入る。）

權太　こりや次郎兵衛、只今これへ客來あれば、其の方共はお臺所で、一銚子貰ふがよい。

三人　それは有難うござりまする。

權太　身共が左樣申したと、久太夫へ申し傳へよ。

次郎　畏りましてござりまする。

松八　左樣なれば、御遠慮なしに、

松六　一杯頂戴、

三人　いたしまする。

ト調べになり、三人下手へ入る、合方になり、下手襖を明けて三間右近上下一本さし、刀を提げて出來る、權太夫見て、

權太　これは〳〵三間氏、ようこそ御入來なされしぞ。

右近　先刻の御狀により、取り敢ず參上いたしましてござる。

權太　何は兎もあれ先づ〳〵これへ、（ト權太夫下手へ下る。）

右近　然らば御免下さりませう。（ト合方になり、右近會釋なし、上手へ住ひ思入あつて）扨て此度は圖らずも、又もや御加增仰附られ家の面目此の上なし、大慶至極にござりまする。（ト辭儀をなす。）

權太　上樣はじめ北丸樣のお茶のお相手めさるので、お上通りのお首尾よろしく、遠からずして萬石取に御昇進なさるであらう。

右近　これと申すも御當家のお引立てゆゑ思はぬ立身、お禮の申し上げやうもござりませぬ。

權太　御存じの如く手前主人も、小身よりして段々と立身出世なせしゆゑ、三間氏は榮に勝れ上のお役に立つべき御器量、どうか我等同樣に御出世おさせ申し度くと常々申し居りますれば、必ず惡いことはござりませねば、御精勤をなされませ。

右近　なか〳〵以て御當家樣とは雲泥萬里の拙者ゆゑ、何のお役にも立たざれど父が千家の茶道を好み聊か習ひ覺えたる拙き業が御意に適ひ、茶道の御指南いたしまするは、實に有難きことに存じまする。

權太　拙者などは幼少より武道にばかり心を委ね、風雅の道に疎ければ上つ方のお相手ならず、それに引替へ尊公には詩歌連俳香茶の湯萬事に秀でゝござるゆゑ、上樣のお相手に御同席召さるといふは、まことに以て藝の德、お羨ましいことでござる。

右近　御同席をいたしまするは藝の德にはござりまするが、それ以て御當家の御引立に預かるゆゑ、此の上共に御主人へ、よろしくお執成しを願ひまする。

權太　如何なる御緣か、主人にも、貴殿を兄弟同樣に思召されてござるゆゑ、遠からず御養女を御内室

に差上げて、御親子の御縁をお結びあるやう、お取持ちいたしませう。

右近　左樣相成る上からは、殿中に於て肩身も廣く、千萬有難い儀にござりまする、（ト右近庭を見て、）見ますれば御庭前に、お手入れがござりましたな。

權太　主人の好みで松を一本これへ植ゑさせましてござるが、居所はよろしうござりませうかな。

右近　お出入りの次郎兵衛は、茶事の心得がござりまするから、申し分はござりませぬが、右へ差出し一枝が、少し邪魔かと存ぜられます。（ト權太夫膝を打つて、）

權太　まことに十指の指ざすところ、拙者も左樣存じました、早速枝を切らせませう。

右近　あの一枝を取りましたら、月の夜などは葉越しにさし、又一しほでござりませう。

權太　（思入あつて、）扨今日手前主人御面會なせし上、御密談申し上げ度き仔細あつて、尊公をお迎ひに上げましたるが、先刻上より急御召しに出仕いたしてござりまする、それゆゑ仔細は拙者より詳しく申し上げるやう、申し置かれましてござりまする。

右近　物數ならぬ拙者めに、御密談とござりまするは、

權太　貴殿に限る御用あつて、お頼み申し度き儀がござるが、お聞き濟み下さりませうや。

右近　如何なる御用か存じませぬが、御當家よりのお頼みならば、假令一命召さるゝとも決して否みは申しませぬ。

權太　しかと左樣でござるな。

右近　はて、僅か百俵の御家人が今五百石頂戴なし、御旗本に登庸されしは全く御當家のお執成しゆゑ假令何樣のことなりとも、此の身に叶ひしことならば、

權太　御承引下さりますとな。

右近　如何にも、

權太　それは千萬忝けない。

右近　して、お頼みとおつしやりますは、

權太　貴殿を見込んで出羽守が、折入つてのお頼みは、私ならぬ天下の爲め。

右近　え、天下の爲めとは、

權太　他聞を憚る一大事、御誓言が承はりたい。

右近　心得ました。（ト誂への合方になり、右近小柄を抜き脇差をぬきかけ、金打をなし、）他言いたさぬ誓ひの金打。

權太　其のお誓ひを見る上は、（ト合方きつぱりとなり、權太夫立上り上下を見廻し、元の座へ住ふ。）

右近　して、某へお賴みとは。

權太　主人出羽守がお賴みは、他聞を憚る一大事、物に譬へて申さうならこれなる庭の松の大樹、右へ差出しあの小枝が目障りゆゑ、其許に、おろしてお貰ひ申したいのぢや。

右近　右へさし出しあの一枝、目障りゆゑにおろせとは、お心ありげなそのお詞、して松の小枝と仰せられるは、

權太　松は則ち松平、世界に一木の大樓は將軍、その邪魔になる小枝と申すは、甲府綱重公のお胤なる今西丸の綱豐公。

右近　え、（トびつくり思入）

權太　すべて家屋の建方から庭の飛石、樹木の植ゑ方茶にあらざれば風韻薄し、その茶を以て邪魔な小枝を、貴殿の業で人知れず落してお貰ひ申したい。

右近　むゝ、して又小枝が邪魔になるとは。

權太　西丸樣は甲府宰相綱重公の御嫡子にて、當上樣の甥君ゆゑ御順養子になされし所、北の丸樣に上樣の御實子御出生ありしゆゑ、御親子の御情愛にて、御實子を以て六代の將軍職になされ度けれど、御養子あれば差し置いて御家督相續さし難く、諺にいふ目の上の瘤は則ち綱豐公、それゆゑ屢々上樣より主人出羽守へ御相談、あらはにそれと仰せなけれど御心中御察し申し、護持院の大僧正に呪詛調伏なさしめたれど、井伊老侯の墓目に挫かれ、祈念の驗あらざるゆゑ、明日北の丸の御殿に於て御茶の湯のあるは幸ひ、その節貴殿の計ひにてお茶のうちへ毒を仕込み綱豐公へ差上げて、御目障りの松の小枝、おろしてお貰ひ申したい。（ト是れにて右近びつくりせし思入あつて、）

右近　すりやお賴みとおつしやるは、明日北の丸のお茶席にて、綱豐公へ毒藥をまゐらせ、お命斷てと仰せらるゝか。

權太　如何にも主人出羽守、貴殿を見込んで密事のお賴み、その源は松の大樹、幹の障りになるべき小枝を、おろすも則ち上への奉公。

右近　茶道を以て是れまでに出世なしたる某ゆゑ、否と言はれぬお賴みなれど、まさしく主君を弑することは、

權太　然らば貴殿は主人の賴みを、御得心下されぬか。

右近　この儀ばかりは只管に、御用捨願ひ奉つる。（ト右近思入あつて辭儀をなす、權太夫思入あつて、）

權太　それは近頃卑怯でござる、主人が賴みは善惡とも違背せぬとたつた今申されたではござらぬか。昔が今に國の爲め、天下の爲めに主親を討ちし例しもあること故、これが西丸附といふではなし、

元より貴殿は將軍の御家人にてはあらざるか、僅かの内に五百石まで御加增ありしは斯かる時御用に立てん思召し、亂世ならば御馬前の討死なすが忠義なれど、治世に於ては善惡とも主命もどかず勤むるが、臣下の者の忠義ゆゑ、出羽守が上樣の御心中をお察し申し、貴殿へ密事の此のお賴み、お聞き入れ下されませぬか。

右近　さあ、それは、

權太　假令如何なることなりとも、決して否やは申さぬと、仰せありしは僞りなるか。

右近　全くもつて、

權太　さなくば主人の密事のお賴み、お聞き入れ下さるか。

右近　さあ、

權太　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

權太　大事を漏せし三間氏、御得心下されずば、一命お貰ひ申さにやならぬ、御覺悟あつて此の場にて否やの御返事承はりたい。（トきつと言ふ、右近じつと思入あつて、）

右近　是れまで出身出世なせしも全く御當家の御推擧ゆゑ、御恩を思うて、此の儀勤めまするでござりますする。

權太　すりやお聞き入れ下さりまするか。

右近　如何にも承知仕つる。（ト右近は死ぬ覺悟の思入、權太夫は悅ぶ思入にて、）

權太　それは千萬忝ない、主人に於ても嘸滿足、斯かる企ていたすのは道にあらざることながら、此の儘置けば末々は二木の松の爭ひに、亂の基ると存ずるゆゑ、連なる枝をおろすのも、大樹へ盡す主人が忠義。

右近　天下の無事を思召す御心中を推察なし、御目障りの一枝を、（ト右近松の枝へ思入あつて、緣端へ出で拔打ちに松の枝を切落し、差添を納め、）まツこのやうに除きなば、

權太　それにて松の木振りも直り、芽組む緣の若君が、

右近　大樹の接木となる時は、

權太　松吹く風も穩かに、

右近　ます〳〵茂る松平、

權太　常磐御前にあらねども、

右近　操を捨てし松の色にて、

權太　やがて天下は、

右近　え、

權太　いやさ、これも天下の、

兩人　お爲めぢやなあ。（ト兩人心々の思入あつて、）

右近　何れ明朝參上いたし、お打合せ仕らん。

權太　何卒主人にお逢ひ下され、

右近　御獻立から諸事萬端、

權太　他聞を憚かる圍ひの手續き、

右近　御密談申すでござる。

權太　御入來お待ち申しまする。

右近　御下城ござらば、何卒よしなに、

權太　申し傳へるでござりまする。

ト辭儀をなす、此の時若黨太緒の草履を持ち出で、平舞臺へ直し、

若黨　お草履は、これへ持參いたしました。

右近　これは憚り、（ト言ひながら平舞臺へ下り草履をはき、以前の切落せし松の枝を取上げ思入あつて、）あゝ、同じ枝にてありながら、

權太　や、（ト右近松の枝を打ち捨て、）

右近　いや、枯れるも時の盛衰ぢやなあ。

ト唄になり、右近是非なきこなしにて花道へ行く。若黨附添ひ行くゆゑ、

いや、お見送りには及びませぬぞ。

若黨　はつ、

ト又唄になり、右近思入、若黨附添ひ花道へ入る。權太夫後を見送り思入あつて、

權太　かねて主人の心中を某推察なせしゆゑ、奸智に長けし護持院の隨光殿を語らひて調伏なせしが、凡眼ならぬ井伊の親仁に見顯はされ、事ならざれば又候や此の密計をたくらみしが、日頃の恩義に三間氏一味同心なせし上は、事成就疑ひなし、明日北の丸のお茶の湯にて、彼の御方が御逝去あらば、御實子ゆゑに御跡目はお高の方さまのお腹にやどせし君のお胤の綱千代樣、さうなら時は百萬石の御墨附も世に出て、主人は加州同樣に天下二軒の大々名、然らば家老の某も萬石取りの大名格、はて悦ばしき、（ト頷くを道具替りの知せ、）幸先きぢやなあ。

ト唄になり、權太夫につたりと思入、よろしく道具廻る。

（三間屋敷の場）――本舞臺三間の間常足の二重、正面床の間、下手銀張り地袋戸棚、此の上に刀掛け眞中茶壁瓦燈口太鼓張りの襖、上の方一間折廻し腰張の茶壁、角がらの入口太鼓張りの襖、出入あり、下の方一間玄關正面雲母形の襖、此の下黒塀にて見切り、二重と玄關の間低き四つ目垣、總て三間屋敷の體。二重に白木の臺へ紙に包み水引を掛けし反物を載せて飾り、平舞臺におくら、おせき屋敷女房のこしらへにて住ひ、おしづ島田髷下女のこしらへにて控へ居る、此の見得前の唄にて道具廻る。

くら　これおしづどの、御隠居さまはお家にか、右近さまの御加增を、

せき　御悦びに上りましたと、一寸奥へさう申して下さんせ。

しづ　只今お目に掛りますから、先づお煙草でもお上りなされませ。（ト煙草盆を出す、兩人臺を見て、）

くら　これおせきさん御覽なされ、あれに飾つてある御進物は、皆反物でござんすな。

せき　何れからの御進物か、お福分けに一反づゝ頂戴したいものでござんす。

くら　又そんなことを言はしやんすか。

しづ　これは先程神田橋の柳澤樣の御奥から、旦那樣をお祝ひなされし御進物でございます。

くら　そんなら是れは上樣の御意に入りの、柳澤樣からの御進物でございますか。

せき　右近樣はお茶がよいので御指南をなさるゆゑ、柳澤樣のお引立てゞ先達てから度々の御出世、

くら　お羨ましいことで、

兩人　ござりますわいな。

ト合方きつぱりとなり、奥よりおせつ二つ齬紋付の羽織、老けたる後家のこしらへ、煙草盆を提げて出來り、

せつ　これは御隣家のお二人さま、ようおいでなされましたな。

くら　承はれば右近さまが、又々百石御加增になられましたと申すこと、

せき　誠にお目出度いことでござりますから、一寸お悦びに上りましたわいな。

せつ　御繁用でござりませうに、お悦びにおいで下さりまして有難うござりますわいな。

くら　昨年と申し又今年、引き續いての御出世は、

せき　御器量ゆゑとは申しながら、お手柄なことでござりますわいな。

せつ　未熟な茶の湯が上樣の御意に叶うて、御加增ありしは冥加至極のことなれど、武士は戰場の功がなければ家の晴れにはなりませぬ、申さば茶道は遊藝ゆゑ、手柄などゝは申されませぬ。

くら　それはあなたの昔氣質、大きな聲では申されませぬが當時上樣のお覺え目出度く、空飛ぶ鳥も落ちるほどの勢ひだといふ柳澤さま、俄に御出世なされたも戰場の上のお手柄と申すやうな譯ではなく、味なことから上樣の御意に叶うて御立身、

せき　世間で何と申さうとも、名を取らうより德の世の中、實入りのよいのがわたくし共は先づ何よりでござります。

せつ　ほんにお二人のおつしやる通り、今は治世のことなれば、いくら手柄が仕たうても御馬前にての手柄は出來ぬ、遊藝にても御意に叶ひ親に勝りし身の上に、なりしは悴が身の譽

くら　譽れ所ではござりませぬ、先づわたくし共を初めとして以前御同勤をいたしたお仲間衆がおいでになり、如何なるよい月日の下でお生れなされたことなるかと、寄るとさはるとお噂いたし羨ぬものはござりませぬわいな。

せき　それといふのも右近さまは、お茶といふ結構な藝をお持ちなされるゆゑ、それに引替へ私共の愚傳次どのは不器用にて藝といふは酒ばかり、内で寐酒は一合か僅か五勺でござりますが、御馳走酒でござりますれば、一升でも二升でもおあしが出ねば、どちらへでも直にさんじよう（三升）いたしまして、四升五升だ、最う呑めぬと申すやうになりますには六七升も呑みませうが、斯うわたくしが噂を申せば、大方家で八九升（ハツクショ）と嘘をいたして居りませう。

せき　又わたくし共の二八郎は蕎麥を喰べるが一の藝、尤も小な形ではあれど、我が背丈より蒸籠を高く積むのが自慢にて、よく人樣と賭をなし、手柄を度々いたします。

くら　どうか此の邊の藝道でお取立てになりますやう、お羽振りのよい柳澤さまへ、

せき　御推擧なされて下さりますやう、

兩人　お願ひ申しますわいな。

せつ　悴が歸りましたなら、お二人さまのお賴みを、申し傳へるでござりませう。

くら　實の所は當暮が極必迫でござりますゆゑ、玉落ち前に少しでも御加增になりますやう、お執成しを願ひます。

せき　手前勝手な事ばかり申しまして、御隱居さまには嘸御迷惑でござりませう。

せつ　丁度徒然の所ゆゑ、よい折柄でござりますわいな。（ト茶を出す。）

くら　あんまり喋べつて呑みたいところ、

せき　これは有難うござりますわいな。（ト おしづ茶を汲み來り、）

（ト兩人茶を呑む、おせつ菓子箪笥から有合ふ干菓子を紙へ取り、）

せつ　粗末なお菓子にござりますが、召上つて下さりませ。（ト出す。）

くら　これはまあ結構なお菓子を、有難うござりますわいな。

せき　定めて御到來でござりませうが、どちらからお貰ひなされました。

しづ　いえ〳〵それはお出入りの、越後屋からお取りなされましたわいな。

せき　これは麁相を申しました、大方柳澤さまからでも御到來かと存じました、御免なされて下さりませ。

くら　何にいたせ此のお菓子は、お貰ひ申して參りませう。（ト紙へ包む。）

せき　あゝもし、半分は私が、

くら　家へ歸つて分けませうわいな、（ト袂へ入れ）それはさうと御隱居さま、御仕事でもござりますなら、御遠慮なくお遣はし下されませ。

せき　私共の裏の井戸は近邊にない好い水ゆゑ、汚れ物でもござりますなら、洗濯をして上げませう。

せつ　どういたしまして勿體ない、お前さま方に其樣なことが、

くら　いえ〳〵それは昔のこと、今は御出世なされまして、わたくしどもとは段違ひ、

せき　譬へていはゞ泥鰌とお月さまほど違ひますれば、そんなことをおつしやらずと、

兩人　お遣はしなされて下さりませ。

せつ　そのうちお願ひ申しませうわいな。

兩人　左樣ならばおしづどの、

しづ　もうお歸りでござりまするか。（ト合方にて兩人門口へ出で、）

くら　慾張りましたやうなれど、玉落ち前に出世なすやう、

せき　彼の方さまへお取持を、お願ひ申し、

兩人　ますわいな。（ト稽古唄になり、兩人花道へ入る、跡おせつ思入あつて、）

せつ　人心ほど世の中に替り易いものはない、此の間までわたしなどを下目に見なせし二人の衆が、忰の出世を羨みて柳澤さまへ取持ちくれの、仕事があればしませうの、水が好いゆゑ洗濯せうのと心の知れた追從輕薄、見下げ果てたことぢやの。

しづ　旦那さまのお詞添へで早う出世が出來るやう、それゆゑあなたへ追從輕薄、今日此の頃は私にさへ、ようちやほやと言ひますわいな。

せつ　これといふのも一方ならず柳澤さまのお引立てゆゑ、あゝ有難いことぢやわいの。

ト矢張り稽古唄にて花道より五郎作脚袢草鞋尻端折り、老けたる打扮にて絲立へ蓮根を三本包み、これを背負ひ出來り花道にて、

五郎　久しく娘の便りがないから今日は尋ねに出て來たが、おれの娘にあのやうな慾のない者がどうして出來たか、親に似ぬ子は鬼子といふが、その辯器量は十人並に勝れ、心立ても佛のやう、旦那さまも御獨身ゆゑ、お膳を据ゑてこの親に樂でもさせてくれゝばよいに、はてさて困つた奴だなあ、（ト舞臺へ來り思入あつて）おゝお臺所へ行くのであつたを、うつかりしてお玄關へ來た、お庭口から御免を蒙りませう。はい御免下さりませ、二合半の五郎作でございます。

しづ　おゝ、父さんでござんしたか。（ト枝折戸を明ける。）

五郎　おゝ娘、達者で居たか、おりや死んだかと思うた。

しづ　わたしの顏を見るやいな、死んだかとは、もし父さん、何をお前言はしやんすぞいな。

五郎　さあ先々月から便りのないのに、此の二三日の夢見の惡さ、こりやてつきり煩らうてか、それとも死にでもしはせぬかと、案じられてならぬから、今日態々尋ねて來たのだ。

せつ　（これを見て）おゝ五郎作、來やつたか。

五郎　これは御隱居さまでござりますか、まことに御不沙汰をいたしました。

ト内へ入らうとするをおしづ留めて、

しづ　あゝもし、お臺所へ廻らしやんせいな。

せつ　あ、いや〳〵、庭口からで苦しうない、早く内へ入りやいの。

五郎　左樣なら御免下さりませ。（ト蓮根をおろして草鞋をぬぎ、捨セリフにて下手へ住ふ。）

せつ　いつも元氣よく、健かなことぢやの。

五郎　いえ〳〵健かどころではござりませぬ、後の月大煩ひをいたしまして、新亡者になる所、やうやくのことで生返りましたが、もう取る年ゆゑわたくしも長いことはござりませぬ。

しづ　これ父さん、たしなみなさんせ、旦那さまが御加增にてお目出度いお祝ひに、參り早々死んだの何のと忌はしいことを言はしやんすな。

五郎　それは惡いことを言つたが、あんまり便りがないゆゑに、若し死にでもしはせぬかと思つて、うつかり死んだというたのぢや。

しづ　もうそんな事を言はしやんすな。

五郎　もう〳〵決して言ひはせぬ、旦那さまが御加增なされたお目出度には、丁度幸ひお土產に背負つて來た、阿彌陀寺の池に出來た蓮、どうでお强飯が出來ませう、お煮染になとお使ひ下さりませ。

ト絲立から蓮根を出す、おせつ心にかゝる思入。

しづ　もし旦那さまへのお土産なら、こんな物より利根川の鯉でも持つてござんせいな。

五郎　持つて來るも知つて居るが、爰まで提げて來たことなら、忽ち鯉は死んでしまはう。

しづ　えゝ、又死ぬと言はしやんすか。

五郎　ほい、うつかり言うた、南無阿彌陀佛。（トおせつ話を餘所になし、）

せつ　さうして今日は、何所へ行きやつたのぢや。

五郎　はい、今日は親類の寺詣りに朝から歩きましたが、先づ最初が青山の六道の辻から極樂水、賽の河原の小石川、地藏の顏の三枚橋、蓮の臺の不忍からとゞの仕舞が佛店、

しづ　これ〳〵父さん、もう好い加減にしなさんせいな。

五郎　はて、何所へ行つたと御隱居さまがおつしやるゆゑ、道筋を細かにお話し申すのぢや。

しづ　お前は心づくまいが、六道の辻ぢやの極樂水ぢやのと、なぜ其のやうな事を言はしやんすぞいな。

五郎　御加增でお目出度いのに濟まぬことを言ひました、武士なら腹でも切らねばならぬ。

しづ　えゝも、默つて居やしやんせいな。（トおしづ氣を揉む、おせつ見て、）

せつ　これしづや、奥に貰うた肴もあれば、親父に一口呑ましてやりや。

しづ　いえ〳〵、此の上お酒をたべましたら、何を申すか知れませぬわいな。

五郎　これ、折角お酒を下さるといふに、手前が留めるはいらぬ辭儀だ。

せつ　これ、早う奥へ連れて行きやいの。

しづ　お前にお酒は上げられぬけれど、あのやうにおつしやりますから、お臺所へござんせいな。

五郎　それは何より有難い。

しづ　その替り今のやうな、忌はしいことは言はしやんすな。

五郎　酒さへ呑めば何にも言はぬ。

しづ　きつと言はしやんせぬな。

五郎　おゝ、死んだ積りで居ようわいの。

しづ　えゝ、まだかいな。

ト五郎作をこづく、唄になり五郎作蓮根を持ち、おしづ附いて奥へ入る、跡おせつ思入あつて、

せつ　いつにない五郎作が、酒に醉つてか知らねども、目出度い中へ忌はしい、心に掛ることばかり、今上樣の御意に叶うて日に增し立身出世はなせど、ひよつと人の嫉みにて無實の難を受けねばよいと、心に絶えぬ其の所へ武士なら腹を切る所と何の氣もなく言うたのは、若し前表ではあるま

いかと案じられるは親心、あゝ苦の絶えぬ浮世ぢやなあ。（ト思入、時の鐘、床の淨瑠璃になり、）

〽人影の長きに似ざる冬の日の、日足短かき八ツ下り、居所の歩みの未の刻、三間右近は忠孝の思案に吐息つくづくと、

ト花道より以前の右近思案の思入にて出來る、跡より若黨袴股立大小にて附添ひ出來り、花道に立留り、

右近　こりや傳助、その方は加納樣へ、只今主人歸りましたと、家來衆まで申して參れ。

若黨　はッ、畏りましてござりまする。

右近　格別道の廻りでなければ、序に菩提所心光院の墓所の掃除をいたして參れ。

若黨　はッ、

〽はつと心得傳助は、玄關前へかけ拔けて、（ト是れにて若黨舞臺へ先に來て、）

お歸りでござります。（ト此の内右近舞臺へ來り、）

右近　早う參れ。

若黨　はあゝ。（ト辭儀をなし、）

〽元來し道へ引返す、

ト若黨一散に花道へ入る、此の内右近玄關より二重へ出る。

せつ　おゝ、右近戻りしか。

右近　只今歸りましてござりまする。（ト合方になり、二重下手へ住ふ。）

せつ　傳助はどうしました。

右近　加納氏へ用事あつて、今直に遣はしました。

せつ　おゝ、さうであつたかいの。（ト右近白木の臺進物を見て、）

右近　母上、それなる臺の品々は、何れより到來でござりまする。

せつ　最前そなたの加增を祝し、柳澤さまの御奥から此の品々を下さりました。

右近　すりや、此の品も柳澤より、（ト右近思入。）

せつ　昨年といひ又今年引續いての御加增は、柳澤さまのお執成しゆゑ、深き御恩になりますわいの。

右近　その御恩ゆゑに、

せつ　え、（ト思入。）

右近　させる功なき某が、思はぬ立身いたしてござる。

〽物思ひげに打ち欝く、折しも下女が奥の間より着替の衣服携へ出で、

ト右近欝ぐ思入、奥よりおしづ服臺へ着替を載せ、これを持ち出來り手をつかへ、

しづ　只今お退りにござりまするか。いざお召替へ遊ばしませ。

ト合方きつぱりとなり、右近頷き上下を脱ぎ小袖を着替へ、縞の袴をはき元の所へ住ふ。

せつ　見れば濟まぬ顔附きぢやが、何ぞ心に掛ることでもあつてか。

右近　いえ、心に掛ることもござりませぬが、少しく氣分が惡うござりまする。

せつ　氣分が惡くば養元さまへ、さう申して上げようかいの。

右近　左程のこともござりませぬ。

せつ　そんなら何時も持藥に呑む、消毒丸でも呑んだがよい。

右近　藥よりは茶にいたしませう、これしづや、薄く一服立てゝくりやれ。

しづ　畏りました。

〽はつと答へて服臺を、携へ奥へ入りにけり。

ト おしづ服臺へ上下衣類を載せ奥へ持つて入る。

せつ　明日北の丸のお數寄屋にて寒梅のお茶があると、お茶道の春齋どのがわしに話して行きましたが

さういふ御沙汰があつたかいの。

右近　その儀は先刻柳澤どのにて、承はりましてござりますが、御正客が西の丸樣、お相伴が上樣と申

すことでござりまする。

せつ　して亭主役はどなたさまぢや。

右近　いやどなたでもござりませぬ、亭主はわたくしにござります。

せつ　え、御正客が西の丸樣、御相伴が上樣にてお茶を立てるなどゝいふは、藝の德とはいひながら冥

加に餘るそなたの仕合せ、嬉し涙がこぼれるわいの。

〽悅ぶ母と裏うへに右近が切なき胸の内、あけて言はれぬ奥の間より薄茶たづさへ立ち出る

おしづが差し出す樂茶碗、手に取りあげて打ち見やり、樣子ありげに見えければ、

ト此の内おせつ涙を拭ひ嬉しき思入、右近は切なき思入、奥よりおしづ緋の帛紗に茶碗を載せ持ち出

で右近の前へ出す、右近取上げ茶碗の中へ目を附けぢつと思入、おせつ合點の行かぬこなしにて、

せつ　これ右近、茶碗の中を不思議さうに繰返して見やるのは、

しづ　何ぞ入つてゞも居りましたか。

右近　むゝ、（ト思入あつて）立て替へてくりやれ。

〽出す茶碗を手に取上げ、中を見やりて打ちおどろき、

ト右近茶碗を出す、おしづ取上げ中を見てびつくりなし、

しづ　や、こりやお茶の中に蠅が一疋、

せつ　なに、蠅が入つて居つたとか。

しづ　何時の間に入りましたか、心附ぬことをいたしましたわいな。

せつ　何故とつくりと茶碗の中を、改めて出さぬのぢや。

しづ　ついうつかりと差上げまして、申譯のないことをいたしました、お許しなされて下さりませ。

ト手を突き詫びる。合方になり、

せつ　ついうつかりと差上げたとは、そりや何を申すのぢや、右近が蠅の入りしを心附きたればこそよけれ、そなたのやうにうつかりと蠅のあるをも知らずして今の茶を呑んだなら、命を失ふまいものでもない、蟲の内でも取りわけて蠅は毒のあるものゆゑ、もし其の毒に伜があたり死に至りなば何といたす、ついうつかり差上げましたと、言うて濟まうと思ふかいの。

しづ　申譯もないことをいたしましわいな。

せつ　そなたの母は伜の乳母ゆゑ、常の女子と一つにせず諸事に目を掛け遣はすのに、夫の俗にいふ乳兄弟の諺ゆゑに麁略にするか。

しづ　あゝ勿體ないことおつしやりませ、なか〳〵以て御主人さまを麁略にいたすことなどは、更々ございませぬわいな。

〽はつとばかりに泣き伏せば、

トおしづはハツと泣く、右近見兼ねて、

右近　蠅の入りしを心附ぬは全く麁相にござりますれば、お許しなされて下さりませ。

せつ　いや、外のことなら許しもせうが、麁相といへど大切なそなたの命に拘はることゆゑ、きつと言はねばなりませぬ。これしづ、今改めて言はずとも定めて辨へ居やらうが、七ッの年に母に別れ、父親の手で育てられず困るといふゆゑこちへ引取り、今そのやうに背丈の延びしは誰が蔭と思ふぞよ、暑さ寒さの衣類などの世話はわしがするけれど、三度の食はお上から伜が賜はる御扶持の餘り、その大恩のある主へ蠅の入りたる茶をすゝめ、若しその毒で死んだなら毒殺なすも同じこと、麁相も事によるわいの。

しづ　大恩のあるお主さまを麁略にいたす心はなけれど、蠅の入りしを心附ぬは今更がへらぬ不調法、申譯には此の場にて、

〽側なる刀に手を掛けて、既に自害と見えければ、右近は其の手をしつかと捉へ、

トおしづ思入あつて右近の差添へ手を掛け死なうとするを、右近その手を捉へ、

右近　こりや狼狽へて何をいたす。

しづ　さあ、七ツの年から御恩を受けしお主さまへ毒を差上げ、命を捨てねばわたくしの申し譯が立ちませぬ。

右近　只今の茶を我呑んで毒に中つて死したるなら、命を捨てるも道理なれど、蠅の入りしを心附き我呑まざれば死ぬるに及ばぬ。

しづ　ではござりますが、死なねばどうも、

右近　まだ〳〵左樣なことを申して、主人の詞を用ひぬか。

しづ　さあ、

右近　幼年より育てられし恩を思はゞ、麁忽いたすな。

しづ　はい

右近　この以後麁相のないやうに、心を用ひて奉公いたせ。

しづ　有難うござりまする。（ト手を放す、右近おせつに向ひ、）

右近　全く麁相にござりますれば、今日の所はわたくしに何卒お免じ下さりまして、お許しなされて下さりませ。

せつ　外ならぬそなたの挨拶、以後を慎むことならば此の儘許してやりませうわいの。

右近　悧發のやうでもまだ年若、無分別を出さぬやう御教諭なされて遣はされませ。

せつ　おゝわしが後でとつくりと言ひ聞かして遣りませう、この後又も麁相をせうとも決して死なうなどゝいふ惡い心を出さぬがよいぞ、奥へ來てゐる五郎作が頼みに思ふはそなたばかり、若しも死にでもしたならば、其の歎きはどのやうぞ、親の歎きを思ひなば、必ず無分別を出すまいぞ。

しづ　足らはぬ身をば其のやうに、おつしやりまして下さりますお主さまのお情は、死んでも忘れはいたしませぬ。

右近　まだ其の方は死ぬ心か。

しづ　いえも、決して死にはいたしませぬ。（トおせつ肩を押へ痞えし思入）

右近　母上、如何なされました。

せつ　時候のせいか此のごろは、肩が痞えてならぬわいの。

右近　しづにちとお叩かせなされませ。

しづ　お擦りをして差上げませう。

せつ　そんなら少しほごしてくりや。

しづ　畏りましてござります。

右近　左様なれば母上、

せつ　そなたも休息しやいの。

〽何心なく母親が下女を伴ひ奥へ入る、跡に右近は言の葉の、我が身に當ることのみに、歎息なして手を拱き、

トおせつおしづを連れ奥へ入る、跡に右近思入あつて、

右近　只今しづが立てし茶に蠅の入りしを母上が、毒ある蟲にこれを呑み、若し命にも拘はる時は毒殺なすも同じことゝ、しづへ御意見なされし所、七ッの年より母上の御恩になりしといひながら、お主へ毒をすゝめては濟まざることゝ、一途に迫り、我が差添へ手をかけて身の言譯に死ぬ心、僅か年季の奉公人さへ、命を捨つる覺悟の健氣さ、まして武士たる身の上にて、

〽兎やせん角やと我が胸に餘る思案の折戸口、家來を歸し大隅が咳きなして門へ立ち、

ト右近思案の思入、花道より加納大隅守羽織袴大小草履、中間附添ひ出來り、舞臺にて、

大隅　その方は、後刻迎ひに參れ。

中間　はつ、畏りましてござります。（ト下手へ走り入る、大隅守切戸口に立ち、）

大隅　頼まう〳〵。

右近　はつ、何方でござりまする。

大隅　加納大隅でござる。

右近　これは〳〵ようこその御入來、（ト切戸口をあけ、）先づ〳〵是れへ、

大隅　然らば許しめされ、（ト誂への合方になり、大隅守上手へ通り住ふ、）扨先刻はお使ひ下され、忝なう存じまする。

右近　何か拙者にお問合せがござりますと申すことゆゑ、歸宅をお知らせ申してござる。

大隅　少々承はりたい儀がござるが、それはさておき此の度は、又々百石御加增に相成り恐悦至極の儀でござる。

右近　何の功なき某に、思ひがけなき御加增は、まことに恐縮仕つる。

大隅　これと申すも御當家は御先代より茶道を好まれ、其許なども十歳代から千家流の奥義を極め、勝れし業ゆゑ上様の御意に叶うて御立身、斯く御懇意にいたす上はまことに以て悦ばしい事でござる、それに附いて承はりたいは明日北の丸のお數寄屋にて、寒梅の咲出しを御賞翫あらせられ御

茶の湯があるとのこと、此の儀を承はりに參つたが、いよ〳〵相違ござらぬかな。

右近　いかにも明日北の丸にて、お催しがござりまする。

大隅　定めて御正客は上様でござらうな。

右近　いえ御正客は西丸様にて、上様にはお相伴、お詰は柳澤殿にござりまする。

大隅　すりや御正客は西丸様とな、（ト大隅守思入あつて、）して御亭主はどなたなるぞ。

右近　則ち拙者へ命ぜられましてござる。

大隅　御亭主役は貴殿とな、それはお仕合なことでござる、風雅な道とはいひながら、お園内で上様と御同席をなされるといふはお羨ましいことでござる、斯く追々に御加増あつては、今に柳澤殿同様に、萬石取りにならるゝでござらう。

右近　左様に仰せ下されてはまことに汗顔の至りでござる、武士たるものは武藝のみ心掛くればよいことを、父が好者に幼年より見よう見眞似に學びたる、茶道ゆゑに立身出世、一向存ぜぬことならば斯くお見出しにも預かるまいに、よしなき業を學びました。

大隅　これは又右近殿には異なことを申されるが、立身出世は我れ人共に願はぬものはあらざるに、よしなき業を學びしとは、如何なる貴殿は御所存なるぞ。

右近　されば御馬前の武功によるか、又は文武兩道の技藝によつての御加増なれば、家の面目この身の手柄後世へ名を殘しまするが、亂舞香茶は遊藝にて驕奢に長ぜし東山義政公のもてあそび、それより世々に傳はれど武士のなすべき業にあらず、されば拙者におきまして遊藝を以ての立身は、武士の好まぬところでござる。

〽何か心に一物あつて、出世を好まぬ右近が詞、大隅守感心なし、

ト此の内右近思入あつて言ふ、大隅守感心の思入にて、

大隅　流石は賢者の三間氏、感心いたす貴殿の心中、人悦べば共に悦び人悲しめば共に悲しむ、それは昔の人にして當世浮薄の人情では、人が立身出世なせば悦びはせで誹謗なし、人が零落いたす時は憐みはせでそれを悦ぶ、賴み少なき世の中ゆゑ、人の謗りをおもんぱかり遊藝を以ての立身を悦ばれぬはまことの武士、人は斯くこそありたきもの、さはさりながら今の世に武道を以ての手柄はし難し、假令遊藝なればとて斯くまで上の御意に叶ひ、立身出世なされしは餘人の及ばぬことでござるぞ。

右近　ではござれども、他家の謗りを思ひますれば後が見られ、冥加に餘ることながら立身いたさぬ其の前が、心易うござりました。

大隅　拙者に於ては貴殿の御所存實に感心仕るが、然し只今も申す如く柳澤殿の立身を誰れ羨まぬものなく、皆々願ふ所なれば、よしや蔭にて誹謗なすとも人の噂も七十五日、長いことはござらぬから、それらは心に掛けめさるな。

右近　全く拙者が立身は茶道が御意に叶ひしゆゑ、又もや此の上思召しにて出世なさんもはかられねば向後茶道を捨てます所存、これまで貴殿と年久しく互ひに好む茶事により水魚の交り結びしかどこれより茶杓を手にとらぬ所存にござれば今日限り、貴殿のお目に掛らぬやうに相成りませうも知れませぬ。

大隅　假令茶道を癈されても一旦斷琴の交りなせば、拙者命のあらん限り御懇意結ぶ所存でござる。

右近　拙者に於ても其許と同じ所存にござれども、老少不定の世の中に明日をも知れぬ武士の身の上、心の内に餘所ながら暇乞ひなす右近が詞、不審ながらも打ち消して、

ト右近ちつと思入れ、大隅守心得ぬこなしにて、

大隅　いや〳〵老少不定と申せども拙者は百まで生きる心、先づ老が先立つ順道なれば、まだ四五十年は相變らずお附合ひ申されませう。

右近　どうか貴殿と末永く、お附合がいたしけれど、

大隅　まだ〳〵貴殿はそのやうな、愚痴なことを言はるゝか。

右近　でも、明日をも知れぬ身の上ゆゑ。

大隅　えゝ不延喜なことを言はるゝな、人生五十年が境なれど、拙者は百年も生き延びて生涯茶事を樂しむ所存、されば明日のお茶などに出席ならぬが殘念至極、せめて御當日の銘器類、御献立の樣子など明晩參つて承はらん。

右近　御當日の器物類は、筆記いたして御覽に入れん。

大隅　それは何より忝ないが、それに附いて其許へお願ひ申すは、西丸樣いまだ茶道のお稽古も至つて未熟にゐらせらるれば、諸事のあつかひ萬事の手續き、殊には奸臣多き時節、お正客を怠なく何卒お勤めなさるゝやう、偏に御配慮お願ひ申す。

〳〵茶事に事寄せ大隅が、明日の大事を餘所ながら頼む詞にいゞと猶、右近が切なき胸の内、

ト大隅守よろしく思入にて言ふ、右近切なき思入あつて、

右近　その儀は承知仕る、及ばずながら某がお側に居れば其の邊は、必ず御案じなさるゝな。

大隅　それは千萬忝ない、賢者といはるゝ其許にそれ承はつて安心いたせば、最早拙者はお暇いたす。

右近　すりや、お歸りでござりまするか。

大隅　何れ明晩推參いたさん。

右近　其の節拙者が胸中を、

大隅　え、

右近　いや、茶事のお話しいたすでござらう。

大隅　然らば、三間氏、（ト立ち上る、）

右近　加納氏、

大隅　お別れ申す。

〽常は水魚の交りも禮儀正しく一禮なし、門を放れて立ち留り、

ト大隅守門口へ出る、右近送るをそれには及ばぬといふ思入あつて、枝折戸をしめ花道へ行く、大隅守思入あつて、

三間氏が立身は茶道が御意に叶ひしゆゑ、申さば出世の種なる業を、捨つるといふは如何なる譯か何か仔細のあることならん、はて心得ぬことぢやなあ。

〽跡へ心は殘れども勤仕に是非なく立ち歸る。（ト大隅守よろしく思入あつて花道へ入る。）

〽右近が跡にとつおいつ、思案に暮るゝ灯ともし頃、行燈携へ立出るおしづ、物思はしげなる體を見て、

ト右近跡を見送り思入、時の鐘、奥より以前のおしづ誂への行燈を提げ出來り右近の體を見て思入、少しなまめきし合方になり、

しづ　旦那さま、ちとお肩でもお擦り申しませうか。

右近　おゝ、母上も時候のせいで肩が張るとおつしやつたが、おれも肩が張つてならぬ、少しばかり叩いてくりやれ。

しづ　畏まりました。（トおしづ右近の後へ廻り肩を叩く、右近思入あつて、）

右近　久しく叩いて貰はなんだが、中々手つきが巧者になつた。

しづ　御隱居さまのお擦りを毎晩いたしまするので、少しは上りましてござりませう。

右近　いや上つたどころか、うまいものぢや。

しづ　いえ、旦那さまには利きますまいわいな。（ト右近思入あつて言ひ難さうに、）

右近　これ、しづ、

しづ　はい、何ぞ御用でござりますか。

右近　そちや聟を取るのか、嫁に行くのか。

しづ　はい家は姉が聟を取り、家を繼いで居りますれば、餘所へ參りますのでござります。

右近　餘所へ嫁に行くのなら、おれの妻になつてくれぬか。

しづ　えゝ。（トびつくりして手を放す。）

右近　なぜ、肩を叩かぬのだ。

しづ　いつにない旦那さまの、御常談をおつしやりますゆゑ。

右近　なに、常談を申さうぞ、知つての通り獨身なれば諸家より緣談申し入るれど、われは兎もあれ母上の御意に叶ふが專一ゆゑ、未だ相談取極めぬが、誰よりそちが母上の御意に叶うて居るこそ幸ひ、妻にいたさば跡々の、（ト右近思入あつて、）家内の事も剛れてあれば、是非とも妻にしたいのだ。

しづ　常々お堅い旦那さまが、世界に女子のないやうに、素性も賤しいわたくしへ、左樣なことをおつしやりますは、

右近　はて、そこが譬の思案の外、戀に上下の隔てはない。

〽手を取りおしづを引寄せる、後に立聞く五郎作が思ふ笑壺にぬつと出で、

右近思ひ切つておしづの手を取り引寄せる、此の時後へ五郎作出で、

五郎　旦那さま、そりや御本心でござりますか。

右近　や、そちは親の五郎作か、とんだところを見られたわえ。（ト手を放す。）

五郎　いえ疾うから願つて居る所、然しお爲りではござりますまいな。

右近　なに、爲りを申すものぢや。

五郎　それはまあ有難いことでござります、娘が奥さまになりますれば、わたくしはあなたの舅ゆゑ、明日から肥桶擔がずに左り團扇の隱居さま、こんな有難いことはない、娘早く御返事をいたさぬか。

しづ　いえ、此の御返事はいたしませぬわいな。

五郎　なぜ御返事をいたさぬのぢや。

しづ　假令出世になればとて、素性賤しい下女の身で、どう御返事がいたされませう。

五郎　そりやおぬしの料簡違ひ、慾を知らぬといふものだ、内へ歸つておれが手で百姓仲間へ嫁に行けば、畫は田畑の仕事をなし、夜は夜業に糸を取り、手織木綿が一帳羅、それに引替へ奥さまに出世をすればお絹布ぐるみ、こんな結構なことはない。

右近　それを返事のならぬといふは、武家の妻になるのがいやか、但しは身共が氣に入らぬか。

〜言ふにおしづは前へ出で、せきたつ胸を押し鎭め、

しづ　あゝ勿體ないことおつしやりませ、爰等辺所のお組屋敷でお嬢さま方がお寄りなされると、どうぞあなたの奥さまになりたいものとお噂ばかり、左程に思ふあなたから妻になれとの一言は、この身に過ぎたことなれば飛び立つ程にわたくしも、心に嬉しうござりまするが、世界に女子もないやうに、賤しい下女へ手を附けて妻にお持ちなされたら旦那さまのお耻ゆゑ、それで御返事いたしませぬ。

五郎　それはおぬしがいらぬ遠慮、下女を女房になさるのは、世間にいくらもあることだ。

しづ　そりやあることではござりまするが、それを人が褒めまするか、必ず蔭で碌襤ッ買と悪いお名を附けませう、下女が賤しい身を耻ぢて旦那さまのお心に隨ひさへいたしませねば、悪いお名も立ちますまい、それゆゑ嬉しいお詞をもどきまするは七ッから御恩になつた旦那さまの、お耻を獸ひまするゆゑ、此の御返事はどうあつてもいたしませねば旦那さま、お許しなされて下さりませいな。

〜詫びる戀路の言譯に涙に袖は濡らせども、濡らさぬ操の心根を右近は聞いて感じ入り、

ト此の内おしづよろしく思入にて言ふ、右近感心せしこなしあつて、

右近　凡そ人は出世を好めば、道ならざると知りながら我が身に迷ふが世のならひ、それに引替へしづが心底、常に替つて某が妻に望むも跡々を頼まんものと思ひしが、（ト思入あつて、）二言といはれぬ今の一言、かゝる心が世の人にあらば天下も穩かに、右近が苦勞もあるまじきに、あゝ思ふに任せぬ、戀の路、

〜口と心の二筋を知らぬ親父は一筋に、慾の皮をば引張つて、（ト右近よろしく思入）

五郎　これ〳〵娘どうしたものだ、善惡共にお主さまのおつしやることを聞かぬのは、家來の身にて第一不忠、色よい御返事早くせぬか。

しづ　いえ〳〵御返事いたしませぬ、上々さまにも道ならぬ事を遊ばすお方もあれど、わたしが賤しい下女なれど旦那さまへ御返事せぬは、受けし御恩を忘れぬ心。

五郎　いや〳〵それは料簡違ひ、お主さまへの不忠ばかりか、親が樂な身になるを、させぬは子として不孝なるぞ。

しづ　不孝になるかは知らねども、内へ歸らば田畑の仕事、夜は絲繰り機を織り、お前に樂をさせます わいな。

五郎　そりやもうそちが内へ歸り、樂もさせてくれようが、高の知れた水呑み百姓、榮耀榮華が出來ぬわい。

しづ　道に缺けたることをして、榮耀榮華をしようといふは、そりや心得違ひでござんすぞえ。

五郎　おぬしはそんなことをいふが、百五十俵から百萬石のお墨附を貰ふのも、女でなければ出來ぬことだ。

しづ　假令何と言はしやんしても、わたしや御返事しませぬわいな。（ト きつと言ふ、右近此内思入あつて、）

右近　すりや、どうあつても、

しづ　お許しなされて下さりませ。

右近　はて、見上げた、

五郎　え、

右近　緣なき衆生は度し難し、

しづ　左樣なればわたくしは、

右近　思ひ切つた、安心いたせ。

ト唄になり、右近感心の思入にて奥へ入る。跡合方になり、五郎作おしづを捉へ、

五郎　これ〳〵娘、手前は呆れ返つた奴だぞよ、旦那さまに從へば手前ばかりの出世ぢやない、この親父まで浮みあがるに、何で御返事をしないのだ。

しづ　そりや父さん何を言はしやんす、娘にそでないことをさせ、榮耀榮華をしようといふは、親の道ではござんせぬぞえ。

五郎　道であらうがあるまいが、娘を持てば中から下は器量次第で、お妾か又は藝者か圍ひ者、甚だしいのは御法度の地獄にさへ出すではないか、手前の器量がよいゆゑに旦那さまのお手が附き、早くお子でも出來ればよいと、待ちに待つて居た所、旦那さまのお詞を背くといふがあるものか。

しづ　まだそんな事を言はしやんすか、わたしや出世は望みませぬわいな。

五郎　えゝ立派な嫁御になられるを、さりとは〳〵馬鹿な奴、のほよほ〳〵〳〵あらうかいな、こんな慾氣のないものが、さんな又あらうかいな、

ト あり合ふ掛物かけの竹にて叩き立て、猿廻しの合方になり、おしづを追廻してトゞおしづ五郎作を突退け、奥へ逃げて入る、五郎作起き上り、

あんな親に不孝な奴が、さんなまたあらうかいな、（ト此の時指金の赤猫飛び付く五郎作びつくりして飛びのく、指金の猫立上るを見て、）おにやにやご〳〵〳〵、さんな又あらうかいな。

ト竹で猫を猿になし、右の合方猿廻しの見得にてよろしく道具廻る。

（三間奥座敷の場）――本舞臺常足の二重、大和葺の家根、はゞき板の土縁、向う上手洞床上下を着たる畫像の掛物、古銅の置花活に水仙を活け、續いて一間地袋戸棚、銀地畫畫の襖、此の下雲母形の襖出入り、上手一間後へ下げて低き障子口欄間、下地窓、家體の前に御影石と見える踏段、下の方枝折門、左右建仁寺垣、この前に御影の角燈籠松の立木蹲ひの手水鉢、總て三間奥座敷の體、家體前側へ伊豫簾をおろし、道具半程より床の淨瑠璃三重にて道具留る。

冬の夜の鐘の音沈む雨催ひ、松吹く風もさら〳〵と降るはみぞれか霰釜、閑を樂しむ風韻の爐邊に右近がたつる茶の、泡と消え行く身をかこち、

ト此の内本釣鐘を打ち込み、よき程に家體の伊豫簾を捲き上げる、二重床脇に誂への爐これへ釜を掛け、茶道具よろしく並べ、竹燈臺を置き右近茶を立つて居る見得茶碗を畫像へ供へちつと思入、筐の入りし床の合方になり、

右近　法譽千山萬海大居士、寫せし畫像に靈あらば、三間右近が今生の名殘の一服召し上られ、一命を斷つ其の仔細、お聞きなされて下さりませ。

佛寫す亡き父へ在すが如く手をつかへ、

幼年よりして父上の御傳授受けし千家の茶の湯、測ず同勤の推擧によつて柳澤殿へ指南なせしに間もなく百石加增なし、恐れ多くも上樣のお相手いたすやうになり、引續いて再度の加增、冥加に餘る登庸は全く覺えし藝の德、開運いたす時至れりと悅び勇みし甲斐もなや、立身なせし掛橋の其の茶道ゆゑ又今日、我が身に迫る一大事に、茶道と共に一命を捨てねばならぬ今宵の仕儀、たゞ殘念なは某が只今切腹いたしなば、必ず家名は斷絶なさん。

數代續きし三間の家、我が代になり退轉さす其の苦しさは此の胸を、刃をもつて貫くより遙かに勝る我が切なさ、

返す〳〵も茶道にて一旦出世なしたるも、又候今日茶道にて、一命捨つるも前世の宿業、是非なきことゝ父上にもお諦め下されて、家名を絶す身の不孝、お許しなされて下さりませ。

床に掛けたる亡き父へ家名を絶す身の詫も、たれ白張りと思ひの外、襖を明けて立ち出る母親、

ト此の内右近床の掛物へ向ひよろしく思入、時の鐘、襖を明け、おせつ靜々と出來り、

せつ　倅、獨樂なるか。

右近　これは母上でござりますか、先づ〳〵これへ。

〰席を譲れば母親は、よろめく足を踏みしめてやう〳〵にして座に直り、

ト右近下手へ下る、おせつ苦痛を隠す思入あつて上手へ住ふ、

せつ　これ伜、そなたに聞きたいことがあるが、父上ばかりが親にして、母は親ではあらざるか。

右近　何とおつしやりまする。（ト詰への竹笛入りの合方になり、）

せつ　今日に迫りし一大事を、なぜ此の母には言はざるぞ。

右近　別に今日母上へ、申し上げることがござりませねば。

せつ　なに、ないことがあるものぞ、今父上のその畫像へ在すが如く申せしを、襖越しに聞きました。

命を捨つる一大事を、母へも明して聞かしやいの。（ト右近思入あつて、）

右近　只今申せし繰言を襖越しに母上が、お聞きなされし上からは、仔細をお明し申したけれど、天下の大事にござりますれば、迂濶に申し上げられませぬ。

せつ　迂濶に仔細が言へぬといふは、母が口外いたさうかと、それを危ぶみ言はぬのか。

右近　さあ、それは、

せつ　いやそれならば、他言をせぬ誓ひをそなたに見せませう。

右近　なに、誓ひをお見せなされますとは。

せつ　伜、これを見よ。

〰諸肌脱げば母親が、疵口結ぶ白布をもれてにじみし血潮の紅、右近は見るよりびつくりなし、

ト おせつ肌を脱ぐ、下着の上を白布にて結び居る、これへ血汐にじみ居るを右近見てびつくりなし、

右近　やゝ、こりや母上には、何ゆゑに。

せつ　そなたが切腹なすことを聞いたるゆゑに魁に、自害をなせし此の母が冥土の土産に一大事の、仔細を言うて聞かしやいなう。

〰言ふも苦しき息づかひ、右近は是非も涙を拭ひ、

右近　はゝッ、恐れ入つたる御生害、わたくしゆゑにお命を捨てさせまする身の不孝、今は何をかお隠し申さん。

〰右近は四邊を窺ひて、

かねて御存じ知られし如く、柳澤殿の執成しにて立身出世なせし某、又もや此度御加増に、先刻右の禮旁々柳澤殿へ參りし所、御出仕ありてお留守ゆゑ、則ち家老權太夫へ右の禮を申せし時、羽州殿の頼みとて窃に語る一大事、その事柄は上様に御實子御出生遊ばせしゆゑ、當六代の御世

嗣に西丸様を差し置いて、御實子綱千代様へお譲りあらせたき御心中に候へば、西丸様を亡き者になさねば天下穩かならず、恐れ多きことながら明日北の丸のお茶の湯に、お茶の内へ毒を仕込み差上げくれと窃の頼み、

〽茶道によつて立身なせど、正しき天下の御連枝様へ、何とてお茶を差上げられう。五常を守る羽州殿、かゝる企みはよもあるまじ、正しく曾根が奸計と推察なせど、大恩ある柳澤殿の頼みなりと退引ならぬ詞詰め、是非なく其の場で承引なせしは立歸つて死す覺悟、天下の大事に此の事を老中方へ進達なさば、是まで大恩蒙りし柳澤殿の家名の瑕瑾、如何なる御所置にならんも知れず、とあつて役目を勤むるときは毒害いたさにやならぬゆゑ、忠と義理とに切腹なし、

〽魂魄此の土に止まつて、

西丸様の御危難を影身に附添ひ奉り御守護いたす我が所存、他聞を憚かる仔細と申すは、斯くの通りでござりまする。

〽母の自害に我が包む所存を打明け物語れば、手負ひは苦しさ打ち忘れ、

ト此の内右近よろしく思入にて言ふ、おせつも思入あつて、

せつ　ほゝお、包み隠す一大事を、よくぞ打明け申せしぞ、母が冥土へよき土産。

右近　まつた先刻下女しづへ戯れごとを申せしも、かゝる事とは知らざるゆゑ、我がなき後に母上の御介抱をいたさせんと、妻になさんと言掛けしも、主人の耻と我が心に隨はざりし彼れが心底。

せつ　おゝ、襖越しに聞きましたが、賤しき下女の身を耻ぢてそなたの心に隨はぬは、天晴健氣な志し夫の御方に此の心が、あらばそなたや此のわしが、命を捨つることもあるまじ、

右近　これと申すも武士の身で、なまじ茶道を學びしゆゑ、

せつ　思はぬ立身出世なし、

右近　茶碗の樂を極めしも、

せつ　今また土にかへる身は、

古近　緣も薄茶の親子中、

せつ　茶筌に立ちし泡よりも、

右近　消ゆる間近き、

せつ　知死期時、

右近　思へば果敢ない、

兩人　身の上ぢやなあ。

〰親手手に手を取交す、涙にこぼしの水溢れ、茶巾の切やしぼるらん。

ト両人よろしく愁ひの思入。

せつ　そなたの大事を聞く上は、少しも早く冥土へ行き、夫へこの事物語らん。

〰腹帶解くを押しとゞめ、

右近　母上暫くお待ち下され、只今死出の御供いたす。

〰肌おし脱いで差添を逆手に取りし其の所へ、一間をかけ出る下女おしづ、

ト右近肌をぬぎ差添を腹へ突立てようとする所へ、ばた〳〵になり奥よりおしづ走り出で、

しづ　ヤ、こりや旦那さまには、何ゆゑに、

〰詞せはしく留むるを、振り拂へば又縋り、（トおしづ右近を留め、おせつを見て、）

やゝ、御隱居さまには御生害、えゝゝゝ。

〰おどろく隙を突退けて、ぐつと突込む左手の脇腹。

トおしづを右近突退ける、おしづ〳〵たぢ〳〵と二重より落ちる、右近腹へ突込む。

こりや御切腹を、なされましたか。

〰言ふ聲聞いて庭口より、窺ふ親父はびつくりなし、

ト以前の五郎作出來り、此體を見てびつくりなし、

五郎　やあ、こりやお二人とも血だらけにて、何ゆゑあつて、チゝちなしやるのだ。

〰血を見て驚く五郎作が、齒の根も合はず顫へ居る、（ト五郎作顫へて物の言へぬこなし、）

しづ　こりや何ゆゑにお二人さまとも、御生害をなさりましたぞ。

右近　おゝ、死なねばならぬ仕儀あつて、母上までも御生害。

せつ　仔細は後で分るぞよ。

五郎　仔細をお聞き申したとて、わたくし共へ其の譯を所詮おつしやりますまいから、

しづ　お後へ何ぞおつしやり置くことがござりますならば、おつしやり置いて下さりませ。

右近　この期に及んで後々へ、申す殘すことはない。

せつ　そちへ賴みは二人がなき後、香華手向けてくりやいの。

しづ　そりやおつしやるまでもござりませぬ。

〰今更何と詮方も泣きの涙の其の所へ、馳せ來る加納が庭口より、

トばた〳〵になり、下手より以前の加納大隅守、馬上の弓張提灯を持ち出來り、

大隅　右近殿は何れにござる。やゝ、こりや何ゆゑに切腹ありしぞ。（ト二重へ上る、）

右近　加納氏でござつたか、よくこそ御入來下された。

大隅　見れば母御も自害の樣子、して〳〵何等の仔細あつて、

右近　仔細は打明け申さねど、忠義の名義が立てたいゆゑ。

大隅　明日のお茶、氣遣はしく、又もや貴殿を賴まんと參つて見れば此の始末、打明け難き儀でござらうが、水魚の交りいたす某、仔細を打明け下されい。

右近　それを明さぬ其の替り、形見に上げる品がござる。

〽傍の棚より箱入の茶杓を取つて差し出し、

（ト右近後の棚より誂へ箱入りの茶杓を取つて出し、）

これは拙者が祕藏の品、貴殿へお讓り申したい。（ト大隅守これを見て、）

大隅　こりや秀次公が高野山にて、御自作ありし名高き茶杓。

右近　銘は高野と申しまするぞ。

大隅　いかにも、茶杓の銘は高野、

右近「忘れても汲みやしつらん旅人の、」

せつ「高野の奥の玉川の水。」

五郎　そりや弘法さまが旅人へ、

しづ　毒を知らせる歌とやら、（ト大隅守思入あつて、）

大隅　むゝ、すりや此の茶杓を讓られしは、

右近　汲みやしつらん旅人の、

大隅　高野の奥の、

右近　玉川の水。（ト兩人氣味合の思入、大隅守毒とさとり、）

大隅　むゝ、承知いたした。（ト胸を叩く、本釣鐘。）

右近　最早近附く、

せつ　知死期時、

しづ　そんならこれが、

右近　この世の別れ、（ト右近引き廻す、おせつ白布を解き、兩人がつくりとなる。）

〽あはれ果敢なや。

ト本釣鐘、おせつ落入る、おしづ縋り泣く、右近大隅守名殘りを惜しむ思入よろしく。本釣鐘三重にて、

幕

六幕目

城内大廣間の場
同　御座敷の場
同　奥御殿の場

（役名――將軍綱吉公、井伊掃部頭、本多中務大輔、榊原式部大輔、廣敷番久内、近臣。綱吉公御臺、老女岡本局、奥女中あざみ、同若松、同吳竹、同紅梅、同青柳、小姓二人、）

（城内大廣間の場）――本舞臺三間の間常足の二重、黒塗上段の框、正面葵の紋散しの金襖、上下折廻し、同じく紋散しの金襖、二重一面に縁附の御簾をおろし、花道の揚幕の所杉戸出入り、舞臺花道とも高麗縁の薄縁を敷詰め、總て城内大廣間の模様よろしく、○□△◎の詰番四人着附、袴裝にて住ひ、此の見得笞絃にて幕明く。

○　何と各々、當春くらゐ我々共が世話のやけぬ、よい正月はござるまい。

□　左様でござる、元旦のお儀式をはじめ、明十一日のお具足開きまで、何れも假のお儀式にて、

△　御三家御家門の御同席もなく、御老若の御役人方三奉行の御登城もなく、

○　たゞ上様と西丸様のみにて、將軍家にはお手づからお茶をお立て遊ばして、西丸様へおすゝめあるとは、

○　御親子中も睦じく、春を迎へる御式日、

□　これと申すも御大老美濃守殿の計らひとやら、

△　兎角當時は堅くるしい儀式を止めて色と酒、

○　お鬚の塵を取習ひ、立身出世が肝要でござる。

○　上を學ぶ下と申せば、柳澤殿を信仰いたすがようござる。

□　それゆゑ老中若年寄、過半は柳澤殿へ隨身いたして居る樣子。

△　たゞ御譜代のその内で古禮を守つて居らるゝは、江州彦根の老體一人。

○　それに隨身いたし居るは、榊原と本多の兩侯、さて〳〵野暮な儀でござる。

○　あれが所謂世の中に出合はぬ武士の昔氣質。

□　又榊原や本多どのも若い身そらでありながら、

△　三角な目を剝き出して四角張つて居らるゝとは、

○　丸いものをば目掛けぬ片意地、慾を知らぬは、

四人　白痴でござる。（トこの時うしろにて、）

呼ビ　上様の出御。（ト呼ぶ。）

○　なに、上様の、

四人　出御とな、（ト此の時御簾の内にて、）

綱吉　誰そあるか、御簾をあけい。（トうしろにて、）

大勢　はあゝ。

ト聲して管絃きつぱりとなり、正面の御簾を捲きあげる、二重中央に綱吉公將軍好みのこしらへにて褥の上に住ひ、脇息にもたれ居る、後に小役の袴小姓二人控へ、一人は誂への刀を紫の帛紗にて持ち控へ居る、これにて四人は左右に別れ平伏する、綱吉思入あつて、

綱吉　春鶯聲を弄して心動き梅花笑うて興を添ゆると、實に面白き春の日も酒肴がなくては何とやら、はて興のなきことゞもぢやなあ。

○　上意の如くお表にては、たゞ頑なるお話しのみにて、

□　風雅を知らぬ我々が、鼻を揃へて居るばかり、

△　御意に叶ひし別嬪が、お側につらなる御酒宴の、

○　御遊興とは事違ひ、嘸御氣鬱に、

四人　ゐらせられませう。

綱吉　して柳澤美濃守は、未だ出仕いたさぬか。

○　はッ、御大老には今以て、

□　御登城は、

四人　ござりませぬ。

綱吉　明日の儀について申し附けたき仔細あれば、早速登城を申し附けい。

○　はッ、委細承知仕つりました。（と立たうとする、此の時花道の揚幕にて、）

掃部　あいや、其の御用事は掃部頭、それへ參つて承はらん。

○　やゝ、あのお聲は、

四人　直純殿。

ト是れより序の舞になり、花道より掃部頭白髮好みの鬘、上下大小にて出で、花道よき所へ大小を置きはッと平伏する。綱吉公是れを見て、

綱吉　珍らしや掃部頭、まだ春ながら舊臘の寒氣も去らである折柄、齡も積る老體の何時にかはらぬ健かさ、予も滿足に思ふぞよ。

掃部　こは有難き御懇の御意、仰せの如く直純めも年罷り寄つて一年增し達者に相成る憎れ親仁、いつ

に變らぬ我が君の御尊顔を拜しまして、恐悦至極に存じまする。

綱吉　して、今日は何用あつて、不意に登城をいたせしぞ。

掃部　はッ、君の上意も待たずして今日登城いたしましたは、願ひ上げ度き儀がござりまして押して推參いたせし折柄、何か大老美濃守へ至急の御用これある由お次に於て承はり、老年の身に相應なる御用向にて候へば、聊か親仁が御奉公振り、仰せ聞けられ下さるやう偏に願ひ奉つる。

綱吉　それは格別、そこは手遠ぢや、苦しうない是れへ進め。

○　君の御上意、

四人　いざ〳〵これへ、

掃部　然らば御免下さりませう。（ト掃部頭大小を花道へ置いて舞臺へ來り、下手へ平伏する。）

綱吉　して、改まつて其の方が、願ひと申すは何事ぢや。

掃部　はッ、餘の儀ではござりませぬが、承はれば當年は明日のお具足開き、假お儀式との仰せ出され殊に上樣お手づからお茶の湯の御催し、神君以來これまでに例なき儀と存じますれば、老年の思ひ出に末座に於てお手前拜見の儀が願ひたく、罷り出ましてござりまする。

綱吉　（これにて思入あつて、）こは何事かと思ひしに事々しき其の願ひ、餘人と違ひ先祖より勳功のある其の方ゆゑ、聞き濟んで遣はしたいが、三家をはじめ家門ですら同席の儀を斷る上は、そち一人を其の席へ招く譯にも相成らぬ、その儀ばかりは叶はぬぞ。

掃部　ではござりますれど直純めも、最早昨年七十七の賀を壽きし老年にて、是れまで一度もお儀式のお席に漏れしことなく、早や今年が御祝儀の申し納めと存じますれば、何卒末座で拜見の儀を只管願ひ奉つる。

綱吉　そりやはや、そちが氣質にては左樣思ふは尤もぢやが、只今も申す如く、三家家門に至るまで皆斷りを申したれば、同席の儀は叶はぬぞ。

掃部　いえなか〳〵以て上樣と同席などゝは勿體なし、麒麟も老ゆれば駑馬とやらにて、斯く老衰に及びまして額に波のしわがれ親仁、頭に霜をいたゞきますれば、若し上樣のお目障りで汚穢しいと思召さば、お次の間よりお儀式を拜見願ひ奉つる。

綱吉　いや〳〵何も老衰せしとて見苦しいとは思はぬが、老年ゆゑに目もかすみ定めて耳も不自由ならん、次の間などにて見聞せしとて老人の身の詮なきことぢや、それよりそちが屋敷にて寛々休息いたすがよい。

掃部　老年の身をお庇ひ下され有難き御諚なれど、憚りながら掃部頭七十八には相成りますれど、耳は

至つて健かにて、歯は鬼神のきこえをとり、兩眼なぞは人並勝れ大きい上に明かにて、いまだ眼鏡を用ゐしことなく、足腰ともに息災なれば、假令お次ぎで拜見なすとも聊かたりとも差支へなく、御用のお間は缺きませぬ。

綱吉　（これにて思入あつて、）むゝ左程に耳の慥なものが、先年家督の相談せし折、なぜ不都合なる挨拶なせしぞ。

掃部　なに、不都合を言上せしとは、

綱吉　そちや失念をいたせしか。

掃部　何と仰せられまする、（ト是れより詰への合方になり、）

綱吉　既に先年綱千代を我が實子ゆゑ家督に立てんとそちへ相談いたせし折、老衰いたして予が詞、そちが耳へは聞き取れぬと取つても附かぬ挨拶せしゆゑ、奇怪なりとは存ぜしが當家へ對し先祖より動功のある家と申し、老年なりと勘辨なし、其の儘許しおいたるが、勝手の折はそちが耳健かなりと申すのは、此の綱吉を嘲弄なすか、但しは虚言を構へるか、返答いたせ、どゝどうぢや。

トきつと言ふ、これにて掃部頭思入あつて、

掃部　あいや全くこの親仁、上を嘲弄仕らず。

綱吉　然らば何ゆゑ折に觸れ、空耳はしらせ予を欺むく。

掃部　この直純の耳こそは、仁義忠孝禮智信の教へを守る稀代の耳。

綱吉　何と。

掃部　我が君、お聞き遊ばせ、（ト合方きつぱりとなり、）御諚の如く、さいつ頃御家督の儀を仰せ出され君の爲めには兄君なる甲府公の御實子たる綱豐樣をさし置かれ、綱千代君を御世に立てんと愚臣へ仰せ聞けられしは、これ御親子の情に迷ひ、御當家五代を知し召さるゝ將軍家には似合はしからぬ御戯れと存ぜしゆゑ、態と餘談にまぎらせしは老の一徳、忠義の空耳、それに引替へ今年は御親子の御仲睦じく、御三家御家門お省きあるとも西丸樣と上樣には、年賀を壽く御茶の湯、これぞ老いたる功しに、假令お次で拜見なすとも身の面目に候へば、耳も健か目も明らか、仁義忠孝禮智信の道に缺けねば聞えるこの耳、御賢慮願ひ奉つる。

綱吉　左程禮儀を存ぜしものが、三家家門を省きし席へ、なぜ差越して列席を願ふ、臣下の身にて無禮であらう。

掃部　あいや無禮と申すにはあらず、拜見願ふは古例を守る臣たるものゝ則ち忠義。

綱吉　すりや予が詞に背いても、そちは忠義と思ひ居るか。

掃部　假令上意に背くとも、假のお儀式心得ませぬ。

綱吉　何と、

掃部　なぜ御先例をお缺き遊ばす、（トきつと言ふ、これにて綱吉公ぐつと詰る、合方きつぱりとなり、）神君の御遺言にも御儉約を旨として費えを惜しみ理を辨へ、奢の沙汰を戒しめあるに、佞臣共が進めを用ゐ御遊興には千金の黄金を費し耽りたまひ、僅か年賀のお儀式を費えなりとて御嘉例を崩したまふは心得ず、君も天下の御家督を知し召されぬ其の前は、館林にて諸學に入り、儒佛の道に暗からぬ秀才叡智にましませば、これ等の事は直純が申さずとても御合點ならんが、これと申すもお側に附添ふ佞臣共が計ひゆゑ、（ト皆々へちよつと思入あつて氣を替へ、）只々天下安全の御賢慮願ひ奉る。（ト思入にていふ、これにて綱吉きつとなり、）

綱吉　やあ返す〳〵も予へ對し、無禮過言の不屆き奴、目通り叶はぬ、次へ立て。

掃部　あいや、如何ほど仰せござるとも、愚臣が願ひを我が君の、御聞き濟みのあるまでは、いつかな此の座は下りませぬ。（トじつと思入、これにて近臣四人前へ出で、）

○　お家柄ゆゑ先刻より我々共も差し控へ、君の上意を相待ち居りしが餘りと申せば無禮の一言。

□　お側に附添ふ我々を佞人讒者といはぬばかり、善惡ともに臣たる者、上意を守るが忠義なるに、

△　それを逆ひ我が君へ、諫めをいれる直純どの、まだ其の上にお茶の湯を、拜見などゝは叶はぬ願ひ、

◎　長座あつては其許の却つてお爲めに相成らぬ、君の御前は我々が、後にて執成しいたさうから、

○　疾く〳〵お次へ、

四人　お下りなされい。

掃部　えゝ喧しい胡麻摺ども、汝等達の執成しを如何で直純頼まんや、下つてよければ勝手に下る、入らぬ口出し控へさつしやい。

綱吉　やあ、又しても我儘無禮、達つてと申さば手は見せぬぞ。

掃部　それぞ直純望む所、お手討あらば冥府へ參り此の御行跡を御先祖へ言上いたす分のこと、いざ御存分に遊ばしませ。（ト綱吉の前へ進み體を差し附けぢつと思入。）

綱吉　いで、其の儀ならば覺悟いたせ。

ト小姓に持たせし刀を取り、きつとなつて立ち上る、此の時上下の襖をあけ、上手より本多中務大輔下手より榊原式部小輔、いづれも上下衣裳にて出で、

中務　我が君、しばらく、

式部　暫く〳〵、

中務　暫くお待ち、

兩人　下さりませう。（ト上下に下に居て綱吉を留る、皆々兩人を見て、）

○　君をお留めめされしは、何人なるかと思ひしに、

△　やはり御當家御譜代たる、中務どのに式部どの、

□　御前に於て過言を吐き、我儘無禮の直純どの、

◎　御成敗ある我が君を、何ゆゑあつて暫くと、

○　御兩侯には、

四人　おかばひめさる。

中務　お留め申す我々は、忠義を守る臣下の道、

式部　お側に附添ひありながら、君をお諫め申さぬは、

中務　各方が、

兩人　不忠でござる。

四人　何と、（トきつとなる、これにて中務大輔式部小輔氣を替へて、綱吉に向ひ、）

中務　はッ、我が君へ申し上げまする、其の御立腹はさることながら、御當家樣へ對しては舊功のある直純ゆゑ、

式部　何卒御賢慮廻らさせられ、寛仁大度の御上意を、仰せ聞けられ下さるやう、

中務　偏に願ひ、

兩人　奉つる。（ト這入あつて、）

綱吉　今兩人が留めずば捨ておく奴にはあらざるが、老耄なせし掃部頭、手討は許し遣はすぞ。

中務　すりやお聞き濟み下さるとな。

式部　有難く存じ、

兩人　奉りまする。

掃部　（これにて思入あつて、）いで、此の上は切腹なし、冥土の鬼と相成りても、お茶のお席を拜見なさん。

中務　すりや、其許には、

兩人　切腹とな。

掃部　君へ過言を申し上ぐれば、豫て覺悟はいたして居る。（ト宜しく思入、綱吉感心の思入あつて、）

綱吉　はて大丈夫なその魂、（ト言ひ掛けて氣を替へゝ）國元蟄居を申し付けるぞ。（トきつと言ふゝ）

掃部　何卒愚臣に、切腹を、

綱吉　その切腹は相成らぬ。

○　すりや、我君へ、

四人　諫めを入れしを。

綱吉　憎い奴とは思へども、切腹させなば後日の聞えが、いやさ勳功のある直純ゆゑ、此の安綱は暇の印汝へ取らせ遣はすぞ。（ト件の短刀を差出す、これにて掃部頭びつくりして、）

掃部　すりや、切腹は叶ひませぬか。

綱吉　あたら命を全うなし、國へ歸つて蟄居いたせ。（トこれにて掃部頭餘儀なくはツと平伏する。）

中務　寛仁大度のお計ひ。

式部　有難く頂戴めされ。

ト件の短刀を取次ぎ、掃部頭の方へ持行く、掃部頭短刀を取つて、ほろりと思入あつて、

掃部　あ、斯くまで仁ある我君も、（ト思入あつて氣を替へゝ）有難く頂戴いたします。

ト短刀をおし戴く。

中部式部　我君には、先づお入り、

皆々　あらせられませう。

ト唄になり、綱吉後向になる、これにて二重正面の御簾をおろし、中務大輔式部小輔先きに近臣四人附いて上手へ入る、此の内掃部頭差俯いて居る、この留り時計の音になり、これより床の淨瑠璃になる。

〽あとに直純默然と覺悟の命助かりて、心の撓み拍子抜け、しばし詞もなかりしが、四邊見廻し獨言。（ト掃部頭よろしくあつて、）

掃部　死すべき時に死せざれば、死に勝りたる耻ありとは此の直純が身の上ならん、既に昨年七十七の賀を壽きし甲斐もなく、圖らず今日蟄居を蒙り穩かならぬ此の時節、上には大老美濃守が世にも勝れし才智に泥み、天下の政事も疎かに淫酒の二ツに溺れたまへば、諸大名も安堵せず眉を顰むる者ばかり、然るに明日お具足開きに例年出仕の諸侯を省き、西丸樣のみお招ぎあるは何とも以て合點行かず、お側に附添ふ佞人讒者に如何なる企みのあらんも知れねば、狂げて末座を願ひしも御聞き濟みのあらざるは、いよ〳〵以て心得ず、諫めを入れて一命を捨つるは冥府へ申譯と、覺悟極めし切腹も、

〰命を繋ぐ拜領の、此の安綱の安からぬ天下の大事身一ッに、納めかねたる國の亂、この短刀の長からぬ命を全ういたせよと、御仁情なるお詞に死ぬに死なれぬ薄命は武運の末か老後の耻、あるに甲斐なき身の上ぢやなあ。

〰生くるを悔む老の身の賢者の歎きぞ哀れなる。（ト此内掃部頭よろしく思入あつて、）あゝ我ながら過つたり、國元蟄居を仰せつかり長座をいたすは上への恐れ、どりや退出をいたさうか。

〰長居は恐れと直純か涙拂うて立上り、運ぶ足さへ捗らで間毎々々を打見遣り、

ト此の内掃部頭立ち上り四邊を見廻すことよろしくあつて、

申すも愚痴のことながら、五代の天下六代に續く間が危ふしと仰せ置かれし神君の御遺言こそ圖に當り、治亂の境御當家の天下も最早これまでと思へば足も運びかね、五十年來登城せし此の殿中の見納めなるか。

〰これが名殘りと夕告の時計も過ぎてお襖の、模樣もそれと見え分かぬ涙にくれて直純が、無情を悟る青疊、運びかねたる足元にさはる其の身の腰の物、流石に老のぬかりなく心附いたる奥御殿、

ト此の内掃部頭懸ひの思入にて花道へかゝり、以前の大小足に障り心附いて腰にさす、この時舞臺は知せなしに廻る。

（大奥御廣敷の場）――本舞臺正面一面白地中形大間の襖長押附、上の方に九尺の膝隠しの板、此の上に鈴の紐の心にて紫の紐を取り付け、上手大盡柱の所へ三尺の板羽目の張物を出し、此の間長局へ行く出はいりの心、總て大奥御廣敷の模樣よろしく、能き所に金網の行燈を照らし、風の音にて道具留る。

ト右文句の留りにて掃部頭舞臺を見返り思入あつて、

掃部　今まで心附かざりしが、吹き來る風にお廊下を、傳うて運ぶ奥御殿、とても退身いたすなら、御臺所へお逢ひを願ひ、天下の大事を申し上げ、御思慮を願ふが上分別、どうぞお逢ひがあればよいが、

〰我にこたへて我が胸に、通り過せし大奥の隔ての關へ立戻り、

ト掃部頭舞臺へ歸り、四邊へ思入あつて、

幸ひ番衆も居らぬ樣子、よい取次ぎに逢ひたいものぢや。

〽首尾を案じて鈴の緒を、引けば答うる局の聲、
ト此の内掃部頭上手に取付けある鈴の紐を引く、これにて鈴の音して上手にて、

岡本　何方でござりまする。

掃部　扨は局に通ぜしか、

〽悦ぶ間毎押し明けて奥より出る岡本の局は衣服改めて、誰そやと四邊見廻せば、
ト此の内掃部頭は下手へ來り四邊を窺ひ居る、爰へ上手より岡本の局掻取裝にて出來り、四邊を見廻す、掃部頭岡本の局を見て小解になり、

岡本どの、拙者でござる。

岡本　や、思ひ掛けなき直純さま、何御用にて此の所へ。

掃部　その御不審はさることながら、一大事の儀につきて是非今晩御臺樣へお逢ひの儀が願ひたく、窃に參りし掃部頭、何卒お取次ぎ下されい。

〽仔細ありげに見えければ、（ト掃部頭四邊へ思入あつていふ、岡本局もこなしあつて、）

岡本　餘人にあらぬ直純さま、何かは知らねど一大事の、御用とあれば御臺樣へお取次ぎもいたしませうが、豫々御存じ知らるゝ通りお奥を勤める御用人か、番衆の外は大奥へ男體せしものとてはお通し申さぬ掟ゆゑ、御用の筋をわたくしへ仰せ聞けられ下さりませ。

掃部　さ、其のお斷りは御尤も、手前も掟は存じ居れど、何分密事の御内談ゆゑ、御臺所へ直々に申し上げねばならざる一儀、何卒御身のお計ひにて、お逢ひ下されまするやうお願ひ申す。

岡本　でも、此の關より大奥へ、男をお通し申しましては、局の役が濟みませぬ。

掃部　すりやどうあつても御臺さまへ、お目通りは叶はぬとな。

岡本　さあお取次ぎなら知らぬこと、御臺さまへの御對顔は、御法度ゆゑに相成りませぬ。

掃部　とあつて容易ならざれば、迂濶に仔細は申されず、

岡本　そんなら何卒御紙面にて、お送りなされて下さりませ。

掃部　それも火急の場合ゆゑ、

岡本　但しは仔細をお聞かせあるか。

掃部　さあ、それは、

岡本　又は御紙面下さるか、

掃部　さあ、

岡本　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

岡本　如何なる密事か存じませぬが、他聞を憚る一大事を、迂濶に口外いたしませうか、それを御疑念遊ばすとは、ちとお恨みでござりまする。

〽忠義一途に突詰めし局が恨み直純も今は憚るよすがなく、

ト此の内掃部頭思入あつて、

掃部　佐野の渡りで時頼が常世の妻に出合ひしも斯くやと思ふ其の理り、男女の隔てあるとても世に老朽ちし直純ゆゑ、心許せし我が過り、それに引替へ局には役目の表正しくも其の返答は頼しゝ、何をか包まん明日の、お具足開きの儀について、西丸様の御身の上まことに危ふく候ゆゑ、御臺所のお逢ひを願ひ、お談じ申す儀がござつて、窃に罷り越してござる。

岡本　むゝ、すりやそれゆゑに今宵の内。

掃部　霎時の猶豫もならぬと申すは、實は斯くいふ直純は君へ强諫なしたれど御不興蒙むり、國元へ蟄居を仰せ附かつてござる。

岡本　えゝゝゝゝ。（トびつくりなす。）

掃部　あ、これ、（ト押へ、兩人四邊へ思入。これより床の合方になり、）

岡本　して明日のお茶の湯は、やはり御三家御家門を、お省きあつてゞござりまするか。

掃部　どうしてそれを御身には。

岡本　さあ存じませいでなりませうか、其の取沙汰に御臺さまも殊の外なる御心配、もし西丸の上様の御身に凶變ある時は、天下の亂れとわたくしへ御相談を遊ばしますれど、假令お附の女中でも、おさめの方より廻し者入込み居るを知つたるゆゑ、少しも心は許されず、又爰に居る番人も慾に迷ひて佞人の内意を受けろ輩ゆゑ、態とすげなく申したも、大事を漏らさぬ爲めばかり、してしてお家の納りはどうしたものでござりませう。

掃部　さ、其の納りを附けんにも蟄居の身分となりしゆゑ、外に手段の仕樣もなく、たゞこの上は大奥へ窃に立越え御臺さまの、御分別を伺ふのみと忍び參りし掃部頭、して御番衆の侍は、これに見えぬが何れへ行きしな。

岡本　只今お奥へ召されしゆゑ、折よく爰に居りませぬは、まだしも御運の盡きざる幸先き。

掃部　然らば障りのなき内に、何卒お奥へ御案内を。

岡本　お連れ申すでござりまするが、其のお裝では何とやら。

掃部　とあつて、親仁が女中衆に變化の術もござらねば、

岡本　失禮ながらわたくしの、この搔取を其の上へお羽織りなされてこつそりと、
掃部　いやもう七十八の老人が、錦の縫の搔取も氣恥かしけれど忠義の爲め、
岡本　そりやわたくしとて同じこと、局の身にて大奥へ、男を手引きいたしまするも、
掃部　餘所目にそれと見られなば、
岡本　何れ色ある搔取の、
掃部　心に錦は着て居れど、
岡本　模樣紅葉のはづかしき、
掃部　縫の袂も、
岡本　忠義の綾絲、
掃部　ほつれぬやうに、
岡本　失禮ながら、
〳〵脱ぎて手早く搔取の、姿繕らふ折柄に、
ト此の内岡本の局搔取を脱ぎ掃部頭に着せる、この時上手にて、
久内　お局さまはどれへござつた。お局さま〳〵。（ト呼ぶ。）
掃部　や、あの聲は慥に御番衆、
岡本　見咎められぬ其の内に、
掃部　然らばよしなに、岡本どの、
岡本　さあ、斯うお越しなされませ、
〳〵局の影へ直純が身をそむけ行く向うより、
ト此の内掃部頭搔取を羽織り岡本の局の後へ附いて上手へ行きかゝる、爰へ上手よりお廣敷番久内袴裝の親仁にて出來る、岡本の局これを見てびつくりして金行燈の明りを吹消す、久内思入あつて、
久内　や、こりやお局には、何で燈火を、
岡本　さあ、お庭口から吹込む風が、
久内　はゝあ風で消えましたか。（ト此の内掃部頭件の搔取を頭よりすつぽりと冠り上手へ入る、これを久内見咎め、）どうやら連れのお女中は、（ト行かうとするを岡本の局隔てゝ、）
岡本　ありや獅子舞をお好みゆゑ、
久内　扨は十日の御祝儀に、
岡本　女中同志の思ひ附き、

久内　然らば拙者が囃子方に、（ト又上手へ行かうとするを隔て、）

岡本　はて、御番を大事に、（ト久内を無理に下に居させるを、道具替りの知せ、）なされませ。

ト よろしくこなし、獅子の鳴物にて道具廻る。

（奥御殿の場）――本舞臺一面の平舞臺正面銀地の御簾襖、上下折廻し同じく銀地の御簾襖、所々に銀燭を照し、總て城内大奥の模様よろしく中央に須賀川奥女中兩肌脱ぎ、向う鉢巻にて蒔繪の廣蓋の上へ大きなる鏡餅を載せ開かうとして居る、左右に若松、臭竹、紅梅、青柳いづれも奥女中の裝にて居並び、此の見得一ツとやの唄にて道具留る。

若松　何と須賀川さん、其のお鏡餅は、

四人　開けますまいかいなあ。

ト 須賀川力をいれて鏡餅を開かうといふこなしいろ〳〵あつて、ト〻あぐれたる思入にて、

須賀　ほんにお表のお鏡開きは上供が五斗取り、下供が五斗取り合せて一石のお鏡餅ゆゑ、お小姓頭が二人して斧を打込む眞似をして、それから開くと申すこと、こんな小なお鏡餅は私一人で開けませうと思ひ込んで請合ひましたが、こりやもう降參でございますわいなあ。

青柳　それでもあなたが請合うて開いて見せるとおつしやつたゆゑ、若し又それが開けましたら、わたくし共が一品づゝ頭の物をあげる約束。

臭竹　又お鏡餅が開けぬ時は、あなたのお首をわたくし共が、お貰ひ申すお約束ゆゑ、それではお首をわたくし共がお貰ひ申さねばなりませぬ。

紅梅　いえ〳〵そんな麁末なお首をお貰ひ申しても、首ばかりではお賽日にも飾れませぬ、外の物になされませ。

若松　ほんにそれより須賀川さんの、鞠唄といふお隠し藝を今宵拜見いたしまして、それで和睦にいたした方がよろしいではござりませぬか。

須賀　おやまあ、そんなにわたしの首を安くなされますな、これでも役者の巴二右衛門が思ひ附いて居りますぞえ。

青柳　さうおつしやれば去年の春、宿下りに參つた時、芝居を見物いたしましたが、

臭竹　あの巴二右衛門といふ役者は、お閻魔さまに似て居りましたわいなあ。

紅梅　たとへにもいふ似たもの夫婦と、それで大方須賀川さんを、

若松　思ひ附いて居りますのは、ほんに不思議な御ぇんまでござりまする。

須賀　おやまあ、とんだお茶番でございます。

青柳　さあ〳〵、早う鞠唄を、

吳竹　やつてお見せ、

四人　なされませいなあ。

須賀　此の鞠唄はわたくしが在所に居る時子守たちが、子供をおぶつて守りをしながら、鞠をついた身振の藝當、どなたも其の氣で御覽なされい。

若松　さあ〳〵、拜見、

四人　いたしませうわいなあ。（トこれより須賀川持前の藝當よろしくあつて納まる。）

若松　ほんにをかしい、

四人　お人ぢやわいなあ。

須賀　この藝當をいたした代り、このお鏡餅は頂戴いたしますぞえ。

青柳　ても、慾の深い須賀川さん、

吳竹　それを頂戴なされても、

紅梅　其の儘にては戴かれず、

若柳　どうしてお開きなされますえ。

須賀　はい、お廣敷へ持つて行き、久内どのに割つて貰ひます。

吳竹　でも、あのやうなお爺さんでは、

紅梅　力がなうて、

四人　割れますまい。

若松　まあそのやうに見くびつて、

吳竹　お止しなされ、

四人　ませいなあ。

須賀　どれ頂戴鏡もちといたしませう。（ト須賀川件の鏡餅を抱へて下手へ入る。）

若松　若し皆さん、何時ものやうに、むべ山を取りませうではござりませぬか。

三人　それがよろしうござりまする。

〰かるた合せの折柄に天津局が案内に、つれて入込む直純が雲の通ひ路それならで、乙女の姿搔取をしばし留めて奥の間の樣子うかゞひ立歸り、

ト此の内舞臺の皆々かるたを出してむべ山を取つて居る、よき程に花道より以前の岡本の局先きに掃

部頭やはり掻取を冠り出來り、岡本の局掃部頭を花道へ待たせおき、さし足にて舞臺へ來り樣子を見て立歸り、

岡本　心許せぬ女中衆と疾より見拔きし廻し者も、お奥に見えぬ樣子ゆゑ、先づ御安心遊ばしませ。

掃部　然らば最早獅子舞の、眞似をせいでもよろしうござるか。

岡本　さぞ御窮屈でござりませう、さゝお脫ぎ捨て下さりませ。

掃部　慥にそれへ御返濟いたす。

〽安堵の思ひ掻取を局に渡し肩衣の、衣紋繕ひたゞずめば、

ト此の内掃部頭掻取をぬいで岡本の局に返す、兩人よろしく身繕ひをして、

岡本　さあ、斯うお越しなされませ。

〽御殿へこそは打ち通る、（ト兩人舞臺へ來り、）

お腰元衆、これにござつたか。

〽局の姿見るよりも散しのかるた取り片付け、

ト此の内岡本の局上手へ通る、掃部頭は下手に控へ居る、腰元四人かるたを取片附け、

若松　お局さまにはお廣敷へ、先刻おいで遊ばしましたが、

青柳　見受けますれば、どなたさまか、お伴ひ遊ばしまして、

吳竹　御用ありけなこの御樣子。

紅梅　お次ぎへ御遠慮、

四人　いたしませう。（ト立たうとするを、）

岡本　あゝいや〳〵其の遠慮には及ばぬ、して新參の須賀川どのは。

青柳　須賀川どのには、御臺さまよりわたくし共へ下されし、

吳竹　お鏡餅を一人して、開かうとなされましても、

紅梅　女子の手際には參らぬゆゑ、

若松　人手を賴みにお廣敷へ、參りまして、

四人　ござりまする。

岡本　先づそれにて差合なし。さ、直純さまにはどうぞこちらへ。

掃部　然らばお女中、御免下され。

〽わが大小を差しおいて、君の賜物手に携へ挨拶なして座に直れば、

ト此の内掃部頭大小を下手へ置き、短刀を持ち上手へ通りよろしく住ふ、腰元四人掃部頭を見て、

若松　して御入來の、

四人　あなたさまは。

岡本　同じお城に居ながらも奥お表と隔たれば、こなさん方の知らぬも道理、これへお越しの御老體は井伊掃部頭直純さま。

四人　えゝゝゝゝ。

〽聞いて驚く腰元が、座をへりくだり敬へば、（ト腰元四人下手へ下り、はッと辭儀をなす。）

掃部　あゝいや〳〵腰元衆、かくお女中の其の中へ掟に背き參りし老人、會釋は却つて迷惑いたす、遠慮に及ばぬ、さゝこれへ〳〵。

〽打解けてこそ見えにける、局はあたり見廻して、

岡本　御臺さまには今の間に、何れへお越し遊ばせしぞ。

青柳　御臺さまには御佛間へ、

吳竹　只今おいで遊ばしました。

紅梅　何ぞ御用でございますなら、

若松　申し上げるで、

四人　ございませう。

岡本　それなら此の由御臺さまへ、申し上げて下さりませ。

四人　畏まりましてございまする。（ト立ち上り、奥へ行かうとするを、）

岡本　あゝこれ、必ず共に穩便に、

四人　はッ、

〽心得奥へ入りにける。（ト腰元四人上手の襖をあけ奥へ入る。）

〽跡に直純打ち案じ、（ト掃部頭思入あつて、）

掃部　いやなに、岡本どの、定めて如在はござるまいが、婦女子は口のさがなきものゆゑ、これに居合す女中衆に、若しや間者のある時は。

岡本　その御心配もさることながら、あれなる四人は御臺さまの御意に叶ひし腹心ゆゑ、お氣遣ひには及びませぬ、外に一人須賀川と申す今參りの腰元は、何共以て心得ず、正しく讒者の廻し者と推察いたして居りまする。

掃部　油斷のならぬ此の時節、少しも心は許せませぬ。

岡本　まことに左樣でございまする。

〰始終に心おくの間に、春つけ鳥の御聲にて、（ト此の時うしろにて、）

御臺　なに、直純が參りしとや。

掃部　やゝ、あのお聲は御臺さま。

岡本　これへお越しと見えまする。

〰席を下りて兩人が出座を松の御操、たゞしき君も鶯の經讀みかけて谷の戸を立出でたまふ御風情、四邊を拂ふばかりなり。

ト此の内掃部頭下手へ來り、はゞと平伏なす、よき程に正面の御簾襖を左右へ明け、御臺所好みのこしらへにて以前の腰元四人附添ひ出で、奥竹よき所へ紫の褥を敷く、御臺所この上に住ひ、紅梅この側へ脇息を置く、若松、紅梅紙置臺、煙草盆などよろしく御臺所の前へ並べ、四人共御臺所の後へ居並ぶ。これにて御臺所こなしあつて、

御臺　思ひ掛けなう直純には、夜分に至り此の奥へ參りしは心得ず、何ぞ變りしことでもあつてか、餘人にあらぬ老職ゆゑ、遠慮に及ばぬ、近う〳〵。

〰御懇の御意ぞ有難き、直純猶も謹んで、

トこれより詰への合方になり、掃部頭思入あつて前へ進み、

掃部　仰せの如く此の直純、かゝる夜分に及びましてお奥へ推參いたしまするは、掟を犯し二つには御臺所の御深慮を驚かし奉る段恐れ入りたることながら、今日拙者上樣より國詰めを仰せ付けられ江州彦根へ引取りますれば、最早七十七の賀も祝ひ生先きとても限りあれば、再びかゝる御日見得も測り難なく、御臺樣へ今生のお暇乞に、罷り出ましてござりまする。

御臺　なに、土樣より其の方に、國詰め仰せ付けられしとや。

掃部　御意にござりまする。

〰樣子ありけに直純は凋れて居れど傍なる、黄金造りの輝きて夜目にもきらめく腰の物、

ト御臺所掃部頭の脇にある件の短刀へ目を附け、こなしあつて、

御臺　はて心得ぬ、其の方には何ゆゑあつて目通りへ、刀を携へ出でたるぞ。

掃部　はゝッ、其のお尋ねに預りまして恐れ入つたる事ながら、直純これまで數年の間君へ仕へて聊かの舊功を盡せしとて、今日退身いたす際に御祕藏のお刀を拜領いたしてござりまする。

御臺　扨はそれゆゑ携へしか。

掃部　これを賜はるばつかりに、死ぬに死なれず國元へ。

御臺　え、（ト聞き咎める。掃部頭氣を替へて、）

掃部　國元へ引取りまするも、身の面目と悦ばしく、御禮の爲めにお目通りへ持參いたしてございまする。

〽口に勇めど心には、愁ひを含む有樣に、御臺所は打ち案じ、

ト此の内掃部頭愁ひの思入にて差俯き居る、御臺所こなしあつて、

御臺　君よりお刀賜はりて國詰め仰せ付かりしは、不首尾にあらぬ其の身の晴れ、申さば目出度き退出なるに、何故その方は勇まぬぞ。

掃部　なか〳〵以て掃部頭勇まぬことはござりませぬが、斯く老衰に及びまして物の數にもならぬ身をこれ程までに上樣がお勞り下さりまするかと、思ひ廻せば勿體なく、有難涙がこぼれまする。

〽大事を餘所に言ひなして、落涙なせばはれやらぬ、御臺の心汲み取る局、

ト此の内掃部頭やはり打ち凋れてゐる、御臺所合點の行かぬこなし、岡本の局思入あつて、

岡本　これにも深き譯ありて、實は天下の大事ゆゑ、（ト言ひかけるを、）

御臺　あゝこれ、

〽扨はと心附きそひし、あたりの遠慮見返りて、（ト御臺所こなしあつて、）

何は格別、直純が暇乞に參りしとは、わらはに於ても悦ばしい、腰元共は次ぎへ立ち、酒肴の用意いたしてよからう。

四人　はッ。

〽はッと答へて立ち上るを、

御臺　必ず餘人に漏れぬやう、

四人　畏まりましてござりまする。

〽皆々次ぎへ立ちて行く、あとに御臺は岡本にそれと悟らせ建て切りし襖と共に御褥拂うて

こそは座したまひ、

ト此の内腰元四人下手へ入る、御臺所岡本の局に目くばせをする、岡本の局心得、上下の襖を明け拂ふ、是れにて正面の襖引きぬき、後一面御殿の遠見になる、御臺所褥を下りてよろしく住ふ、掃部頭この體を見て思入あつて、

掃部　扨は敏くも御臺樣には、愚臣が胸中お悟りありしか。

御臺　直純近う。

掃部　はッ、（ト前へ進む、是れより餝へ床の合方になり、）

御臺　この程よりの種々の取沙汰、將軍家にはその以前の御行跡とは打つて替り、佞臣どもの進めにて

晝夜婬酒に耽りたまひ、まだ其の上に我が君のお胤といへど疑はしき綱千代に世を讓らんと、西丸殿を明日のお茶に事寄せ失ふ御所存、そちを其の儘おく時は何かの邪魔と思召し、御祕藏ありしお刀を拜領させて國元へ隱居を仰せ付けられしか、それに相違はあるまいがや。

掃部 はゝッ、驚き入りし御明察、如何にも明日例年のお具足開きのお茶の湯も假お儀式との仰せ出だされ、是れ皆大老美濃守が君へお進め申し上げ、御三家御家門老若の列座を省き、上樣と西丸樣のみ御同席にて假お儀式のお茶の湯と承はりし臣等が驚き、扨は明日お立前のお茶の内こそ一大事、とさあ、萬一左樣な儀がござらば忠義に凝りし面々は駿府表へ立籠り、猶も大阪城内を根城となして西國の諸侯を語らひ惡人を、征伐なさん手筈ゆゑ、これぞ四海の大亂と徒黨を鎭め登城なし、お具足開きの末席を願ひ出でゝの御諫言、お用ひなくば其の場にて切腹なさんと存ぜしも、臣下を惜しむ我が君の御慈愛なるか拜領の、お刀ゆゑに死を止まり、國元蟄居仰せ付けられ餘儀なく退出いたさんとお玄關近く退きしが、せめてこの儀を御臺樣へ申し上げんと存ぜしゆゑ御法を犯し大奥へ推參なせし掃部頭、御賢慮願ひ奉る。

〽天下を思ふ老の身の歎息なして述べければ、御臺所は直純の忠義を感じ兩眼に餘りて落る御涙、局も共に落涙のしばし袖をぞ絞りける。（ト此の内三人よろしく愁ひの思入あつて、）

〽御臺は涙おし拭ひ、（ト御臺所顔をあげ、）

御臺 まこと天下の礎とも、呼ばれし其の方なればこそ、斯く身命を抛ちてよくぞお諫め申せしぞ、言うて返らぬことながら、恪氣嫉妬を慎しむが女子の道と思ふゆゑ、我が君樣の御行跡合點行かずと知るものゝ、是れまで諫めを入れしことなく、空に過せしあやまりも、

〽薄き妹脊はみづからの足らはぬゆゑと身を悔み、
假令賤しきものにもせよ、お手の附いたる腰元を勞り使ひし仁心が害となりたる其の上に、齡を積るそちまでに斯かる苦心をさせるとは、

〽いたはしさよとばかりにて又も涙にくれたまふ、側に局はお心を汲むも涙の果しなく、

（ト此の内御臺所愁ひのこなし、岡本の局思入あつて顔をあげ、）

岡本 いえ〳〵何の御臺樣に御あやまちのござりませう、御器量といひお里柄結構過ぎた御臺さま、御貞節なるお心ゆゑまことの道をお立て遊ばし、假にも御恪氣御嫉妬の御樣子さへも見せたまはず我が君樣の御意に叶ひお手の附いたるお女中は誰れ彼れとなくお愛しみ、その御慈愛をよい事に姐妃に等しきをうな奴が、色を以て媚び諂らひ遂には天下の一大事を、引き出すやうになつたるか。思ひ廻せば廻すほど御臺さまを蔑ろにいたしまするが口惜しく、夜の目も碌々合ひませぬ。

〰君を思ひ御家を思ひ悔し涙ぞ道理なる、直純態と氣を勵まし、

ト此の内岡本の局よろしくこなし、掃部頭思入あつて態と氣を替へ、

掃部　局の歎きはさることながら今更悔む場合でなし、たゞ此の上は明日の安危を待つて掃部頭鎧兜に身を固め、西三十三ヶ國の旗頭となり麾串握り、七十八を一期となし、修羅の巷で屑よく當の敵と差違へ、討死なすが本懷と覺悟を極めて居りますれば、御臺樣にも戰爭のお覺悟あつて然るべし。

岡本　未前を悟る直純さま、お覺悟ありし上からは十のものなら九分九厘、天下の大事目のあたり、納る工夫はなきことか。

〰歎きを餘所に直純か、勇ましげなる一言に、御臺も心取り直し、

御臺　（此の内思入あつて、）國の爲には親兄の因みを捨てゝ理を爭ひ、

岡本　假令主君にあるとても、忠義の二字には代へられず、

掃部　討ちし例も有明の、月の都は西の空、

御臺　東にのぼる光りさへ、失せて空しき雨催ひ、

岡本　涙にくもる御沙汰となるか、

掃部　又は旭の晴れ渡り、

御臺　目出たう祝ひ納まるか、

岡本　明日は天下の御安危に、

掃部　實に風前の燈火の、

御臺　消ゆるを厭ふ、

三人　思ひぢやなあ。

〰うすき氷も春の夜の頼み少なき折柄に、

ト此の内三人よろしくこなし、爰へ下手より以前の腰元四人若松は三ツ組の盃を載せし朱塗りの三方吳竹は喰積の三方、紅梅は屠蘇の銚子、青柳は蒔繪の組重を廣蓋へ載せ持ち出て來り、御臺所の前へよろしく並べ下手へ下り、

若松　はッ、仰せ付けられましたる酒肴の用意、

吳竹　幸ひお床のお喰積みを、

紅梅　取りそへましてお銚子を、

青柳　持參いたして、

四人ござりまする。（ト辭儀をなす、これにて三人氣を替へ、）

御臺　さ、目出度い門出、盃いたすぞ。

掃部　お流れ頂戴いたしまする。

岡本　どれ、お酌を取りませう。

〽すゝめ參らす御酒も常に似げなく盃へ、滿々うけて干したまひ、

ト岡本の局酌をなす、御臺所盃を取り上げ滿々とつがせ、思入よろしくあつて、ぐつと呑み、

御臺　掃部頭遣はすぞ。

掃部　はッ、頂戴いたすでござりまする。

ト（これより誂へ横笛の入りし合方になり、岡本の局盃を載せし三方を掃部頭の前へ持ち行く、掃部頭盃を取り上げ、ぐつと呑み咽る思入よろしく、御臺所この體を見て思入あつて、）

御臺　掃部頭、定めてそちは心勞にて、酒もおち〳〵過せまいが、もう心配には及ばぬぞ。

掃部　何と御意遊ばしまする。

御臺　料紙をこれへ。

岡本　はッ。

ト（これにて岡本の局蒔繪の硯箱と料紙を持ち御臺所の側へ置く、御臺所箱の内より短册を出し、歌を認めることよろしくあつて、）

御臺　肴代りぢや、これを遣はす。

掃部「ちりてこそ櫻はいとゞ目出たけれ、ありて此世に限りなければ、」（ト岡本の局是れを聞き居て、）

ト件の短册を出す、岡本の局取次いで掃部頭請取り、押し戴いて讀み下し、

岡本　お心ありげなそのお歌、（ト掃部頭さてこそといふ思入あつて、）

掃部　さては、大樹を、

御臺　あ、これ、（ト押へて、有合ふ喰積の松を扇にて切る眞似をして、）安心いたせ。

掃部　はゝ、はッ。

ト平伏する、此の時下手の家體の蔭へ以前の須賀川出で、是れを窺ふ、岡本の局思入あつて、

岡本　えい、

ト釵を手裏劍に打つ、これにて須賀川肩先きを貫かれ、

須賀　あいたゝゝゝ。（ト前へよろぼひ出て、掃部頭の傍へ倒れる、掃部頭これを引附けて、）

掃部　やゝ、鬼に等しき此奴の面體、

若松　ほんにこなたは、
四人　須賀川どの、
岡本　それぞ奸婦の廻しもの、
須賀　それ知られては、（ト逃げに掛るを掃部頭引戻してぐつと引付る、御臺所思入あつて、）
御臺　こりや直純、日出度う祝して、舞うて立ちやれ。
掃部　はッ。

ト是れをキッカケに下座にて羅生門の謠になり、掃部頭扇を持ち立上り、須賀川を鬼につかひ小鞠の立廻りよろしくあつて、トゞ須賀川をぽんと轉しよろしく納る、此の時花道の揚幕にて、

呼ビ　上様のお入り、（ト呼ぶ、皆々向うを見て、）
岡本　なに、上様の、
腰元　お入りとや。
四人
御臺　それぞ幸ひ、今宵を過さず、（ト向うへ思入）
掃部　あいや、拙者はこれにて、（ト肩衣の衣紋を直すを木の頭）お暇仕りまする。

ト皆々氣味合の思入よろしく、時計の音にて、

七幕目大切

木場武藏屋の場
一ッ目石置場の場

ひやうし幕

（役名――出羽屋忠五郎、お柳兄雷五郎藏、家主與九兵衞、船頭長次、武藏屋番頭喜右衞門、同手代太七、同與八。忠五郎女房おりう、其他。）

（材木屋見世先の場）――本舞臺四間通し常足の二重、錦綱を張りし蹴込み、正面紺曇簾、上の方杉戸の戸棚、下の方茶壁諸帳面の書割、兩棲障子にて見切り、いつもの所門口、この外材木書割の張物にて見切り、此の前に武藏屋と記せし用水桶、總て木場材木屋見世先きの體、爰に獅子舞の一紺の股引尻端折りにて獅子を冠り舞つて居る、これを△○紺の腹掛け股引武藏屋の紺半纏川岸揚げのこしらへにて留て居る、二重に太七與八着流し、紺の前垂手代にて控へ、門口の外に、獅子舞の二は首へ太鼓を掛け獅子舞の三摺鉦、同じく四は笛、いづれも股引尻端折り草履にて立掛り居る、此の見得獅子の囃子にて賑やかに幕明くと、一獅子を冠り奥へ行かうとするを、△○留めること宜しくあつて、

○　こう〳〵、何で手前達はづか〳〵と、見世へ獅子を舞込むのだ。
△　さつきから留るのに、いけ騒々しい、出て行かねえか。

一　（獅子をぬいで、）今日は正月の十一日、お藏開きの御祝儀に、惡魔を拂ひに來ましたのだ。

○　誰も賴みもしねえのに、斷りなしに人の家へ舞ひ込むといふがあるものか。

△　大神樂なら知らねえこと、一文獅子はみつともねえ、きり〳〵外へ出ねえのか。

一　出ろといふなら外へ出ますが、何も今年始めてお家へ獅子は舞ひこみませぬ。

二　年々木場の問屋衆は、神樂獅子のお得意ゆゑ、

三　門並みお兒世へ舞ひこんで、今年の惡魔を拂ふのだ。

四　一文獅子といひなさるが、物貰ひぢやあござりませぬ。

一　宿なしや菰ッ冠りと一つにされちやあ外聞がわるい。

○　一文二文貰つて歩きやあ、菰ッ冠りと同じことだ。

△　外聞が惡いも氣が強い。

一　强からうが弱からうが舞ふだけ舞はにやあ、出ては行かねえ。

三人　さあ〳〵遣ッつけろ〳〵。

ト獅子の囃子になり、一獅子を冠り○△を追ひ廻す、太七、與八立ちかゝり一を留め、

太七　これ〳〵お前方も靜かにして下さい、年々春は砂村から獅子舞に來なさるのは、誰知らないものもないが、此の二人は新參だから、お前方を知らないのだ。

與八　殊には家に昨夜から、一方ならぬ取込みがあるゆゑ二人も斷つたのだ、腹も立たうが春のこと機嫌を直して行つて下さい。

一　いえお前方のやうに言ひなさりやあ、何しに腹を立てますものか、いはゞ毎年上りますお得意さまのこちらのお店、お取込みがござりますれば、門から直に歸ります。

太七　それぢやあどうか今年の所は、此のまゝ直に歸つて下さい。

與八　その代りに又來年は、二年振り舞つて貰ひませう。

一　さういふことなら歸りますが、これが二合半か平井から出て來たものならいゝけれど、

二　冬から近い砂村で、もやし胡瓜と同じやうに、

三　何所の祭へ出掛けても幅をきかせる囃子方、

四　土地の外聞になりますから、菰ッ冠りとわつち等に、

一　けちを附けた彼の衆にちよつとあやまらしておくんなせえ。

太七　賣詞に買詞だが、菰ッ冠りと言つたはわりい。

與八　二人の者にあやまらせませう。

○　もし〳〵太七さん打捨つて置いておくんなせい、一文二文貰つて歩きやあ孤ッ冠りも同じことだ。
△　向うも土地の外聞なら、こつちも木場の外聞だ、何であいつ等にあやまりませう。
太七　はて口に物はいらねえから、
與八　ちよつとあやまつてしまひなせえ。
○　萠し胡瓜は江戸へ出て、幅が利くか知らねえが、
△　一籠いくらのへぼくた野郎に、あやまることは出來ません。
一　なに、へぼくた野郎とは誰がことだ。
○△　誰でもねえ、うぬがことだ。
四人　うぬ、さう吐かしやあ此の儘に、（ト獅子の四人立ち掛るを○△留めて、）
太七　これさ〳〵靜かにして下せえ。
與八　隣近所へ濟まないから、
一　えゝ、濟むも濟まぬも、
四人　構ふものか。

ト獅子の鳴物になり、四人○△に立掛る、太七與八捨ぜりふにてこれを留める、下手より與九兵衞羽織、ふんごみ、古風な家主のこしらへにて出來り、直に内へ入り、

與九　これ〳〵こなた衆は靜かにしねえか、此の取込みのある中で、何をそんなに騷ぐのだ。
太七　これは大家さまでござりますか、好い所へ來て下さりました。
與八　どうかお前さまの御威光で、取り鎭めて下さりませ。（ト與九兵衞此の内双方を留める、）
與九　いつたいこれはどうした譯だ。
○　この獅子舞の百姓めらが、無暗に内へ舞込むゆゑ、出て行けと言ひましたら、
△　出て行かねえと言ひますから、それでごた〳〵言ひましたのだ。
一　いえ、それといふも此の衆が孤ッ冠りも同じことだと、わつちらのことを言ひますから、兎やかうも言ひましたのだ。
與九　そりやあ言はれたッて仕方がねえ、一文二文貰つて歩けば、孤ッ冠りも同じことだ。
二　そりや大家さんまで同じやうに、
三　孤ッ冠りと言はれちやあ、
四　猶々こゝは出られねえ。
與九　なに、猶々こゝは出られねえ、出られずば何時までも居ろ、町法を以て手前達を召連れ訴へをし

てやらう。

一　え、召連れ訴へを、

四人　しなさるえ。

與九　おゝ、しなくつてどうするものだ、喧嘩の樣子は材木の蔭であらかた聞いて居た、取込みがあるから行けといふに、行かねえといふは強情だ、この始末がらを玄關へ言上げ、突出して遣るからさう思へ。

二　おゝ面白え、こんなことで突出されるなら、

三人　さあ突出してくれ〳〵。（ト立ち掛るを一留めて、）

一　これ〳〵靜かにしろ〳〵、こんな詰らねえ端た喧嘩で、玄關へ出ちやあましやくに合はねえ。それだといつて此の儘に、指を咬へて歸つた日にやあ、

【三】

四　第一砂村の土地の恥だ。

一　その恥の雪ぎやうは、後でいくらも仕樣があるから、今日のところはおれに任せろ。

太七　春早々お前方も、間違ひをしては延喜が惡い。

與八　腹も立たうがこれぎりに、笑つてしまつてくんなせえ。

一　えゝようございます、今日の所は此の儘に、料簡をして歸ります。

與九　二度と再びこの木場へ、足踏みをするときかねえぞ。

二　おら達もこれから來ねえが、

三　痴氣持の兀天窓、

四　稻荷さまへ來るときかねえぞ。

與九　きかねえもないものだ、おらあ痴氣持ちぢやあねえぞ。

一　ねえことがあるものか、

四人　大畢丸め。

與九　どうしたと。

四人　狸親仁ヤア。（ト獅子の囃子になり、四人下手へ入る、與九兵衞立ちかゝり、）

與九　うぬ、言はして置けば、（ト行かうとするを皆々留めて、）

太七　逃げて行つたらいゝにして、

與八　もう打捨つて置きなせえ。

與九　忌々しい一文獅子だ。

○　以前と違つて近頃は、どこの家へもづかく入り、

△　小言をいやあ、兎やかうと、惡い風になりました。

與九　これから町内言合せ、來ねえやうにしてやらう。

ト合方になり、奥より喜右衛門羽織着流し番頭のこしらへにて出來り、

喜右　おゝ與九兵衛どのか、待つて居ました。

與九　これは番頭の喜右衛門どの、嘸昨夕からお疲れでござりませう、一人でさへも騷ぎだのに旦那さまが俄の吐血で、果敢なくおなりなされた所、引續いて御新造さまが、扨とんだ事でござりました。

喜右　内外の者にも口留めして、なるたけ世間へ漏れぬやう包んではあるけれど、隱すことほど顯はれ易く、最早パッといたしたやうだ。

與九　浮世の噂の寄合所、湯屋髮結床で尾に尾をつけ、御新造さまが御家の爲めに旦那さまを刺殺したと、跡方もないことを、種々取沙汰をいたします。

喜右　それといふのも柳橋の出羽屋のことがあるゆゑに、人も兎や斯う言ひまする、惡い噂のないやうに、掃部宿の彦兵衛さまが一方ならぬ御心配で、御親類方と相談の上、御養子綱太郎さまを直に御家督になされるお積り、委しいことは太七から聞かしッたでござらうが、名主どのへ其の事を届けて下すつたらうの。

與九　いえ、まだ届けに參りませぬ。

喜右　御家督が濟んだ上、旦那さまや御新造さまの御死去を世間へ觸れる積り、なぜ届けに行つて下さらぬのだ。

與九　名主へ届けに參りますのは御妾腹ではござりますが、徳太郎さまといふきつとした御實子がござりますのに、それを差し置き御養子へ御家督とは、些と筋違ひかと存じます。

喜右　筋が違ふが違ふまいが、御親類方や彦兵衛や御相談の上で極つた御養子、こなた衆の知つたことではない。

與九　いえ、外の事は兎も角も私も御地面の支配をいたし居りますれば、こればかりは一不審申さねばなりませぬ。

喜右　綱太郎さまの御家督は、旦那さまの御遺言だが、こなたは御遺言を背くのか。

與九　決して背きはいたしませぬが、

喜右　御遺言に背かぬなら玄關へ早く出るがいゝ、それともこなたが言はれずば、組合から言はせよう

か。

與九　そりやあ御遺言とあるならば行くまいものでもないけれど、綱太郎さまへ御家督を譲るといふは合點が行かぬ。

喜右　なに、合點の行かぬことがあるものか、御遺言狀に御家督から御親類方への御遺物、我々にまでそれ〴〵にお形見分が記してある。

與九　それでは旦那の御遺言狀に、お形見までが記してあるとか、御存生の内第一のお氣に入りのこの家主、定めてわたくしへもお形見分けが、

喜右　おゝあるとも〳〵、結構な下されものだ。

太七　いや結構な下されものとは、氣の惡い大家さん。

與八　柳橋の出羽屋の家で、千兩の估券を貰つたから、

○　第一番のお氣に入り、

△　三千兩は大丈夫だ。

與九　多くの中で結構な下されものゝある家主、旦那へ對し一番頭どの麁略にしては濟みませぬぞ。

喜右　いやその下されものがあるゆゑに、こなたをわしは何とも思はぬ。

與九　そりや又何で。

喜右　さあ、結構な下されものゆゑ。

與九　して下さつた其の品は。

喜右　お暇を下すつたのだ。

［與九　それは何より有難い、流石は御贔屓の旦那さまだ。（ト小躍りして悦ぶ。）

○　これ〳〵大家さん、お暇を下すつたのが、

△　お前はそんなに有難いかえ。

與九　え、それではわしに下すつたのは、（ト喜右衛門懐から遺言狀を出し、）

喜右　「年來勤め方宜しからず候ゆゑ、悴の代になり候はゞ長の暇遣はすべく候。」これ見さつしやい、御遺言狀に記してあるわ。

與九　えゝ、さりとは旦那も情ない、とんだものを下すつた。

喜右　四十九日が過ぎた上、故なく暇と思つたが綱太郎さまの御家督を、兎や斯ういふゆゑ暇をやるのだ。

與九　それは大變、まことのことなら四十九日はまだなこと、どうか是れから百ケ日、相成るべくは來

年の一周忌まで無事で居るやう、これ番頭どの、お頼み申す〳〵。（ト手を合して拜む。）

喜右　いや御遺言ゆゑ、お詫は出來ぬ。

與九　これ太七どの、與八どの、どうぞ執成しをして下さい。

太七　此の前二人が一晩明け、しくじつたとき詫言を、してくれもせぬ因業大家、

與八　何で執成しをするものか。

與九　それでは川岸揚げの長次に傳吉、こなた衆を頼む〳〵。

○　いくら頼むと言ひなすつても、暇と聞いて有難いと、

△　言つたからは仕方がねえ、往生して貰ひなせえ。

與九　あれはうつかり、つい言つたのだ。

喜右　假令誰が詫びをせうとも、御遺言は反古にはならぬ。

與九　それではどうでも退役か。

皆々　知れたことだ。

與九　えゝゝゝゝ。（トびつくりしてへたる、此の以前下手より以前の獅子の人數出で、門口に窺ひ居て、）

一　大家でなければ、

四人　さつきの返報、

ト獅子の鳴物になり一獅子を冠り、與九兵衛を追廻す、皆々こつちやになり、トゞ獅子の口をあけて與九兵衛の頭を啣へる、此の見得よろしく右の鳴物にて道具廻る。

（一ツ目石置場の場）――本舞臺一面の平舞臺、向う所々に石を積みし張物、この前に腰を掛ける程な葛籠石を並べ、上の方尺角の石を積みし張物にて見切り、下の方柵矢來柳の立木、後黑幕、總て一ツ目石置場夜の體。時の鐘波の音にて道具留る。と時の鐘端唄の合方、通り神樂になり、花道より三幕目の五郎藏頬冠り紺の腹掛着流し三尺帶草履にて出來る、後より三幕目の忠五郎着流し草履下駄にて出來り花道に留り、

五郎　今の間に曇つて來たが、まだ雪があるやうだな。

忠五　北風が東風にかはつたから、明日あたりは降るだらう。

五郎　何にしろ川岸ッ端で横ッ面を吹ッ切られるやうだ。

忠五　蕎麥でも來たら一杯やつてあつたまらうと思つたが、まだ春だから出ねえか知らぬ。

五郎　さつき家で呑んだ酒がすつかり醒めてしまつた。あゝ寒い〳〵。（ト言ひながら右の鳴物で舞臺へ來

り、）これ忠五郎、どこへおれを連れて行くのだ。

忠五　おゝとつくりお前と話しをするにやあ、隣近所のねえ所でなけりやあ話しが出來ねえから、それで爰まで連れて來たのだ。

五郎　こんな所へ連れて來ずとも、家で鍋でも突つきあつて呑みながら言つても分ることだ、何でそんなに隣近所へおれが話しを憚かるのだ。

忠五　一杯やると二言めにやあ大きな聲をお前がするから、家ぢやあとつくり話しは出來ねえ。

五郎　それで爰まで連れて來たのか。

忠五　川ッ縁で寒からうが、ちつとの内だ爰へ掛けねえ。

ト忠五郎手拭で石の上を拂ふ、五郎藏思入あつて尻を端折り身拵へをする。時の鐘、日覆より霞附き灯入の月をおろす、忠五郎五郎藏を見て、

かう兄貴、何で尻を端折るのだ。

五郎　おれが尻を端折るのか、こりやあ逃げ仕度をするのだ。

忠五　何で逃げ仕度をしなさるのだ。

五郎　おゝ仕なくつてどうするものだ。（ト時の鐘、木遣崩しの合方へ通り神樂を冠せ、五郎藏石へ腰を掛け手拭を取つて、）今更言はずと知れたことだが、いつぞやおれが筋立てゞ首尾よく行つて旦那から手前が貰つた角地面、千兩といふ估券だから二つに割りやあ五百兩、一割にしても百兩は俺にくれにやあならねえ所、思ひ掛けなく千兩の估券を旦那がくれたのは、言はず語らず德太郎に讓る心に違ひねえから、こいつはうつかり遣えねえとおつな所へ道理をつけて、廿五兩おれにくれたが五分の禮にもならねえから痞に障つて小胸がわるく叩き返さうと思つたが、そこはおれも年の功太く短かく取るよりやあ、細く長く取つてやらうと、それからこつちへ五兩三兩いやがれるのを合點で三日に揚げず借りに行き、今日は一番大袈裟に五十兩とふッかけたら、入るなら金も貸してやらうが、家で話しが仕難いから近所まで行つてくれと、無理におれを連れ出したは、寒さは寒し軍鷄屋へでも引張りこんで一杯呑まし、五兩位で叩きなぐる了簡だらうと出て來たが、爰までござれに石置場まで、連れて來たのは外ぢやアあるめえ。よく芝居にもある筋だが再び無心を言はねえやうに、おれを爰で殺す氣だらう。（ト思入にて言ふ。忠五郎思入あつて、）

忠五　これ兄貴、詰らねえことをいひねえな、何でそんなことをおれがするものだ。

五郎　しねえものが何でまた、家を出る時匕首を懐へ入れて來たのだ。

忠五　え、（ト思入。）

五郎　用箪笥の引出しから、おれに隠して懐へそつと入れたは白鞘物、こいつァをかしな素振だとちらりと見たゆゑ油斷はしねえ、小便に行く振をして、臺所からあげて來た手前の所の出刄庖丁、（ト懐から鬱金木綿の財布に包んだ出刄庖丁を出し、）出水でとられた鼈同様、どうで殺されると極つたら、卑怯に逃げはしねえ替り、たゞはおれも死なねえから血塗れ仕事をするつもりで、爰で殺して邪魔を拂へ。

忠五　悪いことにやあ先きから先き、二面の札ぢやあ引手のねえなめまで見抜くお前だが、そいつあちつと勘が違つた、芝居にあるか知らねえが、おれも出羽屋忠五郎、少しは人にも知られたからはそんな淺慮なことはしねえ、内で言つてもいゝことだが近所の口が騒陶しいから、往來のねえ石置場へ寒ッさらしに長い橋を渡つて來たは今夜ぎり、お前が無心を言はねえやうに、遣り切りを附けに來たのだ。

五郎　其の遣り切りを附けるといふは、言はずとおれを殺す氣だらう、（ト時の鐘合方きつぱりとなり、）昔話しも野暮なことだが、十四五からして野天をぶち、質屋の押借りぶつたくりで突出されたも幾度か、廿五までは持つめえと言はれた體も運がよく、僅か五十か一百のたゝきで再び娑婆へ歸り脇繪といふはほんの名ばかり、年中賭場の梶取りに、巣どりの早手に出合つてもこうべを早く帆をかけて危ふい難を脱れて來た命冥加な五郎藏だが、今夜ばかりは乗ッ切れねえ、しもると覺悟をしたからはすつぱり爰でばらしてしまへ、然し義理あるおらあ兄だぞ、水竿で川岸をつくやうに、忠五郎、われがどでッ腹へ、穴があくから承知で殺せ。（ト忠五郎思入あつて、）

忠五　兄貴、よつほどお前もゆるんだぜ、そんなけちな了簡の、おれだとお前は思つて居るのか。

五郎　えゝ、御大そうなことを言やあがるな。

ト五郎藏庖丁の財布を取りきつと思入、時の鐘謎への合方になり、忠五郎これを見てにつこり笑ひ、

忠五　これまで度々五兩十兩お前がおれに無心を言ふのは、いつぞや貰つた千兩の估券があるから言ふのだらうが、彼れを質にぶち込んで遣つた日にやあ貝の人、爰は一番盆をはなれて旦那の胤の德太郎へ悉皆譲れば兎やかうと人に言はれる所もねえと、ふつと心に浮んだから酒に目のねえお前の所へ、氣に入らねえのを合點で切餅一つ遣つたが不足で、それから此方へ五兩十兩耳騒陶しい眼がらせも、繋がる縁に仕方なく五兩といやあ三兩貸し、三兩といやあ二兩貸し素手で歸したことはねえが、酒の癖とは言ひながら、やれ相對姦通だの、美人局で取つたのと、大きな聲で言はれちやあ隣近所へみつともなく、遂にやあ家を疊んでしまひ、田舍へでも行かにやあならねえ。それゆゑ今夜橋を越して此の石置場へ連れて來たのは、これまでおれに氣障を言つて無心をいふ

のも估券があるゆゑ、（ト懐から堅に卷いた估券狀を出し、）さつきお前が白鞘と見違へたは外ぢやあねえ此の千兩の估券狀、これをお前に上げるから、此の後おれに一分でも無心を言つてくんなさんな、（ト五郎藏の前へ估券を出す、五郎藏びつくりなし默つてゐるゆゑ、）それともお柳を引揚げて、旦那で金にする氣なら親なき後は兄は親、お前にお柳を返さうから奏るとも燒くとも勝手にして何千兩でも取るがいゝ、飽きもあかれもせぬ仲だが、きざを聞くのが厭だから三行半を書いて來た、（ト紙入から離緣狀を出し、）さあ捨賣りにしても七八百兩、直に手に入る估券狀、又は千と二千になるお柳が體の離緣狀、よく考へてどつちでも、氣に濟んだ方を取んなせえ。

ト五郎藏の前へ二通の書附を差出す、此の内五郎藏は腕を組み考へる思入あつて、トゞ感心せしこなしにて、

五郎　いや忠五郎堪忍してくんねえ、おれがけちな根性から、手前が貰つた千兩の估券狀がむやくしくきざをいつちやあ度々無心、五十兩と言つたらば、二十五兩も貸してくれるか少なくも、十兩は手に入れる氣で借りに來たが、如何におれがうるせえとつて、千兩といふ估券狀、又これまでの金の蔓お柳を去つて返さうとは、切れ放れのいゝ江戸ッ子料簡、實におらあびつくりした、年は上だがどうして〳〵、なか〳〵手前にやあ及ばねえ、斯う決心をするまでは嘸おれが厭だつたらう。向後ふッつり心を入替へ堅氣になつて稼ぐから、どうぞ堪忍してくんねえ、なんぼおれが慾張りでも是ればかりは取られねえから、估券狀も去狀もそつちへ仕舞つて末長くお柳と中よく添つてくんねえ。（ト五郎藏估券と去狀を忠五郎の前へ出しよろしく思入。）

忠五　お前の心を入替るも幾度だか知れやあしねえ、そりやあおらあ受取り難い。

五郎　成程これまで度々だから、受取り難いといふのも尤も、然し今度は嘘でねえ證據を爰で今見せよう、（ト以前の出刄庖丁で髪を切る、仕掛にて髷だけ落ちるを取り上げ、）これが何より慥な證據だ。

ト忠五郎の前へ出す。

忠五　まこと心を改めるなら、髪を切るにやあ及ばねえのに、無駄なことをするぢやあねえか。

ト忠五郎髷を取上げ思入、五郎藏髪をかき上げ手拭を冠る、波の音端唄の合方通り神樂、ぱた〳〵にて下手より三幕目の船頭長次尻端折りにて、出羽屋といふ吊提灯を提げて先きに立ち、跡より三幕目のおりう盥結びの髪、世話裝、吾妻下駄にて出來り、

長次　もしお上さん、親方が居なさいましたよ。

りう　おゝ忠五郎さん、そこに居なさんしたか。

忠五　思ひ掛けねえ、どうして爰へ。

長次　さつきわつちが安宅から、歸りがけに石置場へ、曲りなすつたのを見かけたから、一本槍に來ましたのだ。

五郎　見りやあ二人とも息を切つて、何ぞ急な用でもあつてか。

長次　急な用の何のと、大變な事が出來たのだ。

忠五　なに、大變なことゝは。

りう　もし木場の旦那が吐血とやらで、昨夜おなくなりなさいました。（ト忠五郎びつくりして、）

忠五　え、木場の旦那がなくなつた。

五郎　そりやあ大變なことだなあ。

長次　まだそればかりぢやあござりませぬ、御新造さんも御一緒に、おなくなりなすつたさうだ。

忠五　そりやあまあどういふ譯で。

りう　委しい事は聞かぬけれど、旦那は昨夜吐血をなすつて果敢なくおなりなすつたので、御新造さまもハツと思つて、其の場で旦那と御一緒に、お亡なりなされましたとのこと。

五郎　二人一緒に死ぬといふは、何か世間へバツと言はれぬ、變な事でもありやァしねえか。

忠五　（思入あつて、）あの御新造は利發な生れ、男勝りと日頃から噂のあつた上からは、こいつあ兄貴の言ふ通り、吐血といふは合點が行かねえ。

長次　そんなこともありますめえが、今しがた深川から川岸へ來た若い者がお客を待つてる其のうちにこつちの者へ話して居たにやあ、昨夜木場の武藏屋に大騒動があつたさうだが、どういふ譯か旦那があつてはお家の爲にならねえとかで、昨夜こつそりやつてしまひ、其の場を去らず御新造が自害をして死んだとやらいひましたが、嘘か實か知れないが、とんだ噂を聞きました。

ト忠五郎身ごしらへをして行かうとするを、おりう留めて、

りう　いえ〳〵お前は行かれぬわいなあ。

忠五　なに、行かれねえとは。

りう　さあ、お前が木場へ行かれぬは、御新造さまからわたしの所へ、參つたお文がござりますゆゑ。

忠五　して其の文は何時來たのだ。

りう　今しがた使ひにて屆いたゆゑにお前の跡を、追つかけて來ましたわいな。

忠五　そこにあるなら、早く見せろ。

りう　とつくり讀んで見やしやんせいな。（ト懐から文を出す、忠五郎開き見る、長次提灯を差出す、）

忠五「いまわの際に一筆書殘し候、忠五郎そなた兩人へは積る恨みも候へども、其の以前の忠義に免

じ何事も申さず候、傷りにもせよ旦那どの、胤なりと申し候へば、徳太郎こと大切に育て、先達て旦那どのより遣はされ候千兩の估券狀は徳太郎へ相讓り、出羽屋の家名相續いたさせ申すべく候、まつたそなた衆兩人は一家親類の手前もあれば暫く出入差留め候、間、左樣心得申すべく候まだ〳〵申し度こと候へども心忙しく候まゝ、これのみ書殘し申し候、あら〳〵かしく、りうどのへ、みさより、」（ト讀終りびつくりなし、）すりや御新造さまにはわれ〳〵ゆゑ、今更いつても返らぬが、濟まねえことであつたなあ。

五郎　斯うなるからは仕方がねえ、一旦貰つた千兩の、估券を木場へお返し申し、

忠五　この身のお詫びをするのが第一。

りういえ〳〵お前が行かしやんしても、御新造さまの御遺言、誰れ逢ふものもございますまい。

忠五　それだといつて、此の儘には。

りういえ〳〵お前はやられぬわいなあ。

忠五　えゝ、いらぬ留め立て、放せといふに。

ト おりう留めるを忠五郎突き放す、このはずみに仕掛にておりうの鬢落ちる。

長次　やあ、こりやお上さんには、（トびつくりする。）

忠五　何で手前は髪を切つた。

りう　さあ、わたしやお前に暇を貰ひ、身の言譯に尼となり、旦那さまや御新造さまのお跡を弔ふ心でござんす。

五郎　おゝ妹出來した、よく切つた、この五郎藏も心を入替へ、髪を切つて坊主になる氣だ。

ト 手拭を取る。

りう　そんなら兄さん、お前も今日から、

五郎　眞人間になつたのだ。

忠五　さういふ二人が心なら、反古にならねえ此の去狀、（ト以前の去狀をおりうに渡す。）

りうえゝ嬉しうござんす。

忠五　叶はぬまでも估券を持つて、これから木場へこの身のお詫びを。

ト きつとなる、獅子の囃子波の音になり、後の黑幕を切つて落し、向う大川、灯入の屋根船のある遠見になり、これと同時に紺の腹掛、股引、武藏屋の半纏を着たる筏乘り四人出て、

○　うぬは出羽屋忠五郎、

四人　覺悟しろ、（ト右の鳴物にて打つて掛る、ちよつと立廻り、五郎藏左右へ投げ、）

五郎　こゝ構はずと、

忠五　合點だ。

ト引張りの見得よろしく、先づ今日は是れぎり。

ト目出度く打出し

柳澤騒動（終り）

竹の内栄耀

盛衰記
圖會模

挿扇妓王妓女朗詠一奏大相國榮花宴

今我國賢人稱世

其樂さを我もとて望みは高き大文字山思を焦す緋櫻は鹿谷の宴會新亞相が催しに酒酣の師光が心の駒も狂ひし議論破し陶器に凶を示す是ぞ瓶子が艶るゝと賀祝す行綱が變心を悟りし主僧都が卽智父の機嫌を伺に嫁御臺な饗應の琴にかけ引かれ者の小唄とは捕縛を受し西光が驕奢を罵る怒に堪えず入道が難波に命じ共に呵責の成親卿兄をいたはる千歳の前夫へ告る水莖は駒に鞭つ　柳が注進宗盛父とも甲冑かため院の御所へ皇を幽せん暴擧の幸先冠裝束悠然と入來る内府重盛公尊王忠義の道を說き直衣の袖も涙にぬれ命に替て父を諫むる孝に恥入る清盛が鎧の駒を墨染の衣にかくす折を得て死刑をなだむる小松の仁心硫黄島に俊寛と共に憂苦の成經康頼二人を迎ひに基安瀬尾ゆるがせならぬ君命の大赦にもれし俊寛が今は孤島に獨妻子を慕ひ歸洛を羨み足ずりし腸斷るゝ悲しみを涙と共に島長蟹が鬼界ケ島に鬼は無礒に音を啼島鵠小松の大臣が諫より日本外史に趣向を得し新十八番歌舞伎の榮

「平家物語」は明治九年五月、作者六十一歳の時、中村座に書卸された。此の内小松重盛諫言の場は新歌舞伎十八番の一とされてゐる。活歴なる熟語の生れたのは、この作の出來たよりも二年ほど後のこと、即ち明治十一年十月「二張弓千種重籠」の上場された時假名書魯文がその漫評中に始めて用ひたのであるが、此の作も亦活歴なるものゝ一つであつたことはいふまでもない。兒島高徳を演じ、吉備大臣を演じた九世團十郎が、その類型的作物としての重盛諫言を演出したものといつてよからう。然し書卸しの時には重盛も好評であつたが同優の扮した島の俊寛がそれ以上に評判がよかつたといふ。兎に角團十郎の創造した重盛なる人物は、歴史畫以上の小松内府らしい典雅莊重なものであつたことは特筆に値ひする。

書卸しの時の役割は、市川團十郎(法勝寺の執行俊寛僧都、小松内府重盛)、岩井半四郎(重盛嫡嗣千歳の前)、中村仲蔵(平相國清盛入道淨海、島長四郎太夫)、片岡我當(右大將宗盛、丹波少將成經)、片岡我當(小松中將惟盛)、中村時蔵(藤原師光入道西光、平判官康頼)、坂東しうか(白拍子祇女)、市川姉蔵(多田蔵人行綱、鎌田兵部之介、丹左衛門尉基安)、中村相蔵(藤尾太郎兼康)、岩井小紫(盛國妻しがらみ)、岩井繁松(經遠妻吳羽)、市川新蔵(丹吾兵衛尉太郎)等であつた。口絵にしたのは、國周筆の錦絵で、挿絵にしたのは、團十郎の重盛及び周重筆俊寛の錦絵の寫眞である。

大正十年三月

校訂者誌す

牡丹平家譚（新歌舞伎十八番の内、重盛諫言――三幕四場）

序幕

鹿ヶ谷山莊會議の場

〔役名――法勝寺の執行俊寛、新大納言成親卿、藤原成經卿、師光入道西光、平判官康頼、多田藏人行綱、舍人梅丸、諸士四人、雜掌、仕丁。白拍子扇蝶、其他。〕

（山莊塀外の場）――本舞臺三間の間後一面築地、上手へ寄せて九尺瓦庇のある供待の腰掛け、下の方に櫻の立木、ずつと上手山組の張物にて見切り、日覆より櫻の釣枝、總て鹿ヶ谷の山莊塀外の體。爰に△○の雜掌上手の縁に腰を掛け、下手に□◎の仕丁長柄の傘を持ち立ち掛り居る、この見得樂太鼓の管絃へ山おろしを冠せ幕明く。

△ いやなに、右源太どの、今日是れなる山莊へ歷々方のお寄合は、詩歌連俳のお催しか、又は管絃のお催しでござらうか。

○ やはり櫻を眺めながら白拍子に舞を舞はせて酒宴をめぐらし、今日一日命の洗濯いたさうといふ愉快のお催しでござらうわえ。

□ 何にしろ、御主人方は女を側へ引き附けて飲んだり喰つたりなさるから、今日は定めて面白からうが、

◎ 供待をして居るものは、退屈をして大きな難儀、もう大概に歸ればいゝに。

△ 何さまそちが言ふ如く、假令櫻が滿開いたし、どれ程景色がよいとても、

○ 只見て居つては興にならぬ、花より團子と申すのは、爰等のことであらうわえ。

ト此の時下手にて轡の音するゆゑ、

□ あれ〳〵、あすこに繋いである、馬も退屈したと見えて、

◎ 手綱を解いて貰ひたさうに、嘶きをして居りまする。

△ いや人間も退屈だから、馬も退屈いたすであらう。

○ まだ我々は櫻の木に繋がれて居ぬのが仕合せぢや。

△ 何と供待のその間に、一鞍せめて見ようではござらぬか。

□ 乘り心も知らないくせに、

◎ 險難なことはよしになさい。

△ 知らぬとは失敬千萬、斯う見えても馬の方では、隨分譽れを取つたものぢや。

○ 然らば御身のお嗜みを、是れにて見物いたしませう。

□ いや、よせばいゝのに、

◎ 險難なものだ。

△ どれ、一鞍せめてくれん。

ト下手へ行きに掛る、爰へ上手より梅丸見髯舍人のこしらへにて出で、△を支へ、

梅丸 いや、乘ることは叶ひますまい。

△ 誰かと思へば、舍人の梅丸、

○ なぜ乘ることは叶はぬのだ。

梅丸 御主人様の乘る馬へ賤しい身で乘る時は、お馬を穢すその上に、畜生ながらも腹をたち、暴れ出された其の時は、怪我をするのは知れたこと、又御主人に知れる時はお前さんも大きなお咎め、それゆゑ馬へ乘ることは、叶ひますまいと申しました。

□ 成程、こりやあ梅丸の、

◎ 言ふのが一々尤もだ、

△ いや〳〵それはいらぬ留め立て、賤しい身ゆゑ乘られぬと手前達に見下げられては、猶々もつて

残念だ、是非とも一鞍せめて見せう。

梅丸　お馬の掛りはこの梅丸、手籠めに乘るとお言ひなさりやあ、力づくでも留めねばならぬ。

△　こりやあ面白い、見事われが、

梅丸　おんでも無いこと、

△　何を小癪な、（ト△下手へ行き掛る、梅丸支へてちよつと立廻る、此の留り後にて、）

呼ビ　今様の始まり、（トよぶ、皆々是れを聞き、）

○　や、そんならこれから今様が、

□　又はじまると、

◎　見えるわえ。

△　この間に、さうだ。

梅丸　いや、やらぬ〳〵。

ト是れより宮神樂になり、長柄の傘を遣ひ皆々車引と見える立廻りよろしくあつて、とゞ件の傘を開き車と見せ△◎に肩車をして時平の見得、上手に○、下手に□、中央に梅丸車引の見得、この模様よろしく道具廻る。

（俊寛山荘の場）――本舞臺四間通し高足の二重、本緣附中央書院階子檜皮葺の庇銀張の欄間、是れへ唐花の紋を附し幕を張り、正面銀地墨畫の山水の襖、二重の上手山組の張物、同じく下手庭の中門の裏を見せ扉出入りあり、よき所に櫻の立木、日覆より同じく釣枝、總て俊寛山荘の體。二重の前面一面に銀地の御簾屏風を立廻し、平舞臺中央に扇蝶白拍子のこしらへにて舞扇を持ち控へ居る、上下に諸士四人何れも烏帽子素袍小さ刀にて居並び、此の見得管絃にて道具留る。

一　俊寛僧都の御所望なれば、

二　成親卿への御饗應に、

三　舞の手振りを此の所で、

四　一指舞うて御簾内へ、

一　御上覽に、

四人　供へられよ。

［扇蝶　不束なる扇の手振りお笑ひ草にはござりますれど、御所望ゆゑに是非もなう、御覽に入れるでござりませう。

一　いざ〳〵一指、

四人　お舞ひなされい。

扇蝶　はッ、（ト是れより下座の唄になり、扇蝶今様の振りよろしくあつて納まる、）

四人　やんや〳〵。

扇蝶　これにて御免下さりませ。（ト下手へ下り辭儀をする、此の時正面の御簾屏風の内にて、）

成親　舞の手振り感服いたす。

一　あの、お聲は、

四人　成親卿。

俊寛　今一指、所望いたさん。

扇蝶　すりや、今一指御所望とな。

成親　最早隔てに及ぶまじ、

康頼　仰せに任せ、

行綱　それ、お屏風を取りのけい。

稚兒二人　はッ。

ト是れより叉管絃になり、稚兒兩人屏風の蔭より出で、伴の御簾屏風を取りのけろ、中央に俊寛好みの

こしらへ、上手に成親老けたるこしらへにて中啓を持ちて住ひ、下手に西光坊主憂好みのこしらへ、此の次に行綱烏帽子素袍小さ刀にて住ひ、この見得右の鳴物にて納まる、是れにて平舞臺の皆々はッと平伏なし、

一　成親卿の御座近く、

二　席を進むる我々は、

三　憚り多き身の面目、

四　恐れ入りまして、

四人　ござりまする。

俊寛　今日の集會は位官を論ぜず味方の合體、猶も盟約固むる爲め、神酒を是れにて回らさん、誰そある瓶子土器持て。

ト奥にてはッと答へて下げ髪の侍女二人、白木の三方へあつらへの瓶子土器を載せ干肴を取添へ持つて出で、上手成親の前へ直す。

成親　然らば成親拜領いたせば、俊寛殿より順盃に、

俊寛　如何にも左樣仕らん。

西光　御神酒頂戴のその間、

行綱　白拍子には今一指、

一　いざ〳〵舞を、

皆々　始められよ。

扇蝶　心得ましてござりまする。

ト是れより又下座の唄になり、扇蝶舞にかゝる、此の内成親より始めて皆々へ順に土器を廻し、侍女二人瓶子にて酌をすること、トゝ平舞臺下手諸士の四の所にて土器を呑み納め、舞はこれと一ばいに切れて、扇蝶はッと平伏する。

俊寛　おゝ太儀であつた、次ぎへ立て〳〵。

扇蝶　ハアゝ。（ト扇蝶先きに腰元兩人附いて二重へ上り奥へ入る、是れと一緒に稚兒兩人も奥へ入る。）

一　はッ、御神酒のお流れ有難し〳〵。

二　一同頂戴、

四人　いたしてござりまする。

成親　他聞を憚り餘の者は遠ざけたれば、申し談ずる一儀あり。

俊寛　おの〳〵これへ進まれよ。

四人　はッ、

ト是れより音樂になり、正面の襖を引抜き岩山を見たる奥庭の遠見、皆々四邊へ思入あつて、諸士四人は二重へ上り、上下の縁先きへよろしく居並ぶ。

成親　それ、僧都より發言めされ。

俊寛　はッ。

一　してお談じの、

四人　その一儀は、（ト是れより合方になり、）

俊寛　密事と申すは餘の儀にあらず、各方も知らるゝ如く保元平治の亂れより我が日の本も穩かならず下萬民はいふも更なり、上御一人の君といへども悪逆無道の淨海に普天の下をば狹められ、今この儘に捨ておかば武家に政務の權を奪はれ、月卿雲客遠からず廢さるゝこと目のあたり、故に此度成親卿を大總督と相頼み、斯くいふ俊寛西光どの行綱どのを同志に語らひ一大革の儀を令し平家を追討なさんと欲す、なれども世に連れ時に隨ひ威勢盛んの清盛に詔ふ所存の輩は、徒黨を漏れて隨意たるべし、一味合體めされんと御決定ある方々には誓ひの神文御覽に入れ、是れに

て血判受け取らん、密事と申すは斯くの次第。さ、御返答が承はりたい。

一　はゝッ、仰せの如く清盛淨海、惡逆無道增長なし、

二　主上をはじめ堂上方を、蔑ろにする我がまゝ、無禮、

三　我々共も豫てより憎しと思ふ平相國、

四　望む所の御企て、いかで違變がござらうや。

一　これにて血判、

四人　いたすでござらう。

西光　それにて先づは西光も、安堵いたすと申すもの。（ト成親懷より連判の一卷を出し、）

成親　然らばこれなる神文へ、（ト俊寛受取り、）

俊寛　何れも姓名お記しあつて、誓ひの血判いたされよ。

一　委細承知、

四人　仕つる。

ト合方きつぱりとなり、俊寛件の一卷を開く、此の内西光有合ふ文臺へ蒔繪の硯箱を載せて持ち出で、よき所へ控へる、皆々連判の姓名を讀むことあつて、

一　こりやこれ成經卿、

四人　康賴殿も。

俊寛　豫て同意の兩卿なれど、今日主上の御用にて院の御所へ參内いたせば、此の會合に漏れてござる。

西光　神文御承知ある上は、御姓名を記し申さん。

一　何卒御記入、

四人　下されい。（ト件の連判狀を西光に渡す、西光文臺の上にて皆々の姓名を記し居る。）

一　成親卿が今般の大總督を司られ、

二　俊寛僧都が後見の、副總督を勤められ、

三　西光殿が懸引の大元帥をめさるれば、

四　成經卿と康賴殿は、右と左りに立別れ、

一　軍務のほども大丈夫、

二　龍に翼を得たるも同然、

三　必定勝利に疑ひなし。

四　いで〳〵血判仕つらん。（ト此の内西光姓名を記してしまひ、）

西光　然らばこれへ血判めされ。

一　委細承知、

四人　仕つる。

ト四人件の連判狀へ血判をすることよろしく、此の内行綱は默然として差俯き居るゆゑ、俊寛これへ目を附け思入あつて、

俊寛　行綱殿、如何めされた。（トきつと言ふ、是れにて行綱びつくりして、氣を替へ、）

行綱　折悪しく腹痛にて、甚だ難儀仕つる、暫時御用捨下され。（ト立たうとする。）

西光　あいや暫く行綱殿、御休息がめされたくば、此の連判狀へ血判めされい。

行綱　はッ、（トもぢ〳〵して居るゆゑ、）

西光　何ゆゑ御猶豫めさるゝな。

行綱　さ、其の儀は、

西光　御同意の儀は御不承知か。

行綱　あいや、全くもつて、

一　御不承知なら、

四人　此の場にて、（トきつとなるを留めて、）

成親　あいや各先づ待たれよ、疾より同意の行綱殿、違變あるべき筈はなし。

俊寛　よしなきものを、

行綱　や、

俊寛　あいや、よしなき病のお惱みながら、誓ひの血判いたされよ。

ト是れにて行綱是非なき思入にて、

行綱　委細承知仕つる。

ト件の一卷へ血判する、此の時に轡の音して下手の門の扉を押明け、以前の○口◎逃げて出る、此の機に下手にある三方を過つて打返し、仕掛にて素燒の瓶子の口がとれる、皆々この體を見てびつくり思入、俊寛は一卷を手早く卷いて懐中なし、

一　成親卿の御座近く、

二　地下人共が是れへ立入り、

三　尾籠の振舞、

四　控へ居らう。（ト西光行綱思入。）

西光　やゝ、神酒の瓶子を打返し、

行綱　口を缺きしは不吉の第一。

一　こりや、此の分では、

四人　濟まぬわえ。（トきつと言ふ、此の時下手門の内にて、）

梅丸　その科人、只今それへ。（ト以前の△を引立て來り下手に平伏なす、成親梅丸を見て、）

成親　汝は舍人梅丸ならずや、して左源太が科人なるとは。

梅丸　はッ、お供待の其の間に、君の乘馬を引出し左源太どのが乘りしゆゑ、忽ち乘馬が暴れ出し、落馬いたして御乘馬は、お庭の内へ駈入りまして留める者を踏み散し思ひ掛けなき不調法、舍人の越度になりますれば乘馬は櫻へ繫ぎ留め、左源太どのを申譯に召連れましてござりまする。

△　いやもう生中馬術の心得が少しあるのを鼻に掛け、一鞍攻めて見ようと思ひ却つて馬にせめられまして、とんだ龜相をいたしました、脊骨と共にこの左源太、まことに痛み入りまする。

一　やあ地下人の身で成親卿の、

二　御乘馬を穢すなどゝは、

二　身の程知らぬ憎い奴、

三　きつと折檻、

四人　いたしてくれん。（ト立ちかゝるを、）

俊寛　あいや各お待ち下され。

一　何ゆゑお留め、

四人　なさるゝな。

俊寛　君の御乘馬穢せしは如何にも下人が不屈きながら、是れ過ちの功名にて只今瓶子の割れたるは、味方に取つてよき幸先き。

成親　なに、幸先きが、

皆々　よろしいとは。（ト合方きつぱりとなり、）

俊寛　されば、瓶子の濁りを轉じ音をかへて讀む時は、取りも直さず則ち平氏、晝夜婬酒に耽りたる夫の淨海が腹中こそ酒の器に異ならず、白木に比する白綾を着せし侍女にかしづかれ、娯樂を極むる三方の固めも薄きのり放れ、破れ易きを押し量り、今下人等が門外へ亂れ入りしを手かゞみに不意に迫つてあの如くへいじの首を打ち取りしは、是れぞ入道淨海を押倒したる味方の幸先き、

何と左樣ぢやござらぬか。

皆々　むゝ、（ト思入、俊寛成親に向ひ、）

俊寛　はゝッ、何卒彼等の不調法手柄に愛でゝ御許容あるやう、只管願ひ奉つる。

トこれにて成親悦ばしき思入にて、

成親　何さまこれはよき吉瑞、然らば疎忽は許しくれう、以後を慎しみ供待ちいたせ。

△　はッ、有難き其のお許し、是れと申すも俊寛樣がお執成しをして下されしゆゑ、

○　惡い事でも善いやうに祝ひ直して御主人樣の、御立腹をお留めありしは、

□　成程大そうな御器量人だと、噂に聞いたが違ひなし、

◯　當意卽妙頓智頓才、誠に恐れ入りました。

梅丸　これで舍人の梅丸も、大安心をいたしました。

俊寛　餘事を申さず供待ちいたせ。

五人　はあゝ。（ト供廻り皆々下手の内へ入る、）

西光　只今下人の疎忽にて神酒の瓶子を打ち割りしは、不吉と存じ心痛なせしが、

一　俊寛僧都の御判斷にて、

二　轉じ替へたる味方の吉瑞、

三　この上ともに軍慮の懸引、

四　お指圖願ひ奉つる。

俊寛　さしてもなき儀を其のやうに、仰せられては面目ござらぬ。

成親　麿は是れより院の御所へ、服改めて參内なし、味方の吉瑞逐一に奏聞遂げん。

俊寛　まつた味方へ各方御加入ありし此の連判、御披露願ひ奉つる。（ト件の一卷を成親に渡す、）

成親　その議も成親承知せり。

西光　左樣ござらば我々も、

一　成親卿と、

四人　御一緒に、

西光　然らば左樣、

五人　いたすでござらう。（ト成親行綱の樣子を見てこなしあつて、）

成親　我が身なほ我が思ふにも叶はぬに、人の心を任すべきやは。

ト言ひ捨てゝ立ち上る、俊寛この歌を聞き思入あつて、

俊寛　計り難きは、（ト行綱へこなしあつて氣を替へ）いや、又も軍議を仕つらん。

成親　何分よしなに賴むは僧都、

俊寛　左樣ござらば成親殿、

皆々　先づ〳〵、

ト唄になり、成親先きに西光附いて奥へ入る。跡諸士一人々々俊寛行綱へ辭儀をして奥へ入る。跡に俊寛行綱殘り、行綱は態と腹痛のこなしにて、

行綱　先刻も申す如く、折惡しく腹痛いたせば、是れにて御免下されい。（ト立たうとするを）

俊寛　あいや行綱殿、暫くお待ち下されい。

行綱　でも腹痛にて惱みますれば、

俊寛　はて御腹痛にござるなら、俊寛所持の積心丹只今取り寄せ差上げん、先づ〳〵暫くお待ちなされい。

ト是れにて行綱是非なきこなしにて、

行綱　して又手前に何ぞ御用が、

俊寛　お留め申すは別儀にあらず、今般企つこの大望成就いたすと思はるゝや、又は隱謀露顯なし事成らざると思はるゝや、御身の胸中密々に心得の爲め承はりたい。

ト きつと言ふ、是れにて行綱薄氣味わるき思入にて、

行綱　これは〳〵改めて手前を是れへ引留められ、何事のお尋ねかと思ひの外なる其の仰せ、そりやはや天理に背きましたる叛逆謀叛のお企てなら、成就いたさず、裏切りあつて露顯に及ぶ儀もあらんが、惡逆無道の清盛を誅罰のため御旗揚げ、殊更もつてそこ元が副總督を勤められ、軍議を令しめさるれば、成就いたさぬことあらんや、手前にそれをお尋ねあるは、俊寛僧都のお詞ともに近頃以て覺えませぬ。

俊寛　すりや、あの、いよ〳〵其許には此の大望が成就いたすと、お見込みあつての御同意かな。

行綱　御念に及ばぬ、何ゆゑに疑惑ござつて多田の藏人、このお味方をいたさうや。

俊寛　然らば問はんが何ゆゑに、御腹痛と仰せられ、今血判の際に臨み、かれこれ御猶豫めされしぞ。

行綱　やあ、（トぎつくり思入。）

俊寛　何と、御疑心がござらうがな、（トきつと言ふ、是れにて行綱ぢつと思入、誂への合方になり、）天眼通は得ざれども人の觀相喜怒哀樂一目に悟るこの俊寛、それとは知れど大事の前一人たりともお味方の欲しき時節に一將を失ふことの口惜しく、西光はじめ同意の面々斬つて捨てんと迫りしを

成親卿が左にあらずとお留めありしを幸ひに期を延ばせしは、御身の胸中後にて篤と承はりたく、御腹痛といはるゝをまげて引留め申してござる、尤惡逆無道といへども武門に榮ゆる清盛を、不意に迫つて誅戮なすは容易ならざることゆゑに、必定勝利と目的の附きし譯にもござらねば、萬一武運拙くして事成らざれば潔よく討死いたす覺悟の俊寛、所詮成就は覺束なしと御身に疑心ござるなら御腹藏なく仰せられい、さすれば味方へ内分にて誓紙の血判お戻し申し後日の無事を計らはん、如何でござる行綱殿、詞を飾らず此の場にて底意をお明かし下されい。

ト思入にて言ふ、行綱驚きしこなしあつて態と氣を替へ、

行綱　はゝッ驚き入つたる御賢察、實は先刻手前に於ても危ぶむ心がござつたゆゑ血判の儀を猶豫なせしが、成親卿も仁者といひ僧都が賢き御軍慮に又も心を取直し、血判いたす上からは如何で二心のござらうや、然し手前が虚病を構へ此の場を脱れ平家方へ内通にてもいたすかと御疑念がござるなら、これにて一命お斷ち下され、味方となりて戦場に討死なすも今此の場で、副總督たる僧都殿に討たれて死すも同じ一命、いざ速かにお討ち下され。

ト態と覺悟の思入よろしく、俊寛もこなしあつて、

俊寛　すりや眞以て、其許には、あの御疑念はござらぬとな。

行綱　北面ながら手前も武士、血判なして違變せんや。

俊寛　むゝ、それにて俊寛安堵いたした。

行綱　然らば手前を、此のまゝに、

俊寛　はて、御心底を見る上は、如何で味方を失ひ申さん。

行綱　左樣ござらば俊寛僧都、

俊寛　多田の藏人行綱殿、

行綱　これにてお暇申すでござらう。

ト唄になり行綱腹痛の思入にて花道へかゝり、よき所まで行き跡を振返りちよつと思入あつて足早に花道へ入る。俊寛これを見送りゝ、とこなし、是れより誂への合方になり、二重より下りて舞臺前へ出で花道の方を見て案じるこなしあつて、

俊寛　多田の藏人行綱が不平の樣子悟りしゆゑ、歸宅を留め底意を探り、若し變心の兆しあらば討つて捨てんと思ひしも、實を明し罪を詫び一命まで差出せしは改心なせしと思ひしゆゑ、其の儘歸しやつたるが、此の山莊を出ると其のまゝ腹痛の樣子もなく、虎口を脱れし狐の如く身顫ひなして逃げ行きしは、正しく二心の彼れが胸中、こりやあの儘に行綱を歸しやるではなかりしが、はて

残念な事をいたした。

（トぢつと思入、爰へ二重の上手より成經好みのこしらへにて、續いて康頼出來り、

成經　僧都には、是れに居られしか。

康頼　今日の會議に出座いたす筈なれど、

成經　父卿の命に依り、康頼を引率し、他事にて遲刻いたせし段、

康頼　平に御用捨、

兩人　たまはるべし。（ト是れにて俊寛氣を替へ）

俊寛　御兩卿にはよくぞ御入來、先づ〳〵あれへお出で下され。

（ト此の内兩人下手に落散りある瓶子のかけを拾ひ、

成經　こりやこれ神酒の瓶子なるが、

康頼　如何いたして損じましたな。

俊寛　瓶子の割れしを平氏になぞらへ、味方の勇氣は繕ひしが、それぞ大望露顯の小口、

成經　なに、大望が、

康頼　露顯とは、（ト大きく言ふを冠せて）

俊寛　あこれ、最早味方が、（ト件の瓶子を取って捨てるを木の頭）割れてござる。

（ト歎息の思入にて三人引つばりの見得、此の模様山おろし音樂にて、

ひやうし幕

二幕目

西八條館の場

重盛諫言の場

（役名――小松内府重盛、平相國清盛入道淨海、右大將宗盛、新大納言成親卿、多田藏人行綱、難波次郎經遠、主馬左衞門盛國、妹尾太郎兼康、藤原師光入道西光、藤太、軍次、貫友、盛次、貞國、重能、雜掌、郎黨。重盛御臺千代の方、盛國妻柵、侍女、小姓、其他。）

（清盛別館の場）――本舞臺一面の平舞臺上の方に檜皮葺家根附の門、彫物書割の扉、網代塀にて見切り、正面奥庭泉水築山石燈籠御茶屋、杜若皐月など盛りの書割り、下手同じく網代塀にて見切り舞臺中央へ一間に九尺位の腰掛け網代の蹴込み、奥の方へ高欄を附け是れへ毛氈を掛け、下の方に同じ腰掛けを並べ、舞臺前流れの浪板に杜若をあしらひ、下手に楓の立木、總て西八條清盛別館の模様。爰に貞國、景友袴股立足輕裝にて竹箒水打手桶を持ち立掛り居る、此の見得白囃子にて幕明く、

貞國　いやなに景友どの、先達より清盛公には攝州福原の御所に御逗留ましませしが、鹿ヶ谷にて會合せし謀叛の族を糺明なさんと、この西八條のお館へ夜前俄かに君の御歸館、

景友　それと申すも成親卿の謀叛へ與なす多田の藏人、未前を察し黨を漏れ、君へ注進いたせしゆゑ、則ち今日徒黨なる西光法師を搦め捕り、一味の族を悉く白狀させて斬首なさんと、

貞國　頻りに謀計を回らせしが、名に負ふ一味の棟梁たる成親卿は、我が君の正しく嫡男小松の内府重盛公の御臺たる千代の方の御舍兄なれば、緣に繋がる新大納言、

景友　まつた荷擔の其の内にも軍事に敏き俊寛が一味の指揮をいたすといひ、西光法師を始めとして成經、康賴その外に勇士が頗る多人數にて一味合體いたすよし、

貞國　さすれば今日の御詮議は、

景友　容易ならざる、

兩人　事件でござる。（ト時計の音合方調べになり、重能上手門の内より出來り、）

重能　御兩所には、今日ッた久々にて我君が此のお館へお入りゆゑ、お詰番の今日のお役目、御苦勞至極に存じまする。

貞國　これは〳〵重能どのにも、今日のお役目近頃御苦勞千萬、

景友　最早お入りの時刻なれば、經遠どのへ申し上げん。

重能　その儀は御兩所、お賴み申す。

兩人　委細承知いたしてござる。（ト調べにて四人下手へ入る、花道揚幕の内にて、）

呼ビ　我が君の御入り、

重能　最早我が君御入りなるか。（ト門の内にて、）

經遠　御入りとあらば難波の次郎、お出迎ひいたすであらう。

ト管絃になり、門の内より經遠素袍大小にて出來る。

重能　これは〳〵難波氏には、御苦勞千萬、

經遠　我が君この程御保養に攝州福原のお下館に御逗留あられしところ、政務によつて俄の御歸館、承はれば重盛公の御簾中たる千代の方樣御同道にて御入りのよし。

重能　既に先刻お表よりお先觸れがありしゆゑ、拙者もこれへお出迎ひに罷り出ましてござりまする。

經遠　貴殿もお役目御苦勞でござる。

重能　左樣ござらば難波氏、

經遠　いざ、お出迎ひ、

兩人　仕らん。（ト又花道の揚幕にて、）

呼ビ　御入り。

ト音樂の入りし出の唄になり、花道より清盛白綾の着附差貫金紋紗の道服小さ刀のこしらへ、誂への庭下駄、これへ半素袍の雜掌、朱の端折傘をさし掛け、小姓二人、一人は清盛の太刀を持ち一人は脇息を持ち、次へ千代の方花櫛下げ髪、續いて○△□◎何れも腰元裝にて香爐臺、鼻紙臺、褥などを持ち、千人禿四人清盛の刀掛け煙草盆褥などを持ち出來り、花道へ留り、

清盛　一天の安危言下に依り、萬機の治亂も淨海が掌の内にありて、攝家華族も門前に牛車を列ぬる平氏の功、

千代　草木心なしとはいへど、父上さまのお歸りを待ち設けたる庭もせに、今を盛りの菖蒲草、

柵　由縁の色の紫に躑躅皐月の朱を奪ひ、一際目立つ花の色、

○　春は過ぎてもまだ空は、

△　殘る霞のうらゝかに、

□　笑ひし山も青々と、

◎　秋を待たるゝ若紅葉、

○　又築山より泉水へ、

△　落ち來る瀧の水清く、

□　流れに群れる鯉鮒や、

◎　龜のこどもの私共まで、

四人　今日のお供は、

禿四人　身の冥加、

經遠　我が君御入りに計らずも、小松公の御簾中千代の方樣俄の御入り、則ち難波次郎經遠、

重能　民部太郎重能、これまでお出迎ひ、

兩人　仕ッてござりまする。（ト辭儀をする。）

清盛　難波、民部、出迎ひ太儀。

兩人　はッ、

經遠　何はしかれ、我が君には、是れにしつらふ、

兩人　設けのお席へ。

清盛　然らば、そちも。

千代　お供いたすでござりまする。

柵　左樣なれば我が君さま。

清盛　皆もともぐ、、

柵　先づお越し、

皆々　遊ばしませう。

ト右の鳴物にて皆々舞臺へ來り、腰元床几へ褥を敷く、清盛千代の方腰を掛け、上下へ毛氈を敷きこれへ皆々よろしく居並び、傘持は下手へ入る。

經遠　我が君には福原より、昨夜俄に御歸館ありしが、

重能　御機嫌よろしき體を拜し、恐悦至極に、

兩人　存じ奉つりまする。

清盛　追々年は重ぬれど、以前に替らず健かなるぞ。（ト誂への合方になり清盛思入あつて、）それはともあれ、小松より千代が入來は思ひも寄らず、そちが心で參りしか、但しは伜重盛が、申し附にて參りしか。

千代　全く今日參りましたは夫の差圖ではござりませぬが、常々から重盛には父上さまへ孝行ゆゑ、過ぎし頃より福原へ御逗留あらせられまするを、都と違ひ福原は海邊に近く波風あらく、御身の障りに成りもやせんと、小松の館で父上樣の御身の上を日毎に御案じ、そこへ昨夜のお歸りは若し御不例ではあるまいかと仰せありしを承はり、私とても心ならず御案じ申し上げますゆゑ、

柵　重盛公へはお忍びにて、祇園の社へ御參詣と申し上げてこつそりと、此の柵がお供を申し、お館へゐらせられましたは、

千代　父上さまの御機嫌を、如何と御案じ申しますゆゑ、先觸れもなう押し附けに、

兩人　上りましてござりまする。

清盛　伜ながら重盛は、日頃經書に眼をさらし、些と固過ぎる仁者ゆゑ、孝行もまた格別、それに連添ふ程あつて案じてくれるそちが心底、清盛嬉しく思ふぞよ。

千代　ても有難いそのお詞、此の身ばかりか柵まで、

柵　お供に參りし甲斐あつて、お悦ばしう、

兩人　存じまする。

清盛　案じてくれるは忝ないが、最早耳順を過ぐれどもいつかなめげぬ此の清盛、今二三十年も生き延びて榮耀榮華を盡さねば、これまで千辛萬苦せしその入埋が附かぬわえ、はゝゝゝ。（ト笑ふ。）

重能　日頃烈しきお心に、御壯健は實以て、我々共の及ばぬほど、

經遠　勇氣滿々とましませばこそ、福原御所へお抱へのまだうち若き白拍子を、お寐間の花の御寵愛、腰元衆にもお手が附くとか、辨天さまでも信心さつしやい。

○　これはしたり難波さま、あなたは何をおつしやります。

△　御常談も時によります、四邊を御覽、

四人　遊ばしませいなあ。

柵　腰元衆のいはるゝ通り、是れにお出でなされますする千代の方樣と清盛樣は、嫁舅君のお間柄、そこらの御遠慮なさらずに、差合ひのある戯口は、以後はお嗜みなされませ。

經遠　是れは思はぬ不調法、お連合の盛國殿へは必ず共に御内分、御沙汰なしにお賴み申す。

柵　決して申しはいたしませぬ。

經遠　千代の方樣にも疎忽の一言、眞平御免下さりませ。（ト辭儀をする。）

千代　その挨拶には及ばぬわいの。

禿一　やあ、鬼にも負けぬ難波さまが、

禿二　女子に負けたは、

四人　をかしいわいの。（ト手を打つて笑ふ。）

清盛　えゝ、靜かにせぬか騷がしい。

千代　（思入あつて、）いや申し父上樣、騷がしいと申しますれば最前これへ參る道々、着込腹卷いたしました、家臣の者を見掛けましたが、何事でござりませうなあ。

清盛　むゝ、着込腹卷いたせしは、おゝそれ、此頃山法師共が例の御輿を振立て院の御所へ强訴せしゆゑ、其の亂暴を防がん爲め、非常の手當に固めの武士、何も案じるやうなことでもないわい。

柵　左樣なれば非常を守る固めの衆でござりますか、それ承はつて私も安堵いたしてございます。

千代　とは言へ、市中も物騷がしく、殊には祇園の御社へ參詣なすと申せし上は、事ないうちに少しも早う、お暇いたしませうわいなあ。

柵　それが宜しうございまする。

清盛　いや此の清盛が無事を計らんと、心に掛けて參りし嫁女、この儘歸すは餘り本意なし、未だ時刻も早ければ休息いたして歸るがよい。

千代　有難う存じまする。

清盛　こりや重能、膳番の者へ申し附け、欵待の用意いたせ。
重能　畏まつてござります。
清盛　又女子共は何なりと、これが心に叶ふやう、申し合せて慰めよ。
○　畏まりましてはござりまするが、白拍子と事替り、
△　舞今様の一指も、心得ませぬ不器用もの、
重能　その不束が却つて一興、君の仰せ辭退いたさず、
○　左様なれば不束ながら、
△　笛や鼓の間拍子の、
□　揃はぬ勝ちの調べにて、
○　お慰め、
四人　申し上げませうわいなあ。
柵　少も早う御歸舘と、存じますれど斯程まで、厚い仰せを蒙むる上は、
千代　仰せに任せ霎時のうち、
清盛　ゆるりと休息いたすがよい。

千代　左樣なれば父上樣、
清盛　後に逢ふぞよ。
經遠　いざ、御臺樣には奥殿へ、
千代　皆も一緒に、
柵　先づお入り、
皆々　あられませう。

ト長き唄になり、千代の方先きに柵腰元四人小役四人後より重能附いて上手門の内へ入る、跡清盛經遠殘り、四邊へ思入あつて、

經遠　幸ひ他聞の憚りなければ君へ伺ひ奉つるは、昨夜多田の藏人が、一大事を我が君へ直々申し上げ度しと當舘へ參りし所、福原御所にましますと承はつて馬に鞭打ち、驀地に參りましたが、如何なる大事を言上なせしか、委しき事を恐れながら、仰せ聞けられ下さりませう。
清盛　汝には未だその事を具に申し聞けざりしが、昨日行綱福原へ早馬にて馳せ參り、窃に我へ訴へしは、此の度院の御所に於て卿家武家の隔てなく有志の輩集めらるゝを御存じあるやと申すゆゑ、むゝ、それぞ定めて先達て亂爭せし山法師等を、討攻めん爲めの謀議ならんと申せしに、いやい

や左様の事にあらず、平氏を討たんと徒黨を結ぶと彼れが訴へ。

經遠　謀叛の企てあることは、先刻仄かに承はりしが、して又謀叛の棟梁は。

清盛　院の御所の執事職、新大納言成親なるわ。

經遠　すりや、只今奥においでなされまする、重盛公の御簾中たる、

清盛　千代の方は直の妹、又成親が娘をば重盛の倅惟盛の妻に娶りし上からは、我が平氏とは重なる縁脱れぬ中でありながら、法勝寺の執行俊寛、僧都が鹿ケ谷の山莊へ酒宴と號して會合なし、平氏を滅ぼす彼等が密談、多田行綱は源氏の武士ゆゑ其の大將に頼むといふを、體よく其の場を言ひなして我れへ具に注進なしたり、まつた萬事の指揮は成親と院の御所にて威を揮ふ西光法師と聞きたるゆゑ、彼れを召捕り詮議なさんと、瀬尾へ言附け置きたれば、押附け召捕り參るであらう。

經遠　いや、左程の大事を我が君の御心一つに納められ、自若とまします御思慮の程、經遠恐れ入つてござる。（トばた〳〵になり、下手より素袍大小の侍出來り、）

侍　はッ、申し上げまする。

經遠　何事なるぞ。

侍　嚴命蒙る瀬尾の太郎、西光法師を生捕りしと、先走りの注進が只今參つてござりまする。

清盛　むゝ、如何と思ひし西光を、召捕りしは重疊々々。

經遠　引連れ參るに程もあるまじ、先づ我が君にはお表へ。

清盛　引連れ來らば清盛が、直き〳〵詮議いたしてくれう。

經遠　然らば我が君、

清盛　經遠參れ。

（トこれ經遠ほまるト管絃になり清盛先きに經遠上手門の内へ入り、注進の侍は下手へ入る、少しおいて門の内より以前の柵出來り、四邊へ思入あつて、）

柵　最前是れへ參りし折、鎧腹卷籠手脛當凛々しき出立をなせし者が、此處や彼處に寄り集ひ、心得難く思ひしが、窃に樣子を立聞けば鹿ケ谷の山莊へ平家を討たんと會合せし謀叛の輩を討取る手配り、ても怖しいことぢやなあ、（ト四邊へこなしあつて、）その企ての棟梁は、御臺樣の御兄君たる成親さまとあるからは、こりや斯うしては居られぬところ、お庭傳ひにお奥へ行き、御臺さまへ此の由をお知らせ申さん、さうぢや〳〵。（ト上手へ行きに掛る、爰へ以前の重能出で、）

重能　柵どの、暫くお待ちなされい。

柵　あなたは民部重能さま、してわたくしへ御用とは。

重能　さあ其の御用事は、（ト四邊へ思入あつて、）斯樣でござる。（ト柵へ寄る、）

柵　えゝ、夫ある身を、（ト振り拂つて突きのけるを道具替りの知らせ）慮外者めが。

ト　さやと思入、重能起上つて怖しい力だと呆れるこなし、此の模樣早舞にて道具廻る。

（評定所の場）――本舞臺四間通し高二重、本緣附欄間釘隱し附、正面襖欄間共金地蝶の紋散し中央に白洲階子、上下の徒塗骨障子、上の方白木の冠木門穆の入りし扉明け立てあり、この脇網代塀下の方後へ下げて同じく網代塀、塀垣、總て西八條評定所の體。二重中央に清盛錦の直綴、指貫小さ刀にて褥の上に住ひ、後に茶筅袴裝の小姓二人、清盛の太刀を持ちて控へ、平舞臺上手に經遠半素袍附太刀にて床几に掛り、下手に景友、貞國、半素袍大小にて控へ居る、此の見得時の太鼓にて道具留る。（ト床の淨瑠璃になり、）

源家亡びて日に增しに威勢盛んの平家方、我意に募りし清盛が叛逆詮議の西八條、廣緣近く座を占めて、

清盛　（四邊へ思入あつて、）先刻瀨尾の太郎より、叛逆人西光法師召捕つたりと注進ありしが、未だこれへ召連れざるか。

景友　只今瀨尾が從者の兵士、これへ引連れ參りしと、

貞國　注進なしてござりまする。

清盛　すりや兼康には西光を、これへ引連れ參りしとか。

經遠　君の仰せを蒙りて、某瀨尾と諸共に彼れが詮議をなしませうや、但し是れへ引き出しませうや、此の儀は如何計らひませう。

清盛　平家を討たんと一味を語らひ、謀叛を企つ憎き西光、予が面前で紕明なさん、この庭先きへ召連れよと、瀨尾の太郎へ申し次ぎやれ。

景友　はツ。（ト揚幕へ向ひ、）それに控へし瀨尾どの、君の御詞に候へば、囚人西光引連れめされ。

兼康　畏まつてござりまする。

はつと答へて引立つる西光法師は高手小手、見るもいぶせき荒縄の身の縛めも屈せずに、清盛目掛け進み寄る。

ト是れへ時の太鼓を冠せ、花道より前幕の西光、緞子無地桃着附錦の前帶金剛草履、縄に掛り、軍兵二人縄を取り、跡より兼康着込鎧下膝甲、籠手、鬚當、馬手差、附太刀にて鐵扇を持ち、續いて軍兵二人槍を横へて附添ひ出來り、西光花道にて清盛を見て、きつと思入あつて舞臺へ來る、

それ、引き据ゑい。

軍兵　下に居らう。

〰縄を手繰つて引き据ゆれば瀬尾は御前へ手をつかへ、

ト軍兵引きする。る、西光清盛を見返り思入あつて下に居る、兼康手をつかへ、

兼康　今朝未明捕手の者に下知を傳へて西光が、宿所の四方を取巻けば、密謀露顯を悟りしや何れへ逃げしか居らざるゆゑ、隱れ所を探索なし搦め捕らんと込入りしに、組子を投げ退け斬りかけて松浦太郎へ深手を負はせ、必死を極めし働きに、手に餘りしを某が手段を以て捕縛なし、召連れましてござりまする。

〰手柄顔して訴ふれば、

清盛　今に始めぬ汝が手柄、よくも捕縛なしたるぞ。

經遠　かねて噂に聞き及ぶ劍道勝れし西光入道、取り逃しなば平家の恥辱、

景友　まことに以て貴殿のお手柄、

貞國　お羨ましい、

兩人　ことでござる。

兼康　西光如きを捕縛せしとて、左様にお褒め下すつては、近頃恐縮仕つる。

清盛　いや〳〵憎き西光を、即刻搦め捕りたるは、汝が手柄。

〰言ひつゝ清盛縁先きへ立出でたまひ、きつと睨めつけ、

ト誂への合方になり清盛前へ出て、

ヤオレ西光、其の方は薙髪なし法師といはるゝ身でありながら、日頃朝恩に誇るゆゑ、おのれが類族加賀守師高、師經が亂暴を咎めず、却つて彼等が腰を押し何過りなき天臺座主明雲僧正を讒奏し終に流罪となし奉つり、それのみならず此の程より鹿ヶ谷の山莊へ會合なして味方を語らひ我が平氏を亡ぼさんず謀叛を企つ憎き奴、成親始め俊寛等が何やう智謀を廻らすとも、時めく平氏に及ばんや、今眼前法體にて縄目の恥辱を受くるも、これ山王の冥罰なるぞ、返す〴〵も下郎の身で、分に過ぎたる日頃の所行、言はうやうなき大罪人めが。

〰兩眼見開き清盛が、大音聲にて罵れど、元より不敵の西光入道事とも恐れず睨め返し、

ト清盛きつと言ふ、西光せゝら笑ひ清盛を見返りて、

西光　鹿ヶ谷の山莊へ會合なして平氏を討つ企てなせしなんぞとは、元より覺えあらざれど疑ひ受けしは我が不運、縄目の恥辱を受くるのも是非なき事とあきらめれど、此の西光を下郎と罵り分に過ぎしと言はるゝは、この儘に聞き捨て難し、

清盛　おゝ、まつたくもつて其の方が分に過ぎたる所行ゆゑ、分に過ぎると申せしがそれを聞き捨て難しとは、

經遠　近頃以て片腹痛し、

兼康　仔細があらば、

皆々　疾く〳〵いやれ。

〳〵疾く〳〵言やれと詰め寄れば、西光莞爾と打ち笑ひ、（ト合方になり西光思入あつて、）

西光　望みとあらば申し聞かさん、凡そ天下に侍たる者、忠勤によつて立身なし、檢非違使に至らんこと此の西光ばかりでなく、誰が身にもあることなり、斯く宣ふ和入道は王孫なりと名乗りたまへど、昔の事は見ねば知らず、近き御身の父忠盛は殿上人の交りを忌み嫌はれし人ぞかし、その嫡子にて繼母に憎まれ世に過ぎ難く中御門藤の中納言家成卿が播磨守にておはせし時、しかも受領の鞭をとり、朝夕褐の直垂に繩緒の足駄で通はれしを、京童は是れを見て高平太と笑ひしを深く耻らひ、扇にて顔を隠して骨の間より鼻を出して通はれしを、又童が先きをきり高平太どのが扇にて鼻を挾みて通るぞよと喚き囃して、後々には、鼻平太といはれしをよもや忘れはいたされまい、然るに其の後御身もまた、忠盛殿が近江の國船木の奥にて海賊二十人餘搦め捕り、其の賞に依り平太殿が四位の兵衛亮になられし時さへ早き出世と申せしに、今太政大臣と昇進せしは分に過ぎしといはざるか、おのが體に心附ず此の西光が立身せしを過分なりと咎むるは、以前を忘れし清盛殿、どちらが過分か此の場にて過分競べをいたさうか、さあ返答あらば承はらん、何とでござる入道どの。

〳〵何と〳〵と聲振立て物狂しく罵つたり、聞く清盛は怒りにたへかね、

ト此の内西光思入にてきつと言ふ、清盛無念の思入あつて、

清盛　譬にもいふ引かれ者の小唄と、聞き流せばよきこと、心得、我に向つて其の惡言返すぐも憎き奴。

〳〵緣の上にて地團太踏み、清盛庭へ飛び下りて、

ト清盛つか〳〵と平舞臺へ下り、西光を引き附け、

何うして腹を癒てくれん。

〳〵怒りの餘り西光が肩骨背骨踏躙れば、（ト清盛西光を蹴る、西光は猶清盛に詰寄り、）

西光　理を非に曲げるこなたでも、過分競べの返答は、よもや言譯ござるまい。

經遠　やあ又しても〳〵、空飛鳥も羽を縮め地上へ落つる勢ひの、君へ對して無禮の過言、

景友　身の程知らぬ西光法師、

貞國　いで我々が、斯うしてくれん。

〽鞭おッ取つて左右より續け打ちに打ちければ、西光はッたと見返りて、

ト鞭を取り左右より續け打ちに打つ、西光よろしく思入あつて、

西光　やあ、過分の主人に仕ゆるからは、汝等も過分の知行盜人、取るに足らざるうじ蟲めら。

景友　えゝ、うじ蟲とは奇怪至極、

貞國　うぬ、どうするか覺えてをれ。

〽又も手酷く打つ杖も、恐れぬ剛氣の西光法師、

西光　主が主なら家來まで道を知らざる無道な奴等、小松殿があるゆゑに今日まで平家は榮えしが、斯かる非道の行ひなさば、遠からずして清盛が滅亡なさんは目前、何とて永き榮えがあらうぞ。

〽いふに清盛怒へ兼ね、又立ち掛つて西光が面を足下に踏躙り、

ト清盛西光を蹴倒し、足下に掛けて踏みにじり腹の立つ思入にて。

清盛　並居る臣下の面前にて、最前より我れに向ひ種々雜多な雜言過言、よくも耻辱を取らしたな、どうして腹を癒てくれうぞ。

西光　おゝ、どうなりとも勝手にせい、邪非道な責に遭ひ命を捨つる此の西光、まだ〳〵此の上汝の惡行、息のある内言はずにおかうか。

清盛　えゝ、返すぐも憎き奴、その頤を引き裂きくれん。

〽憎き坊主と引起し、頤裂かんと立ち掛るを、瀬尾太郎押止め、

ト清盛西光を引起し、口へ手を掛け引き裂かんとするを兼康これを押し止め、

兼康　あいや我が君お待ちなされい、此奴が頤引裂かば謀叛の根ざしを吐かすべき詮議の蔓を失ひますれば、此の儀は御猶豫下さりませ。

清盛　むゝ、何さま汝が申す如く謀叛の根ざしを吐かす西光、頤裂くは許してくれん。

ト清盛西光を突放し、睨みつける。

兼康　とはいへしぶとき西光坊、一筋縄では吐きますまい、これより庭へ連行きて、某手酷き拷問なし謀叛の同類白狀させん。

清盛　先刻謀叛の棟梁たる新大納言成親へ、何氣なき體にもてなし、迎ひの使者を立てたれば、程なくこれへ參るは必定、それまで彼處の庭へ連行き、西光を拷問なし、謀叛の實否を吐かしめよ。

兼康　畏まつてござりまする。

西光　何やう汝等が拷問なすとも、所詮命のないからは火水の責めは愚なこと、切身に鹽の拷問でも言はじと思へばいつかな言はぬぞ。

兼康　言はぬと言つても其の儘に、瀬尾の太郎がいたし置かうか。

西光　見事われが白狀さすか。

兼康　言ふにや及ぶ。

西光　はて覺束ない、（トせゝら笑ふ。）

清盛　えゝ、憎き西光引つ立てい。

軍兵　はゝ。

清盛　どれ、火水の責めに苦しむを、見物なして腹を癒ようか。

〽立蹴にはつたと蹴倒せば、無念と見返る西光法師、

ト清盛、西光を蹴倒す、西光きつと清盛を見詰める。

馬鹿な奴めが。

西光　むゝ、（ト立掛るを、繩取り引き附け、）

軍兵　きり〳〵歩め。

〽引立てられて行く顏を、心地好げにぞ淨海は、見返り奥へ入りにける。

トこれへ時の太鼓を冠せ、西光は繩取りに引立てられ、兼康附いて上手へ入る、清盛は思入あつて皆皆附添ひ奥へ入る。

〽折柄小蔭に忍び居て、終始を聞きし柵が伴ひ申す千代の方、胸に時打つ思ひにて、

ト此の内下手網代塀の蔭より、以前の千代の方　柵　出來り、

柵　御臺さま。

千代　これ、

〽四邊を憚り見返りて、（ト誂の合方になり、）

柵　今清盛さまの仰せをば、あなたはお聞き遊ばしましたか。

千代　おゝ西光法師を召捕りて、平家を討たんと企てし謀叛の詮議をなされる内、父君樣のお詞にわらはが兄上成親樣を何けなく、爰へ招きて謀叛の詮議をなさるとやら、よもやと思へど兄上が西光法師と諸共に御荷擔ありしことならば、あらしこ共の手に掛り憂目にお逢ひなされませう、こりや何うしたらよからうぞいの。

柵　その御案じは御尤、假令お覺えないにもせよ、お疑ひの掛りしからは、手酷い御詮議なされませ

う、よしや其の折清盛さまへあなたがお詫びを遊ばしても所詮お聞き入れはござりますまい、少しも早く重盛さまのお耳に入れなば其の儘に、お置き遊ばすことではない、直にこれへおいで遊ばし、お止めなさるに違ひはない、少くも早うお館へお歸り遊ばしませいなあ。

千代　館へ歸つて我が夫へ此の由申し上げたけれど、手段に乘つて兄上が、今にも爰へおいで遊ばし、西光法師同樣に、繩目の耻を受けたまふか、測り知られぬ今日の仕儀、

〽若しやと流石女氣に案じ過してとつおいつ、跡へ心の引かるゝもお道理さまと主從が胸に轟くかしこの物音、西光法師を拷問に掛けるぶり〳〵車木の軋る間に〳〵笞の響き。

ト此の内兩人四邊を憚り思案に暮れて愁ひの思入、よき程に上手門の内にて車の軋る音するゆゑ、兩人びつくりこなし、是れより粒々と竹べいの音床の合方をあしらひ、兩人拔足にて門の際へ行き樣子を窺ひ、扉のすきより内を覗くことよろしく、

〽打たるゝ苦痛に叫ぶ聲、（ト門の内にて西光苦しむ聲にて、）

西光　えゝ、分に過ぎたる清盛の下知を受けたる無道人め、責めなば責めよ西光は、いつかな白狀いたさぬぞ。

象康　白狀せぬとて其の儘に瀨尾の太郎が置くべきか、火水の拷問受けぬうち、きり〳〵白狀いたしてしまへ。

皆々　さあ、白狀いたせ〳〵。

〽八大地獄の呵責の體、一目見るより胸迫り氣も魂も身に添はず、

ト此の内兩人門の内を覗きよろしくこなしあつて、

千代　これ柵、西光どのが苦痛にたへかね、若し白狀をする時は兄上のお身の上、こりや斯うしては居られぬわいの。

柵　聞けば聞くほど恐しい、あの拷問に遭ふときは、假令氣强き西光さまでも何とてお怺へなされませう、少しも早う内府さまへ、

千代　申し上げなば西光法師、又兄上にも事なきやう、お計らひを遊ばすとも、我が夫この儘にはお聞き捨には遊ばしますまい。

柵　とは言へ是れから餘程の道、女子の足ではついそれと、

千代　行かれぬ所もみづからが、兄上さまの御難儀をお救ひ申す女の一心、

柵　さすがは公の御臺さま、この柵も一生懸命、

千代　わらはと共に小松の館へ、

柵　少しも早う御臺さま、

千代　柵用意をしやいなう。

柵　心得ました。

〽甲斐々々しくも主從が身ごしらへする其の折柄、又もかしこに呵責の音、

ト此の内兩人二重より下り、下手へ行きかけ思入、

大勢　白狀いたせ〳〵。

千代　てもいない、あの拷問、

柵　如何に主命なればとて、

千代　思へば無慈悲な、（ト上手へ思入あるを、）

柵　はてまあお越し、（ト隔てるを木の頭）遊ばしませ。

〽心殘して出でゝ行く、

ト三重にて幕になり、道具出來次第に引返す。

（重盛諫言の場）――本舞臺四間通し高二重本緣附、正面金鍍金の金物附の高欄、正面金襖兩樓

釐骨淚子張り障子、上下後へ下げて筋塀の張物にて見切り、日覆より紅葉の釣枝、總て西八條御殿の體。管絃にて幕明く、と花道の揚幕にて、

呼ビ　成親卿御入り。

ト管絃にて奥より重能、盛次素袍大小にて出來り、

重能　先刻使者を立てられしが、はや成親卿の御入りの知せ、先づ一應は事なき體にて御出迎ひを申し上げた上、

盛次　鹿ケ谷へ會合なし謀叛の企てあつたることは、靖盛公が直々に御糺命あるとのこと。

重能　何はともあれ出迎ひ、

兩人　申さん。（ト又花道の揚幕にて、）

呼ビ　御入り。

〽おとなふ聲と諸共に、沓音高く成親卿衣冠正しく悠然と、廣庭傳ひに入りたまひ、

ト是れへ下り葉を冠せ、花道より成親卿冠裝束附太刀沓にて出來る、跡より雜掌二人侍烏帽子半素袍大小にて、仕丁一人沓臺を持ちて附き添ひ出來り、花道へ留り舞臺を見て、

成親　今日測らずも入道殿より、火急の招きに何事なるか樣子知れねば氣遣はしく、成親是れへ參つた

り。

重能　火急の使者に取敢ず、成親卿には早速これへ、御入來ありし段、

盛次　主人淨海入道にも、大慶至極にござりませう。

成親　重能盛次、出迎ひ太儀。

重能　成親卿には、

兩人　先づ〳〵是れへ、

成親　設けの席へ通るであらう。

〽やがて御身に禍の掛ることをも知りたまはず、設けの席へ座したまふ。

ト矢張り下り葉にて成親平舞臺へ來り、二重へ上り中央より少し下寄りに住ふ、仕丁は沓を臺に載せて持ち、辭儀をなし下手へ入る、重能盛次平舞臺下手へ控へる。

〽折から出來る難波次郎、物の具固め嚴しき姿を不審と打ち見遣り、

ト此の内以前の經遠先きに景友貞國何れも陣立のこしらへにて出來り、上手へ床几に掛る、成親これを見て、

成親　早速に問ふべきは、今この館へ參る途中、三四町の辻々へよろひし武者が詰めしといひ、此の門内にも嚴しき士卒が固め居る上に、難波園原兩人が甲冑着けしは心得ず、察する所此の程より都の内を騷がせし山法師等を討たんずらん、院の御所にて軍議ありしが其の儘に打ち過ぎしゆゑ、入道殿には彼等を討たんと、かゝる用意をめされしか。

〽言はせも果てず兩人が、

經遠　いや我々六具に身を固むるは、山法師等を討つにあらず、さいふ貴卿に御不審あつて、機變に備ふる此の出立ち。

成親　や。

景友　主人清盛直々に、

貞國　貴卿を糺明めさるゝと、

兩人　承はつてござりまする。

成親　これは思ひも寄らぬこと、何ゆゑあつて淨海殿には、此の成親を糺明せんとや。

〽折しも一間に聲あつて、（ト此の時奥にて、）

清盛　その儀は淨海申し聞かさう。

成親　何と。

〽襖左右に押開き、揺ぎ出でたる清盛入道、四邊睨んで座に附けば、
ト奥より以前の清盛好みの鎧、籠手、脇當、馬手差、陣立のこしらへ、上へ法衣を着し出來り、跡より陣立の小姓二人附太刀を持ち附添ひ出來り、清盛床几に掛る、成親思入あつて、

清盛　して又我等に、御不審とは、
成親　不審といふは外ならず、御身は平治の合戰に死に至るべき所なりしを、内府重盛の請ひに任せ其の儘許し置き、今官位といひ所領といひ不足なき身と榮ふるは、是れ皆平家の恩澤ならずや、其の恩義を忘却なし、何恨みあつて徒黨を語らひ、謀叛の企ていたされしぞ。
清盛　入道殿か直々に此の成親へお尋ねとは、如何なる事と存ぜしに、徒黨を語らひ謀叛とは事珍らしきお尋ねごと、何を證據にのたまふぞ。
成親　ヤアしら〴〵しき其の詞、既に汝は院の御所の執事たるゆゑ、法皇の御寵愛を笠に着て、謂れなきに徒黨を語らひ、此の程洛東鹿ケ谷の山莊へ會合なし、御身を始め俊寛等が我が平家を滅すべき軍の評定いたせしこと、注進あつて慥に聞く。
〽言はれてはつと的中せしが、（ト成親ぎつくり思入あつて）
成親　如何にも鹿ケ谷の山莊へ親友の者打ち寄りて酒宴を設けし事ありしが、平家を滅す軍議などゝは

そは跡方もなきことなり、察する所遺恨あるもの我れを罪に落さんと、讒言なせしに疑ひなし、この身に嘗て覺えござらぬ。
清盛　えゝ慥な證據あるゆゑに、今日御身を糺命いたすが、それでも知らぬと言はるゝか。
成親　元より存ぜぬことなれば知らぬといふより外になし。
清盛　むゝ、知らぬとあらば證據を見せん、やあ〳〵行綱はや參れ。
行綱　はあゝ、
〽はつと答へて此方より立出る多田の藏人行綱、南無三露顯なしたりと、成親吐息をつくばかり、
ト下手より行綱陣立のこしらへにて出る、成親見てぎつくり思入ある、清盛こなしあつて、
清盛　其の日山莊へ會合なし、脱れ難なく其の場にて一味には加はつたれど、及ばぬ事と知るがゆゑ、我れへ注進なしたる行綱。
行綱　當時旭の登るが如き勢ひ盛んの平家方、それを討んなんどゝは、龍車に向ふ螳螂の及ばぬ企て知つたるゆゑ、貴卿を始め俊寛西光會合なせし一伍一什、逐一注進なしたれば、最早脱れぬ成親卿、包まず明しておしまひなされい。

成親　こは行綱には何と申すぞ、鹿ヶ谷の山莊は都の内にて優れたる僧坊ゆゑに親友が、保養の爲に酒宴の集ひ、それを軍議をなせしなどゝは、我に何等の遺恨あつて、左樣な僞り申せしぞ。

行綱　いや僞りとは何が僞り、此の行綱は源氏ゆゑ、大將となり恨みある平氏を討てと言はれたを、よもや忘れはなさるまい。

景友　一旦一味合體せし、多田の藏人行綱どのが、變心なして清盛公へ注進ありし上からは、

貞國　何やう陳じめさるとも、謀叛の企せぬといふ、身の言譯は立ちますまい。

成親　よしなき事を行綱が申せしゆゑに思はざる、身に疑ひを受くれども、此の成親が妹は小松殿の妻なれば因みも深き兄妹中、何ゆゑに平家を討たん企てなさうや、これにて多田の行綱が僞りなるを淨海殿、よう御賢慮下されい。

〽詞を盡して陳ずれば、入道くわつと眼をいからし、

清盛　ヤアまざ〳〵しき陳じ立て、倅重盛に緣あるゆゑ詞を和らげ尋ぬる内、其の身の罪を後悔なし我れへ詫びなば穩便に計らふべしと思ひしに、かゝる慥な證據あつても知らぬと言ひ張ろこゝからは拷問なして白狀さす。こりや者共、叛逆人の長たる成親、此の場に於て繩かけい。

重能　はッ、君の御詫に候へど、成親公は大納言の官位にまします御方なれば、

盛次　武士の身の我々が例知らざる繩目の拷問、後難の程も計りがたし、此の儀は御用捨、

兩人　下さりませう。

清盛　やあ、太政大臣の清盛が申し附くるに何憚り、こりや經遠、彼れに繩かけ拷問いたせ。

〽烈しき上意に經遠も、暫し默して居たりしが、遙こなたに聲あつて、

トこの時上手の門の内にて、

宗盛　やあ〳〵者共氣遣ひいたすな、謀叛の長たる成親卿、宗盛直に捕縛なさん。

成親　何と、

〽見やるあなたの門内より右大將平の宗盛、今日の事件に甲冑の一際目立つ籠手脛當輝く父の七光り流石に將と知られけり、淨海見るに打ち笑みて、

ト宗盛陣立の裝にて出來り床几へ掛る、清盛思入あつて、

清盛　おゝ待ち兼ねし倅宗盛、よき所へ參りしぞ。して其の方には法住寺の御所へ奏達いたせしか。

宗盛　はッ、父上の仰せの如く今般野心ある者共が、我が平氏を亡さんと鹿ヶ谷へ會合なし、軍議を計る棟梁は院の御所の執政たる新大納言成親、まつた西光、俊寛を始めとして、其の外一味徒黨の者多人數のよし承はる、一々彼等を召捕つて、詮議を遂げし上、委細奏聞し奉つると、檢非

遣使阿部の資成を以て、奏達いたしてござりまする。（ト是れを聞き成親思入あつて、）

成親　すりや此の事を右大將より、御所へ奏聞あつたるとか。

〽えゝ、しなしたり一大事と、我れを忘れて立上るを、（ト成親思はず立上るを、）

景友　身動きめさるな、

兩人　成親卿、お下にござれ。（ト引き据ゑる、）

清盛　して奏聞を遂げし後、御受けはなかりしか。

宗盛　資成が申すには、奏達の趣き聞しめされ、暫し御應へもあらざりしが、重に角よきに計ふべしと仰せられしと承はる。

清盛　むゝ、左もあらん〳〵、平氏を討たん會合は、全く君の御心より出でし事に疑ひなし、此上は猶豫いたさず、重能盛次鎧うてまゐれ。

重能　すりや、我々も甲冑を、

清盛　自然の用意、早くいたせ。

重能盛次　はッ、畏まつてござりまする。

〽仰せに其の儘立つて行く、（ト重能盛次下手へ入る。）

清盛　いざ、此の上は、宗盛早く。

宗盛　はッ。（ト宗盛立ち掛り、）出奏濟めば科ある其許、右大將たる宗盛が直々捕縛仕らん、お覺悟めされ成親卿。

〽取縄持つて立ち掛るを、成親きつと押し留め、

ト宗盛立ち掛り、成親の裝束を脱せんとするを留めて、

成親　こは無體なり右大將、入道殿へも申す如く僕謀叛の企てありとは、跡方もなき讒者の舌頭、元より成親平家とは因みを結びし仲といひ、聊か仇も恨みもなし、さら〳〵討たんなぞといふ志しのあらざるぞ。

行綱　まだ〳〵知らぬと言はるゝか、其の場に列なる行綱が注進なせし上からは、所詮脱れぬ成親卿、陳じ立てをめされずと、早く白狀いたしめされ。

成親　やあ人でなしの多田の藏人、いらぬ口出し控へ居らう。

宗盛　いや御身が平家を恨むことは、疾くより聞いて居ることだ。

成親　なに、鹿が平家を恨むとは。

宗盛　恨むは御身大將の職をかねゞ〳〵望みし所、重盛左近衛の大將より内大臣の長官に進み、某右近

衛の大將に轉じたるが羨ましく、狹き心に妬みを生じ、法皇へ進め奉つり平氏を討たん棟梁は、御身なること行綱が注進に依つて慥に聞く、何と相違はあるまいが。

成親　むゝ、

我が心腹を成親はさゝれて陳ずる詞もなく、悔し涙に袖しぼり、さしうつむくを、うち見やり、

ト此の内成親無念の思入、宗盛思入あつて、

宗盛　平家を討たん望み叶はず、嘸や殘念至極であらうが、これも時節とあきらめ召され、いで大將に任官した、此の宗盛が捕縛なさん。

手づから掛くる縛めに、成親卿は歎息なし、

成親　この成親は忠義を勵み、天下の無事を計れども、神の冥助もあらざるは、はて、是非もなき時代ぢやなあ。

ト成親ちつと思入、宗盛は成親の裝束を抱へて二重へ上り、清盛の前へ置き、床几へ掛る、清盛いましきこなしあつて、

清盛　こりや經遠、成親を鞭つて、謀叛の實事を白狀させよ。

經遠　はッ、

はッと答へて傍より笞取り出し立ち掛れば、

ト經遠跳への竹べいを持つて成親に立ち掛り、

君の上意だ成親卿、平家を討たんと會合なし謀叛の企てなしたる事、包み隱さず白狀めされ。

成親　又しても〳〵、此の身に知らぬ謀叛呼はり、白狀いたす覺えはない。

行綱　この行綱が證人なるに、まだ其のやうに陳じめさるか。

清盛　疾く〳〵打つて白狀させい。

經遠　はッ。

又も笞を取り直し、りう〳〵はつしと打ち据れば、苦痛を怺ゆる成親卿無念涙に暮れたまふ、かゝる所へ瀨尾が立ち出で、

ト又經遠成親を續け打ちに打つ、成親苦しき思入、此の時下手より以前の衆康、陣立にて出で血に染みし白無垢へ首を包みしを抱へ出來り、跡より軍兵二人附添ひ出來る、これにて經遠笞を止める。

宗盛　やあ、それへ參りしは瀨尾の太郎、

清盛　汝へ申し附け置いたる西光は如何いたした。

兼康　はッ、御諚に任せ獄屋へ曳き、彼めを拷問なせし所、飽くまでしぶとき根性にて、いつかな白狀せぬのみか、苦しむ際には大音にて君の御事を惡口なし、臣等が聞くも忌々しく、殊に他聞を憚りますれば、いつそのこと責め殺さんと、手酷き拷問なせし上火責めになさんといたせしを、彼れも是れには恐れしやら、斯くまで相國清盛を辱しめたる上からは、所詮命は助からぬ、今ぞ白狀いたす程に筆紙を貸せと申すゆゑ、望みの通りあてがひしに勞れ果てたる身を以て、自身に書きたる此の口書、いざ御覽下さりませう。

〽懷中なせし立文を差出せば、手に取りて入道篤と打ち見やり、

ト兼康鎧の引合せより立文を出し清盛に渡す、清盛開き見て、

清盛　流石は剛氣の西光法師、この期に至り字性も亂れず、敵ながらも天晴なり。

宗盛　して、西光は如何せしぞ。

兼康　謀叛の企て白狀せしゆゑ、仰せに任せ西光は、斬首いたしてござりまする。

〽血に染む首級の包みを出せば、（ト首を包みしまゝ出す。）

清盛　おゝ出來す〳〵、よく西光に白狀させた。宗盛この口書を讀み上げい。

宗盛　はッ、（ト口書を取り成親に向ひ。）西光法師が罪に服し、自ら書きし此の口書、心を定めて篤と聞かれよ。

〽口書を開き高らかに、（ト宗盛口書を開き。）

「此の程法勝寺の御所に於て新大納言成親卿、院宣なりと諸士に申し軍の評議ありしゆゑ、凡そ院中に使はるゝ者誰か違背申すべき、豫て天の道に背く平家の一門討滅し根を斷つて葉を枯す思ひ立ゆゑ一味の輩盟約せしめ候也、依て西光も徒黨に與したり、院宣の趣き斯くの通り、」

（ト讀み清盛に渡す。）かゝる慥な證據あつても、御身は知らぬと言張るか、有無の返事は、如何なるぞ。

〽口書を目先きへ差し附けられ、何と答へんやうもなく、涙あふるゝ目を閉ぢて、さしうつむけば瀨尾太郎、

ト成親目を閉ぢつと思入、兼康白衣を取り誂への西光の首を出す、清盛快き思入、兼康切首な成親に見せ、

兼康　清盛公を罵りし罪は忽ち身に報い、火水の拷問受けし上錆びたる刄で切つたる此の首、眼を開いて是れを見られよ。

〽さし出す者は血に塗れ、口は耳まで擘く有樣いはん方なき怖しさ、身の毛もよだつばかり

なり。

ト此の内兼康首を成親へ差出す、成親これを見て無念の思入、兼康は首を衣に包む、行綱思入あつて、

行綱　西光法師が白狀にて、成親卿が叛逆の棟梁たること知れたる上は、最早拙者にお暇を何卒下し置かれませう。

清盛　おゝ、行綱ことは昨夜より嘸かし勞れしことならん、屋敷へ歸つて休息いたせ。

行綱　左樣ござれば御意に隨ひ、

清盛　追つて恩賞いたすであらう。

行綱　はゝ、有難う存じ奉つりまする。

〽三拜なして行綱はおのが屋敷へ立ち歸る。（ト行綱皆々へ辭儀をなし、下手へ入る。）

成親　言ひ甲斐なくも西光が白狀なせし上からは、是非なきことゝ覺悟をなせば、命を取られよ淨海殿

清盛　むゝ、さりとてはよい覺悟、叛逆の罪極まる上は臣下の者へ申し附け、首を刎ぬべき所なれど、

一旦緣組む因みもあれば、此の入道が刄を以て手づから引導渡してくれん。

成親　すりや、御身が手づから我が命を、

清盛　おゝ、言ふにや及ぶ、やあ〳〵民部太郎、予が長刀早く持て。（ト奥にて、）

皆々　はあゝ。

〽はつと答へて民部太郎君の長刀携へて、立出る跡に恩顧の面々豫ての下知に鎧を着し、さも勇しき出立にて、廣庭狹しと居並んだり。

ト これへ螺の音を冠せ、以前の重能鎧陣立裝にて誂への清盛の長刀を持ち、盛次外に四人何れも鎧裝にて出る、續いて軍兵大勢蝶の旗、馬印、などを持ち出來り、皆々下手へ控へる。

重能　先刻君の御諚に任せ、某はじめ恩顧の者、

盛次　火急のことゝ承はり、

一　早速鎧を着用なし、

二　軍の用意仕つり、

三　君の御下知を承はり、

四　直に出陣仕らんと、

重能　參着いたして、

六人　ござりまする。

宗盛　おゝ早速の着到、太儀々々。

〜成親卿は打ちおどろき、

成親　見れば諸臣が甲冑なし、得物を携へ厳しき此の出立ちは何事なるぞ。

宗盛　何事とは事をかしや、平家を討たんと徒黨せし謀叛に與なす族をば、片端から討取る手配り。

清盛　仕儀によりなば院の御所へも。

成親　やゝ、すりや院の御所まで。

清盛　やがて四海を併呑なす、平家の武威を顯はす所存。

成親　その所存をば知つたるゆゑ、會議なせしも水の泡、斯くまで我意に募れるに天の御罰はあらざるか。

清盛　いで、軍神の血祭に、御身が首を刎ねてくれん。

〜清盛庭へ下り立ちて、長刀の鞘拂ひ除け、

ト清盛平舞臺へ下り、金剛草履をはき、長刀を取り鞘を拂ひ、成親の目先きへ突き出す。

これこそ其のかみ厳島　明神の應護に依り授つたる長刀にて、今清盛の手に掛り命を落すは末期の仕合せ、誅に伏せし西光が首は朱雀大路へ晒し、今この長刀で掻き落す御身の首は、法住寺の御所へ持ち行き、謀叛の實否を糺さにや置かぬ。

成親　すりやそれゆゑに此の如く、甲冑を以て身を固め、我が首持つて院參なし、武威に脅して法皇を擒になさん心よな。

清盛　おゝ、知れた事だわ。

成親　我一命は惜しまねど、君の御身の一大事。

〜我れを忘れてよろぼひ立つを、（ト思はず立ち掛るを引き据ゑる。）

清盛　その幸先きに、成親御身を、

宗盛　斬首なすのが、

皆々　則ち血祭り。

清盛　今が最期ぞ、覺悟せよ。

〜既に切らんず其の折柄、

ト清盛長刀を構へ成親へ立ち掛る、ばた〳〵になり雜掌出來り、

雜掌　はッ、申し上げまする、小松内府大臣重盛公、我が君へ申し上げ度き事ござつて、只今火急の御參館にござりまする。（ト言ひ捨て、引返して入る。）

清盛　なに、重盛が入來とな。（ト清盛長刀を引き思入）

宗盛　兄の入來とあるからは、斬首は暫くお待ちなされい。

清盛　むゝ、

宗盛　拙者は兄を出迎ひ申さん。

〽舍兄の入來に宗盛が出迎ふ姿甲冑を、脱ぐに脱がれぬ淨海が素絹の衣早速にも、鎧ひし上へ袈裟打ちかけ、いらだつ心和ぎて念誦してこそ在しけれ。〽程もあらせず、甲冑にきらめく兵士の其の中へ重盛公は官服の、烏帽子直垂姿にて悠然として入りたまへば、宗盛見るより袖を控へ、

トこれへ小鼓をあしらひ花道より重盛烏帽子素袍のこしらへにて出來り、跡より小姓烏帽子素袍小さ刀にて重盛の太刀を持ち附き添ひ出て來る、宗盛花道まで出迎ひ辭儀をなし、重盛と入替り、思入あつて宗盛重盛の袖を控へ、

宗盛　あいや兄上、暫く。

重盛　何事なるぞ。

宗盛　平家を討たんと成親卿が、謀叛の企てあつたる事聞き及ばれての御入來なるか、かゝる大事に父上には既に鎧を着用めさる、それに御身は常の服、餘りといへば似合しからず。

〽いへども聞かぬ面色に行き過ぎたまふを又引き留め、

ト重盛聞かぬ顔をして行くゆゑ、宗盛袖を控へ、

せめて腹卷小具足に召替へられて然るべし。

〽重盛につこと打ち笑みたまひ、（ト重盛宗盛を見返り、）

重盛　君へ對し違勅の逆臣、叡慮を惱まし奉つるを大事とこそは申すなれ、私事に物々しきかゝる出立ちなしたるか、謀叛の者は何れにあるぞ、何小具足に及ばうぞ。

〽袖を拂うて悠々と廣緣近く入りたまへば、並居る兵士も辭儀をなし、恐れ入つてぞ見えにける。

ト重盛思入あつて小姓附添ひ舞臺へ來る、皆々顔見合せ思入、此の内清盛二重へ上る。

鹿ヶ谷にて軍議を計りし西光法師を生捕て、斬首なしたる其の上に、此の亞相をも失なはんとは以ての外のことなるぞ、よもや父上の仰せにてはあるまじきに、宗盛汝が計らひなるか。

宗盛　全く以て左にあらず。

重盛　こりや經遠、兼康、忌はしき其の縄目を、早く解け。

經遠　でも、此の縄目は、
兼康
重盛　四海の政務を預かる重盛、予が詞を用ひぬか。
經遠　さあ、それは、
兼康
重盛　えゝ、解けと申すに、（トきつと言ふ。）
經遠
兼康　へゝい。

〰鶴の一聲主從が顔見合せて是非なくも、縛めの縄解きにける。

ト經遠兼康如何せんと清盛を見る、清盛解けといふ思入をする、これにて成親の縄を解く。

重盛　公卿の御身にて例なき拷問の答、正しくこれは經遠兼康、汝等が仕業ぢやな。
經遠　いや、これもやつぱり、
兼康
經遠　我が君の、
兼康
重盛　いや、假令仰せがあらうとも道に背きし事柄は諫めを入れるが臣下の道、刑の疑はしきは輕くせよ、功の疑はしきは重くせよとの本文、など重盛を憚らざりし、田舍人とはいひながら、返す返すも無骨千萬。
經遠　恐れ入つてござりまする。
兼康

重盛　こりや重能、盛次、
重能
盛次　はッ、
重盛　この卿は平家に深き因みあれど、それは内證私事、今日謀叛の棟梁ゆゑ、厚く藥用の手當をなし、別間に於て勞り申せ。
重能
盛次　畏まつてござりまする。
重能　重盛公の仰せにござれば、
盛次　成親卿には御保養あつて、
重能
盛次　然るべう存じまする。

〰敬ひ申せば嬉しげに、（ト成親嬉しき思入あつて）

成親　今淨海入道の刃の下に死すべき成親、しばし助かる玉の緒も繋がる緣の内府の情、
重盛　答を加へし無道の計らひ、さりながらお命までのことはよもあらじ、何卒御用捨下されい。
成親　此の身は如何なる呵責に遭ふとも、更々それは厭ひはせぬ、只我が君の御身の上、よきに計らひたまはれと。
重盛　その儀は貴卿の仰せなくとも、重盛承知仕つる。